秋田県文化財調査報告書第309集

元木山根II遺跡
毘沙門遺跡
六ツ鹿沢遺跡

―日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書III―

2000・9

秋田県教育委員会

元木山根II遺跡
毘沙門遺跡
六ツ鹿沢遺跡

— 日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書III —

2000・9

秋田県教育委員会

序

本県にはこれまでに先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残され、約4,500箇所の遺跡が発見されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や文化を理解し、未来を展望した香り高い文化を育んでいくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の整備は、ゆとりと活力に満ちた新しいふるさと秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。

本教育委員会では、これら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保護し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、日本海沿岸東北自動車道建設に先立って、平成11年度に昭和町の元木山根II遺跡と毘沙門遺跡及び飯田川町の六ツ鹿沢遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。元木山根II遺跡では平安時代の集落跡、毘沙門遺跡では近世から近代にかけての集落跡が見つかり、当時の人々の生活の一端が明らかになっております。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財の保護と活用に役立てば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本書の刊行にあたり、ご協力をいただきました日本道路公団東北支社秋田工事事務所、井川町教育委員会、昭和町教育委員会、飯田川町教育委員会をはじめ関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成12年9月

秋田県教育委員会

教育長　小　野　寺　　清

例　言

1　本報告書は、平成11年度に発掘調査を実施した、日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る元木山根Ⅱ遺跡・毘沙門遺跡・六ツ鹿沢遺跡の発掘調査報告書である。

2　本書の挿図中に使用した土層表記法は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖　1997年版』を使用した。

3　自然科学的分析（C^{14}年代測定）は株式会社古環境研究所に依頼した。

4　本報告書に使用した地形図は、建設省国土地理院発行25,000分の１「大久保」である。

5　本遺跡の調査ならびに報告書刊行にあたり、栗山知士氏よりご指導、ご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。

6　本報告書の執筆・編集は、松本昌樹、小山有希がおこない、伊藤攻、伊藤一彦、齊藤浩志、永澤智子の協力を得た。

7　本遺跡調査において出土した資料、整理作業で生じた各種のデータ類は、秋田県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　例

1　本報告書に収載した遺跡実測図に付した方位は座標北である。

2　土層注記は基本層位にローマ数字を用いた。

3　挿図中の遺構・遺物に係る凡例は次の通りであり、ここに掲載以外の事項は各挿図に記している。遺構の略号は以下に示すとおりである。

ＳＩ　竪穴住居跡	ＳＢ　掘立柱建物跡	ＳＫ　土坑
ＳＫＰ　柱穴様ピット	ＳＮ　焼土遺構	ＳＸ　その他の遺構

4　拓本は基本的に左から外面・断面図・内面の順に配置してある。ただし、毘沙門遺跡で出土した擂鉢のみ内面・断面図・外面の順に配置した。

目　次

序
例言 …… ii
凡例 …… ii
目次 …… iii
挿図目次 …… iv
表目次 …… iv
図版目次 …… iv

はじめに …… 1
　発掘調査に至る経過 …… 1
　調査要項 …… 2
遺跡の立地と環境 …… 3
　遺跡の位置と立地 …… 3
　歴史的環境 …… 7

元木山根Ⅱ遺跡
第１章　遺跡の概要 …… 13
　第１節　遺跡の概観 …… 13
　第２節　調査の方法 …… 13
　第３節　調査の経過 …… 13
第２章　調査の記録 …… 17
　第１節　基本層序 …… 17
　第２節　検出遺構とその遺物 …… 17
　第３節　遺構外出土遺物 …… 31
第３章　自然科学的分析 …… 37
第４章　まとめ …… 38

毘沙門遺跡
第１章　遺跡の概要 …… 47
　第１節　遺跡の概観 …… 47
　第２節　調査の方法 …… 47
　第３節　調査の経過 …… 48
第２章　調査の記録 …… 51
　第１節　基本層序 …… 51
　第２節　検出遺構とその遺物 …… 51
　第３節　遺構外出土遺物 …… 65
第３章　まとめ …… 72

六ツ鹿沢遺跡
第１章　遺跡の概要 …… 83
　第１節　遺跡の概観 …… 83
　第２節　調査の方法 …… 83
　第３節　調査の経過 …… 83
第２章　調査の記録 …… 84
　第１節　基本層序 …… 84
　第２節　調査の結果 …… 84

挿図目次

第１図　遺跡位置図……3
第２図　遺跡位置図（１／25,000）……4
第３図　遺跡周辺地形図……5
第４図　遺跡周辺地質図……6
第５図　周辺遺跡位置図……8

元木山根Ⅱ遺跡
第１図　調査範囲図……15
第２図　グリッド配置図……16
第３図　遺構配置図……18
第４図　ＳＩ01竪穴住居跡……19
第５図　ＳＩ01竪穴住居跡遺物出土状況（１）20
第６図　ＳＩ01竪穴住居跡遺物出土状況（２）21
第７図　ＳＩ01竪穴住居跡出土遺物（１）……23
第８図　ＳＩ01竪穴住居跡出土遺物（２）……24
第９図　ＳＩ01竪穴住居跡出土遺物（３）……25
第10図　ＳＩ01竪穴住居跡出土遺物（４）……26
第11図　ＳＩ04竪穴住居跡……28
第12図　ＳＫ02・03・05・09土坑……30
第13図　遺構外出土遺物（１）……32
第14図　遺構外出土遺物（２）……33
第15図　遺構外出土遺物（３）……34
第16図　遺構外出土遺物（４）……35

毘沙門遺跡
第１図　調査範囲図……49
第２図　グリッド配置図……50
第３図　遺構配置図……52
第４図　ＳＫ01・02・03土坑……53
第５図　ＳＫ04・09土坑……54
第６図　Ａ区東側遺構配置図……56
第７図　ＳＢ10掘立柱建物跡……57
第８図　ＳＢ10掘立柱建物跡柱穴（１）……58
第９図　ＳＢ10掘立柱建物跡柱穴（２）……59
第10図　遺構内出土遺物……64
第11図　遺構外出土遺物（１）……67
第12図　遺構外出土遺物（２）……68
第13図　遺構外出土遺物（３）……69
第14図　遺構外出土遺物（４）……70

六ツ鹿沢遺跡
第１図　調査範囲図……85
第２図　復元地形図……86

表目次

第１表　周辺の遺跡（１）……9
第２表　周辺の遺跡（２）……10

元木山根Ⅱ遺跡
第１表　遺構内出土遺物計測表……27
第２表　遺構外出土遺物計測表……36

毘沙門遺跡
第１表　ＳＢ10掘立柱建物跡柱穴計測表……60
第２表　柱穴跡計測表（１）……61
第３表　柱穴跡計測表（２）……62
第４表　柱穴跡計測表（３）……63
第５表　遺構外出土遺物計測表……71

図版目次

元木山根Ⅱ遺跡
図版１　調査区全景
図版２　ＳＩ01竪穴住居跡
図版３　ＳＩ04・ＳＫ02・03・05・09
図版４　出土遺物
図版５　出土遺物
図版６　出土遺物

毘沙門遺跡
図版１　調査区全景・近景
図版２　ＳＫ04土坑
図版３　ＳＫ01・02・03・09土坑
図版４　ＳＢ10掘立柱建物跡柱穴
図版５　ＳＢ10掘立柱建物跡柱穴
図版６　出土遺物
図版７　出土遺物
図版８　出土遺物

六ツ鹿沢遺跡
図版１　調査区遠景・近景
図版２　遺跡全景・地割れ断面

はじめに

発掘調査に至る経過

秋田県では、太平洋側や首都圏方面への高速交通網の充実を目的として秋田新幹線の開業、大館能代空港の開港、秋田自動車道北上～昭和・男鹿半島ＩＣの開通をおこなってきた。1997(平成９)年２月にはさらに新潟市から青森市までの区間が日本海沿岸東北自動車道の路線指定を受けた。県内の昭和町～琴丘町間については2002(平成14)年の開通を予定している。

秋田県教育委員会は1996(平成８)年９月18・19日と12月17日～19日の２度にわたり、昭和男鹿半島ＩＣから琴丘ＩＣまでの延長20.7kmについて、遺跡分布調査をおこなった。この分布調査により、周知の遺跡３ヶ所と新発見の遺跡12ヶ所が確認され、いずれの遺跡についても範囲確認調査が必要とされた。このうち、新発見の元木山根II遺跡は縄文時代の遺跡、六ツ鹿沢遺跡は中世の館跡であると推定された。

1998(平成10)年３月４日～６日に路線内の再試掘調査を実施し、新たに４ヶ所の遺跡が確認され、いずれの遺跡についても範囲確認調査が必要とされた。このうちの１ヶ所が毘沙門遺跡であり、土師器片が出土したことから古代の遺跡であると推定された。

これを受けて、1999(平成11)年度に秋田県埋蔵文化財センターでは３遺跡の範囲確認調査をおこない、遺跡の範囲と性格が判明すれば、発掘調査を実施することになった。

元木山根II遺跡では1999(平成11)年６月７日～18日にかけて範囲確認調査をおこない、平安時代の集落跡であることが判明したので、同年７月19日～９月２日にかけて発掘調査を実施した。

毘沙門遺跡では1999(平成11)年３月15日～25日にかけて範囲確認調査をおこない、近世以前の掘立柱建物跡を中心とした古代の可能性が高い集落跡であることが判明したので、同年６月14日～７月15日にかけて発掘調査を実施した。

六ツ鹿沢遺跡では1999(平成11)年５月17日～30日にかけて範囲確認調査をおこない、引き続き５月31日～６月３日にかけて発掘調査を実施した。

調査要項

遺　跡　名	元木山根Ⅱ遺跡(もときやまねにいせき)	遺跡略号：4ＭＫＹＮⅡ
	毘沙門遺跡(びしゃもんいせき)	遺跡略号：4ＢＳＭ
	六ツ鹿沢遺跡(むつろくざわいせき)	遺跡略号：4ＭＲＺ
所　在　地	元木山根Ⅱ遺跡：秋田県南秋田郡昭和町大久保字元木山根286外	
	毘沙門遺跡：秋田県南秋田郡昭和町豊川龍毛字上斉藤田12	
	六ツ鹿沢遺跡：秋田県南秋田郡飯田川町和田妹川字六ツ鹿沢53	
調査面積	元木山根Ⅱ遺跡：1,600㎡	
	毘沙門遺跡：940㎡	
	六ツ鹿沢遺跡：900㎡	
調査目的	日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財事前調査	
調査期間	元木山根Ⅱ遺跡：平成11年７月19日～９月２日	
	毘沙門遺跡：平成11年６月14日～７月15日	
	六ツ鹿沢遺跡：平成11年５月31日～６月３日	
調査主体者	秋田県教育委員会	
調査担当者	元木山根Ⅱ遺跡・毘沙門遺跡	
	小山有希(秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第２科文化財主事)	
	伊藤　攻(秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第２科非常勤職員)	
	齊藤浩志(秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第２科非常勤職員)	
	六ツ鹿沢遺跡	
	松本　昌樹(秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第２科学芸主事)	
	伊藤　　攻(秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第２科非常勤職員)	
	齊藤　浩志(秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第２科非常勤職員)	
調査総務担当	佐藤　　悟(秋田県埋蔵文化財センター総務課課長)	
	菅原　　晃(秋田県埋蔵文化財センター総務課主査)	
	八文字　隆(秋田県埋蔵文化財センター総務課主事)	
	佐々木敬隆(秋田県埋蔵文化財センター総務課主事)	
調査協力機関	日本道路公団　昭和町教育委員会　井川町教育委員会　飯田川町教育委員会	

遺跡の立地と環境

遺跡の位置と立地

六ツ鹿沢遺跡の所在する南秋田郡飯田川町、元木山根II遺跡・毘沙門遺跡の所在する南秋田郡昭和町は、それぞれ南北に隣接し、八郎潟残存湖岸の南東部、出羽丘陵西縁に位置する。出羽丘陵から八郎潟残存湖へは様々な小河川が西流しているが、飯田川町、昭和町では妹川、豊川が流れる。妹川は和田妹川地区と金山地区の間に大堤が構築され、農業用水路として河川改修されている。豊川は俎山(721.8m)等の山地に水源を発し、段丘を形成しながら八郎潟残存湖に注ぐ。

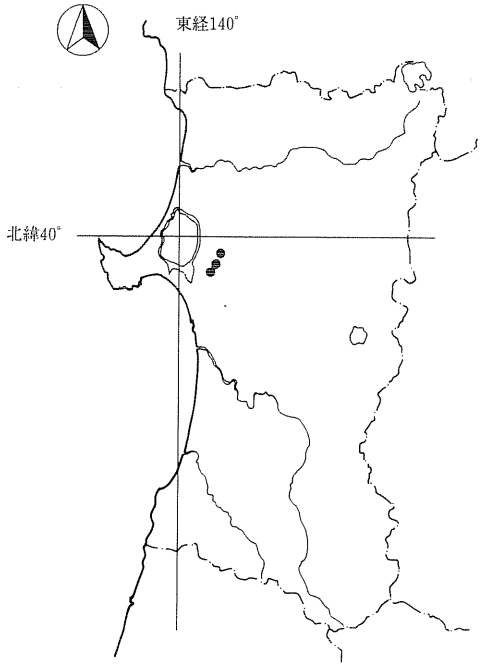
元木山根II遺跡、毘沙門遺跡、六ツ鹿沢遺跡はいずれも国道7号線の東側に隣接する(第2図)。

元木山根II遺跡は、秋田自動車道昭和男鹿インターから北に約0.8km、国道7号線を挟んだ元木山公園の東側に位置している。六ツ鹿沢遺跡はＪＲ奥羽本線羽後飯塚駅から南東に約2km、毘沙門遺跡はＪＲ奥羽本線大久保駅から東に約1.5kmのところにある。

遺跡周辺の地形は、八郎潟残存湖岸から出羽丘陵西部に向けて低地(湖岸平野)、段丘(砂礫段丘)、丘陵地、山地に分けられる(第3図)。残存湖岸の低地は、琴丘町鯉川から秋田市金足まで狭長な沖積低地を形成している。低地側辺の丘陵末端部では段丘が形成されている。

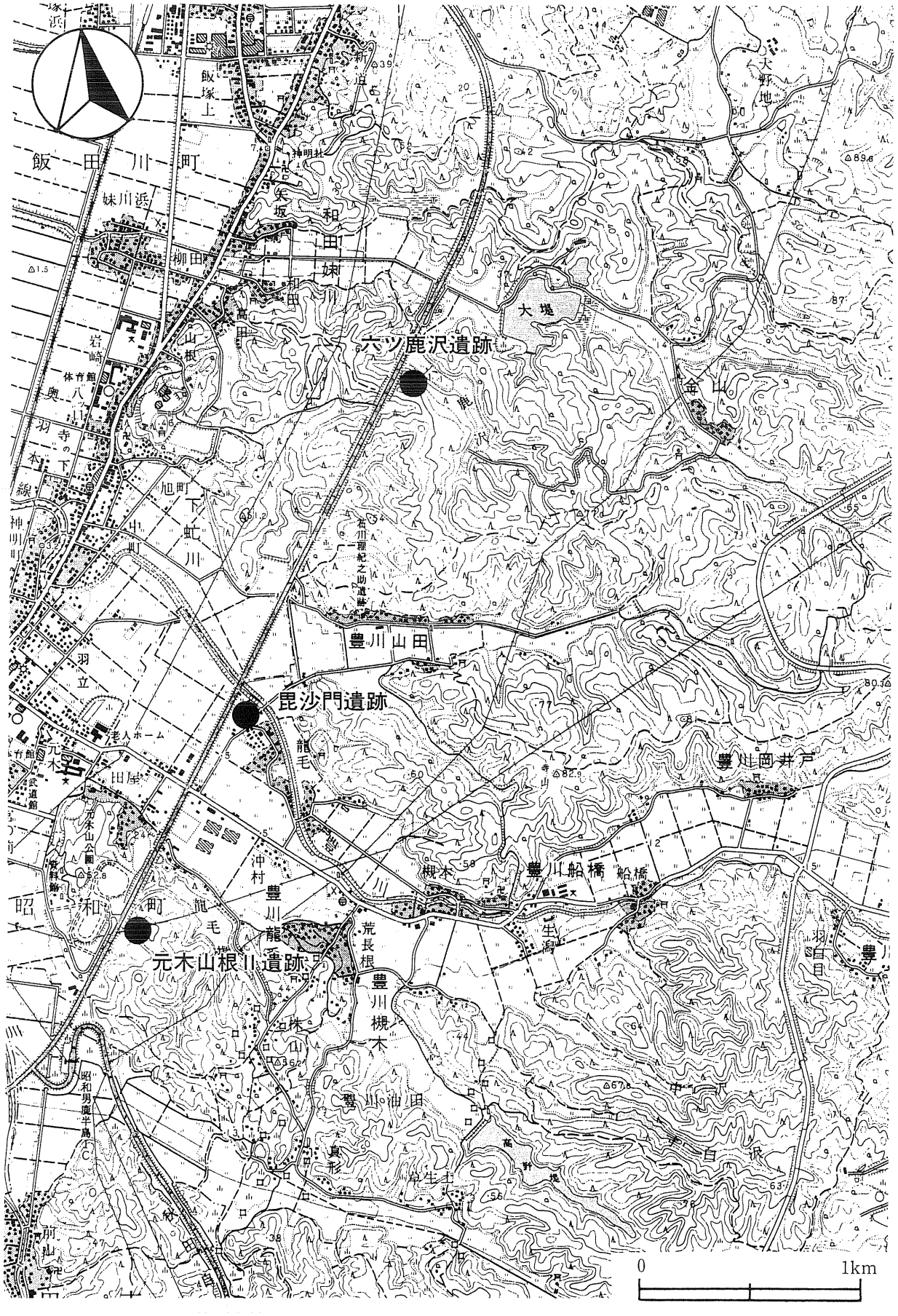
地質は新第三紀中新世の船川層(msF)、天徳寺層(slT)、鮮新世の笹岡層(msS)、第四紀更新世の潟西層(sgK)、段丘堆積物(tr)、沖積低地堆積物(ma、sa3)から構成されている(第4図)。

六ツ鹿沢遺跡は新第三紀の天徳寺層であるシルト岩質の丘陵地、妹川水系六ツ鹿沢尾根上に位置する。毘沙門遺跡は完新世の豊川によって形成された平坦な沖積低地に、元木山根II遺跡は更新世の丘陵地で西に向かって舌状に張り出した台地上に立地している。

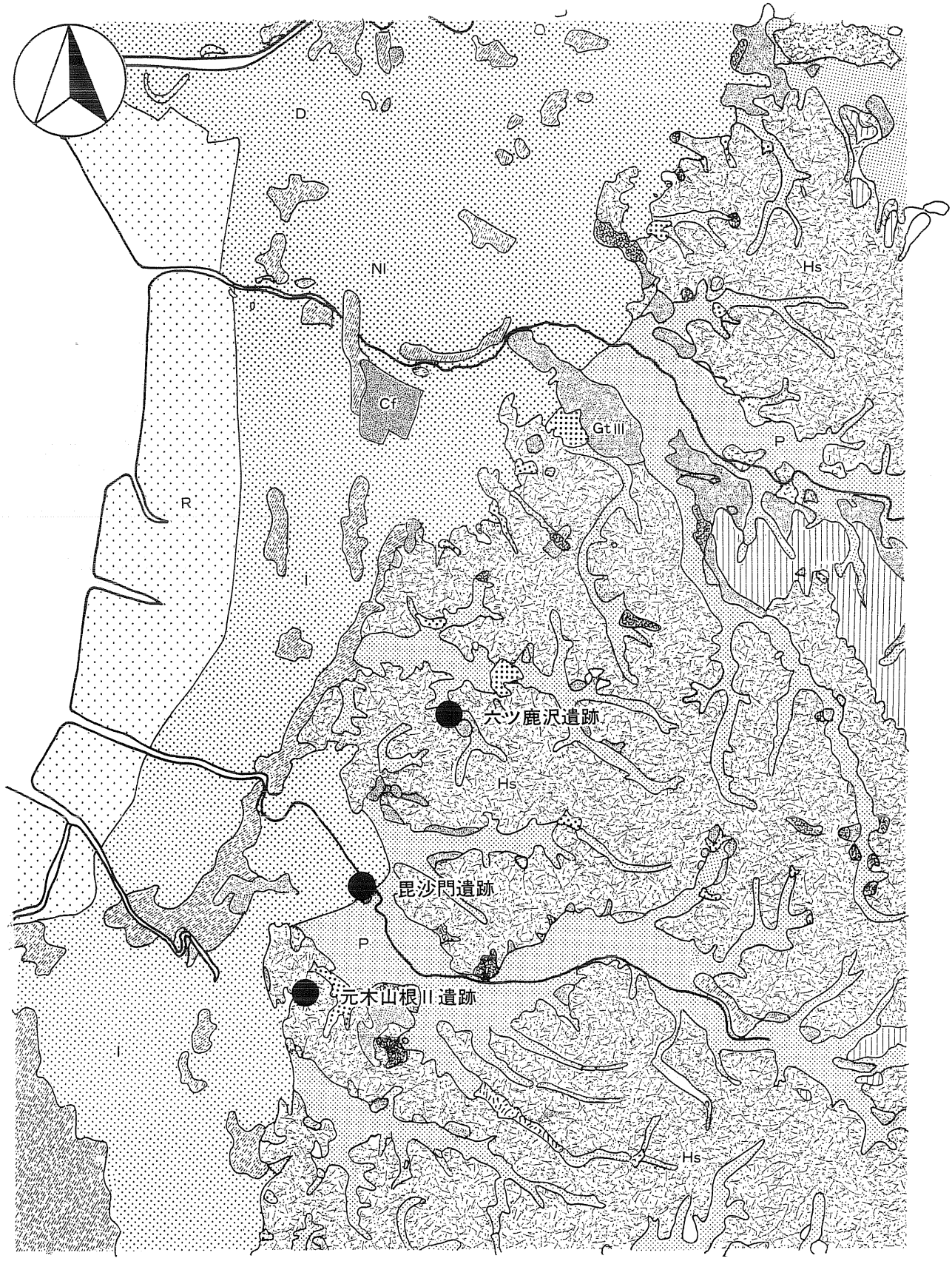


第1図　遺跡位置図

北から　六ツ鹿沢遺跡
毘沙門遺跡
元木山根II遺跡



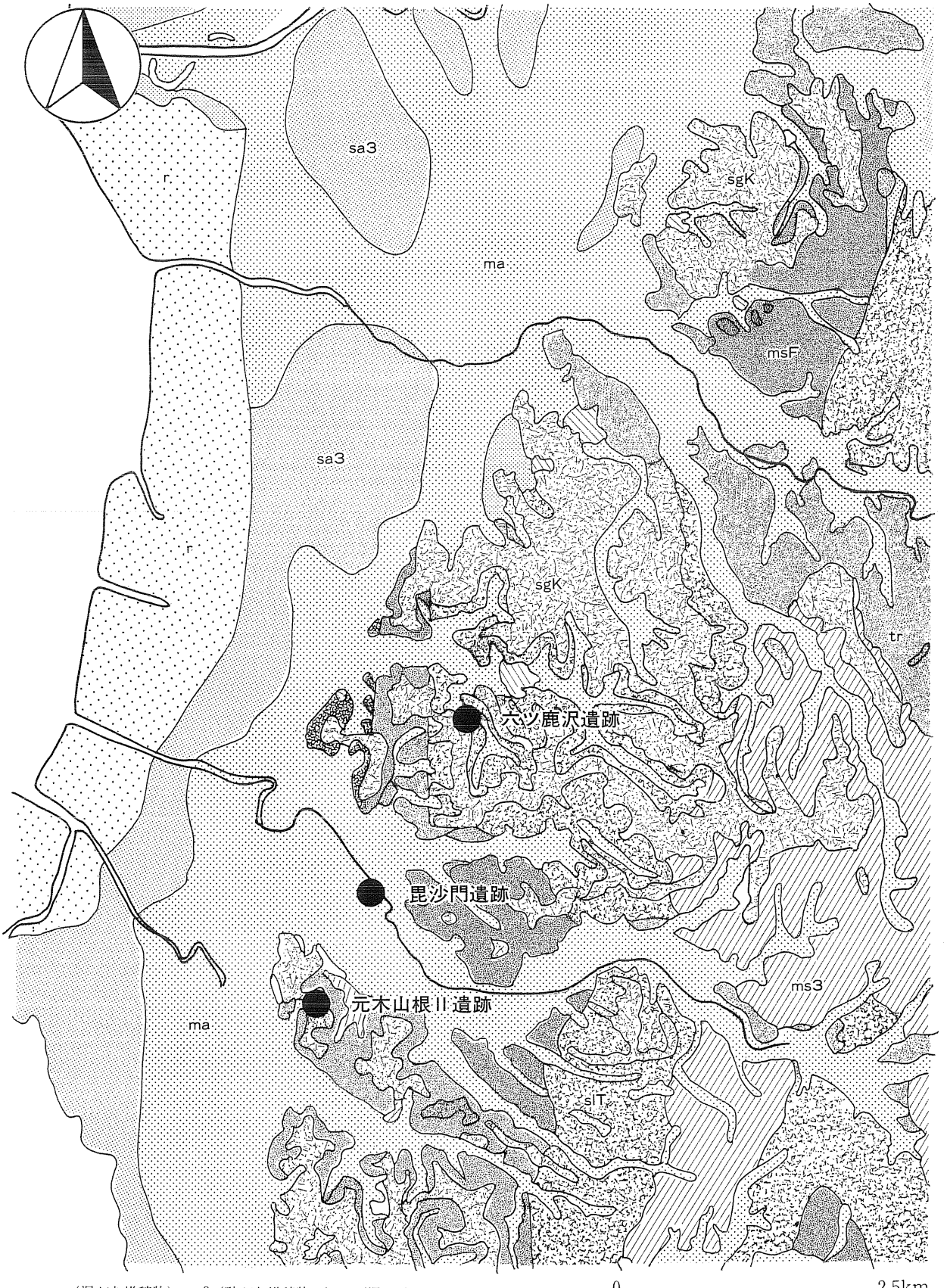
第2図　遺跡位置図（1／25,000）



I（湖岸平野）、D（三角洲）、R（千拓地）、NI（自然堤防）
Hs（丘陵地II）、P（谷底平野）、GtIII⁺（砂礫段丘III⁺）

0　2.5km

第3図　遺跡周辺地形図



ma（泥がち堆積物）、sa3（砂がち堆積物３）、r（泥・砂および礫）
sgK（砂礫層）、msF（泥岩）、tr（砂および礫）、slT（シルト岩）、msS（泥岩）

0　2.5km

第４図　遺跡周辺地質図

歴史的環境

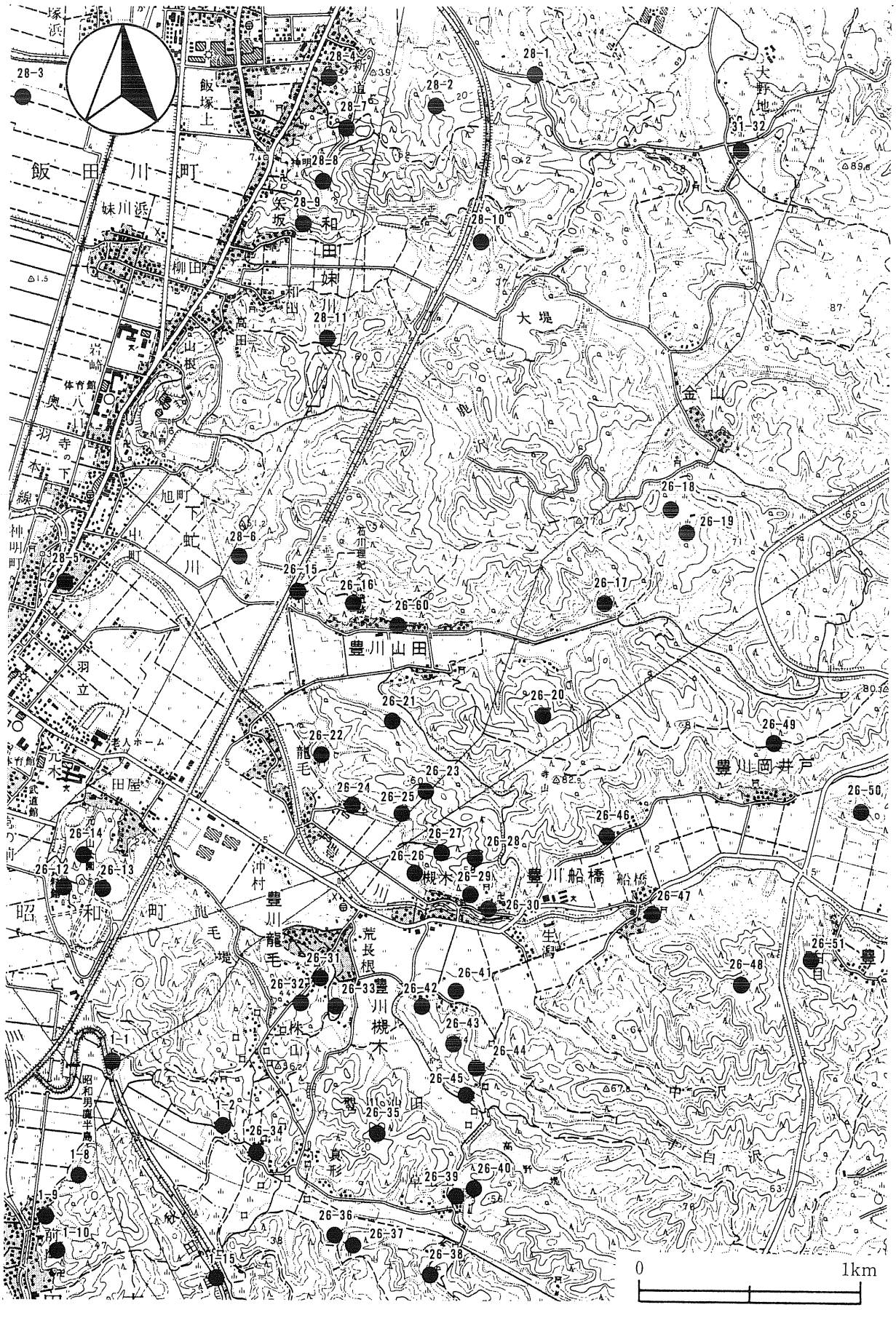
秋田市北部から昭和町・飯田川町かけての地域には、縄文時代から中世にかけての遺跡が多く所在する(第5図、第1・2表)。第1・2表に記した地図番号は、『秋田県遺跡地図(中央版)』に準拠する。

縄文時代の遺跡では現在元木山公園として整備されている元木山Ⅰ・Ⅱ遺跡(26-12・13)のほか、昭和町の西野遺跡(26-15)、鳥巻Ⅱ遺跡(26-33)、飯田川町の鳥木沢遺跡(28-1)、松葉沢遺跡(28-6)、井川町の大野地遺跡(31-32)等がある。大野地遺跡は縄文時代前期(円筒下層a・b式)を主体とする貝塚で、竪穴住居跡、炉跡、ピット等が多数検出された。遺物は円筒下層a・b式期の土器、石鏃、石匙、石槍、石錘などが出土している。また、レンズ状貝殻包含層からはヤマトシジミをはじめとする貝類やエイ目、ギギ科、アジ科などの魚類、哺乳類ではニホンジカの骨が出土し、当時の生活を知る良好な資料となっている。

古代にはいると馬踏川や豊川河岸の丘陵上に遺跡が分布する。豊川右岸の丘陵上には西野遺跡(26-15)、千刈田遺跡(26-22)、深田沢遺跡(26-21)、塔田Ⅰ～Ⅲ遺跡(26-25～27)、槻木盛土墳(26-28)、苗代沢遺跡(26-46)が位置する。槻木盛土墳は火葬墓として登録されており、須恵器片・壷・葺石が確認されている。左岸の丘陵上には正戸尻Ⅰ・Ⅱ遺跡(26-41・42)、寸白沢遺跡(26-44)、高野遺跡(26-45)、羽白目遺跡(26-51)がある。羽白目遺跡は望烽跡とされており、烽舎跡、柵跡、平窯跡が検出され、土師器・須恵器・「秋田」の押印がある瓦・刀子等が出土している。馬踏川右岸には大沢遺跡(1-15)、前山Ⅰ・Ⅱ遺跡(1-9・10)、草生土沢Ⅰ遺跡(26-38)が位置する。大沢遺跡では平安時代(10世紀前葉)の竪穴住居跡が1軒検出され、土師器が出土している。

中世には、古代に引き続き丘陵上に遺跡が位置し、館跡が多く確認されている。妹川流域には鹿来館(28-10)、小玉館(28-7)、築掛館(28-8)、鷲尾館(28-9)、鬼王館(28-11)がある。鬼王館では空堀、郭が確認され、焼米や唐津系陶片が採集されている。鹿来館は館跡内を国道7号線が通り、国道の西側に主郭の一部がある。平成11年度に館跡東側の縁辺部で発掘調査がおこなわれ、空堀、小曲輪、掘立柱建物跡、竪穴状遺構、柱穴様ピットが検出された。特に空堀は調査区外の西側、国道7号線に延びていることが確認された。遺物では陶磁器が出土している。豊川流域から馬踏川流域にかけては山田館(26-20)、岡井戸館(26-50)、極楽館(26-23)、船橋館(26-48)、オオサカ館(26-43)、槐館(26-35)、元木館(26-14)、岩瀬館(1-8)が分布する。

中世以降になると、松館遺跡(1-1)において4基の火葬墓群が検出されている。また、昭和町には県指定史跡として登録されている石川理紀之助遺跡がある。


28-3
28-4
28-2
28-1
28-7
28-8
28-9
28-10
28-11
28-6
28-5
31-32
26-18
26-19
26-17
26-15
26-16
26-60
26-21
26-20
26-49
26-22
26-23
26-24
26-25
26-27
26-28
26-26
26-29
26-30
26-46
26-47
26-50
26-14
26-12
26-13
26-31
26-32
26-33
26-42
26-41
26-43
26-44
26-45
26-48
26-51
26-35
26-34
26-39
26-40
26-36
26-37
26-38
1-1
1-2
1-8
1-9
1-10
1-15
飯田川町
和田
妹川
大堤
金山
豊川山田
豊川岡井戸
豊川船橋
船橋
豊川槻木
槻木
豊川龍毛
龍毛
荒長根
中沢
白沢
0
1km

第５図　周辺遺跡位置図

番号	遺跡名	所在地	種別	遺構・遺物
1－1	松館	秋田市金足岩瀬字松館大平	館跡	帯郭
1－2	上松館	秋田市金足岩瀬字上松館	遺物包含地	縄文土器
1－8	岩瀬館	秋田市金足岩瀬字佐渡沢	館跡	
1－9	前山Ⅰ	秋田市金足岩瀬字前山7	遺物包含地	須恵器
1－10	前山Ⅱ	秋田市金足岩瀬字前山	遺物包含地	須恵器
1－15	大沢	秋田市金足岩瀬字大沢	遺物包含地	縄文土器、赤褐色土器
26－12	元木山Ⅰ	昭和町大久保字元木山根50	遺物包含地	縄文土器(後期)、土師器、須恵器片
26－13	元木山Ⅱ	昭和町豊川龍毛字開沢	遺物包含地	縄文土器(後期)、土師器、須恵器片
26－14	元木館	昭和町豊川龍毛字開沢	館跡	
26－15	西野	昭和町豊川山田字家ノ上81	遺物包含地	縄文土器(後期)、土師器、須恵器片
26－16	下台	昭和町豊川山田字家ノ上54	遺物包含地	
26－17	八幡台	昭和町豊川山田字畳沢	寺院跡	五輪塔風空輪部
26－18	湯の沢Ⅰ	昭和町豊川山田字市の坪	遺物包含地	縄文土器(前期)、須恵器片
26－19	湯の沢Ⅱ	昭和町豊川山田字市の坪	遺物包含地	土師器片
26－20	山田館	昭和町豊川山田字滝の沢、砂子沢	館跡	焼米、茶臼受け皿片
26－21	深田沢	昭和町豊川山田字深田沢	遺物包含地	須恵器片
26－22	千刈田	昭和町豊川龍毛字千刈田	遺物包含地	石鏃、須恵器片
26－23	極楽館	昭和町豊川龍毛字塩辛田1	館跡	主郭、帯郭、空堀等
26－24	塩辛田	昭和町豊川龍毛字塩辛田5	遺物包含地	石刀
26－25	塔田Ⅰ	昭和町槻木字塔田	遺物包含地	土師器、須恵器片
26－26	塔田Ⅱ	昭和町豊川槻木字塔田60	遺物包含地	須恵器、土師器片
26－27	塔田Ⅲ	昭和町豊川槻木字塔田12	遺物包含地	須恵器片
26－28	槻木盛土墳	昭和町豊川槻木字塔田7	火葬墓	須恵器片、壷、葺石
26－29	塔田Ⅳ	昭和町豊川槻木字塔田1	遺物包含地	土師器片、須恵器片
26－30	大宮	昭和町豊川槻木字大富34	遺物包含地	須恵器壷
26－31	蘭戸下	昭和町豊川槻木字欄戸下53の1	遺物包含地	獣骨
26－32	鳥巻Ⅰ	昭和町豊川槻木字鳥巻	遺物包含地	縄文土器(前期、後期)、須恵器片
26－33	鳥巻Ⅱ	昭和町豊川槻木字鳥巻35	遺物包含地	縄文土器(中期、後期)
26－34	真形尻	昭和町豊川槻木字真形尻31	遺物包含地	縄文土器(中期)、鹿、鳥類骨
26－35	槐館	昭和町豊川槻木字高野～真形沢	館跡	本郭、腰郭、空堀
26－36	カラス沢	昭和町豊川槻木字カラス沢	遺物包含地	土師器片
26－37	真形館	昭和町豊川槻木字カラス沢、草生土沢	館跡	階段状郭、帯郭
26－38	草生土沢Ⅰ	昭和町豊川槻木字草生土沢	遺物包含地	土師器片
26－39	草生土沢Ⅱ	昭和町豊川槻木字草生土沢	遺物包含地	石匙
26－40	草生土沢Ⅲ	昭和町豊川槻木字草生土沢18	遺物包含地	五輪塔頂部、近くに糠塚
26－41	正戸尻Ⅰ	昭和町豊川槻木字正戸尻62	遺物包含地	須恵器片
26－42	正戸尻Ⅱ	昭和町豊川槻木字正戸尻	遺物包含地	土師器、須恵器片
26－43	オオサカ館	昭和町豊川概木字正戸尻	館跡	
26－44	寸白沢	昭和町豊川械木字寸白沢	遺物包含地	須恵器片
26－45	高野	昭和町豊川槻木字高野64	遺物包含地	須恵器片
26－46	苗代沢	昭和町豊川岡井戸字中丸111他	遺物包含地	縄文土器(晩期)、土師器、須恵器片
26－47	船橋経塚	昭和町豊川船橋字川原崎42	経塚	盛塚
26－48	船橋館	昭和町豊川船橋字川原崎、堤沢	館跡	焼米
26－49	アケビ沢台	昭和町豊川山田字市の坪	遺物包含地	縄文土器(晩期)、土師器片
26－50	岡井戸館	昭和町豊川岡井戸字前田外	館跡	帯郭数段
26－51	羽白目	昭和町豊川上蛇川字羽白目	望烽	土師器、須恵器、鉄器
26－60	石川理紀之助遺跡	昭和町山田	史跡	尚庵、書庫、郷倉

第1表　周辺の遺跡(1)

番号	遺跡名	所在地	種別	遺構・遺物
28－1	鳥木沢	飯田川町飯塚字鳥木沢	遺物包含地	縄文土器(後期、晩期)
28－2	古開	飯田川町飯塚字古開250－1	遺物包含地	須恵器坏
28－3	観音寺	飯田川町飯塚字観音尻60	寺院跡	礎石、板碑
28－4	飯塚神明社観音堂	飯田川町飯塚字中山	建築	入母屋向拝唐破風造柿葺一間社
28－5	城の内	飯田川町下虻川字城の内84	建物跡	碑一基
28－6	松葉沢	飯田川町下虻川字松葉沢87	遺物包含地	縄文土器(中期、晩期)
28－7	小玉館	飯田川町飯塚字水神端134	館跡	帯郭
28－8	築掛館	飯田川町飯塚字僧ケ沢63－3	館跡	帯郭、空堀、板碑
28－9	鷲尾館	飯田川町和田妹川字坂の下20	館跡	帯郭、空堀
28－10	鹿来館	飯田川町和田妹川字鹿来140	館跡	帯郭、空堀
28－11	鬼王館	飯田川町和田妹川字大宮沢5	館跡	帯郭、空堀、段築
31－32	大野地	井川町坂本字大野地300	遺物包含地	縄文土器(中期)、石器

第2表　周辺の遺跡(2)

参考文献

飯田川町　『飯田川町百年のあゆみ』　1969(昭和44)年

秋田県　『土地分類基本調査　五城目』　1973(昭和48)年

磯村朝次郎・金子浩昌・渡部晟　「大野地遺跡(縄文時代前期)の出土遺物とその意義」　『秋田県立博物館研究紀要』第7号　秋田県立博物館　1982(昭和57)年

井川町　『井川町史』　1986(昭和61)年

昭和町　『昭和町史』　1986(昭和61)年

秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図(中央版)』　1990(平成2)年

秋田県教育委員会　『秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ―大沢遺跡・松館遺跡―』秋田県文化財調査報告書第204集　1991(平成3)年

秋田県教育委員会　『秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ―大平遺跡―』秋田県文化財調査報告書第264集　1996(平成8)年

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第270集　1997(平成9)年

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第291集　1999(平成11)年

秋田県教育委員会　『上野遺跡―日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ―』秋田県文化財調査報告書第295集　2000(平成12)年

秋田県教育委員会　『兵ヶ沢遺跡―日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ―』秋田県文化財調査報告書第296集　2000(平成12)年

秋田県教育委員会　『洲崎遺跡』秋田県文化財調査報告書第303集　2000(平成12)年

元木山根II遺跡

（3MKYNII）

第１章　遺跡の概要

第１節　遺跡の概観

元木山根Ⅱ遺跡は秋田自動車道昭和男鹿半島インターから北東に0.8km、国道７号線を挟んだ元木山公園の東に位置する。東には俎山(721.8m)をはじめとする丘陵が南北に広がる。遺跡は俎山を水源とする豊川と馬場目川に挟まれ、西に向かって舌状に張り出した丘陵の西端部に位置する。調査区内は東から西に向かって緩やかに傾斜しており、標高は23.5m～29mである。

第２節　調査の方法

発掘調査はグリッド法を採用した。調査区近くに設置されている日本海沿岸東北自動車道建設の道路中心杭(STA.３＋00)から国家座標系第Ｘ系座標北を求めて南北基準線とし、これに直交する東西基準線を設け、４ｍ×４ｍのグリッドメッシュを設定した。調査区内に位置するSTA.３＋00から東に48mの杭を今回の調査基準杭MA50とした。グリッド杭には、東西方向には東からＬＱ…ＬＴ、ＭＡ、ＭＢ…のアルファベットと、南北方向には南から北に向かって昇順となる連続した２桁の数字を組み合わせた記号を記入し、グリッド名とした。方眼杭に囲まれたグリッドの呼称はその南東隅に位置する杭を代表させた。

検出した遺構は、その種類を問わず一連の番号を付した。番号登録の後、遺構と判断できなくなったものについては欠番として扱った。

調査の記録は図面と写真によった。遺構・遺物の実測は、グリッド杭を基準とする簡易遣り方測量を採用した。図面は基本的に１/20縮尺とした。ただし調査範囲等は１/100縮尺でおこなった。写真撮影は35mmのネガカラーフィルム、リバーサルフィルムを中心に、長期保存のためモノクロフィルムをまじえておこなった。

第３節　調査の経過

７月19日～21日　重機による表土除去(21日終了)。テント・トイレ設置。大平遺跡から機材の一部を搬入。ジョレンによる粗掘り開始(～８月３日)。

７月23日～26日　トイレを移動し、コンテナハウス設置。26日にはテント撤去。

７月27日　コンテナハウス内の整備をおこない、ベルトコンベアーを調査区内に設置。センターより２ｔトラックで機材搬入。

７月28日　隣接する大平遺跡から機材を搬入。土坑らしきプランを南側東部平坦面で３基確認。Ⅰ・Ⅱ層から須恵器、土師器片出土。

７月29日　範囲確認調査で検出されたＳＸ01の掘り下げを開始する。焼土が３ヶ所で検出される。土

師器片が出土。

7月30日　前夜の雨により作業中止。

8月2日　ＳＸ01から土師器、須恵器が多数出土。

8月3日　調査区北側から遺構検出・精査開始。ＳＸ01遺物取り上げ(～5日)、ＳＫ03半截・断面写真・断面実測。ＳＸ04精査開始(～5日)。

8月4日　遺構検出・精査。ＳＫ02断面写真、実測。

8月6日　ＳＸ01にサブトレ設定。連日の猛暑のため午後には作業を中止した。

8月9日　遺構検出・精査。ＳＸ01は切り合いのある遺構と見ていたが、一つの住居と考えられた。焼土はさらに広がりを見せ、南側壁面近くで土器の集中が見られた。

8月10日　ＳＸ01の北側に壁を検出。ＳＸ01をＳＩ01に変更した。南半分の床面に焼土が広がっているのが確認された。

8月18日　ＳＩ01の床面出土土器写真、全体写真撮影。土器・焼土実測。ＳＩ04の全体写真撮影。壁・柱穴検出。

8月19日　ＳＩ01の完掘実測、焼土断面実測。ＳＩ04完掘実測。南東の焼土を半截。地山2cm～4cmの深さまで焼土が確認された。調査区北側から写真撮影のためクリーニング開始。須恵器1点出土。午後にはコンタ図作成開始(～26日)。

8月20日　ＳＩ04完掘写真撮影。ＳＩ01平面図作成。調査区北側クリーニング。調査範囲図作成。

8月23日　雨のため作業中止。

8月24日　写真撮影のためのクリーニング、ＳＩ01完掘写真撮影。ベルトコンベアー撤去。

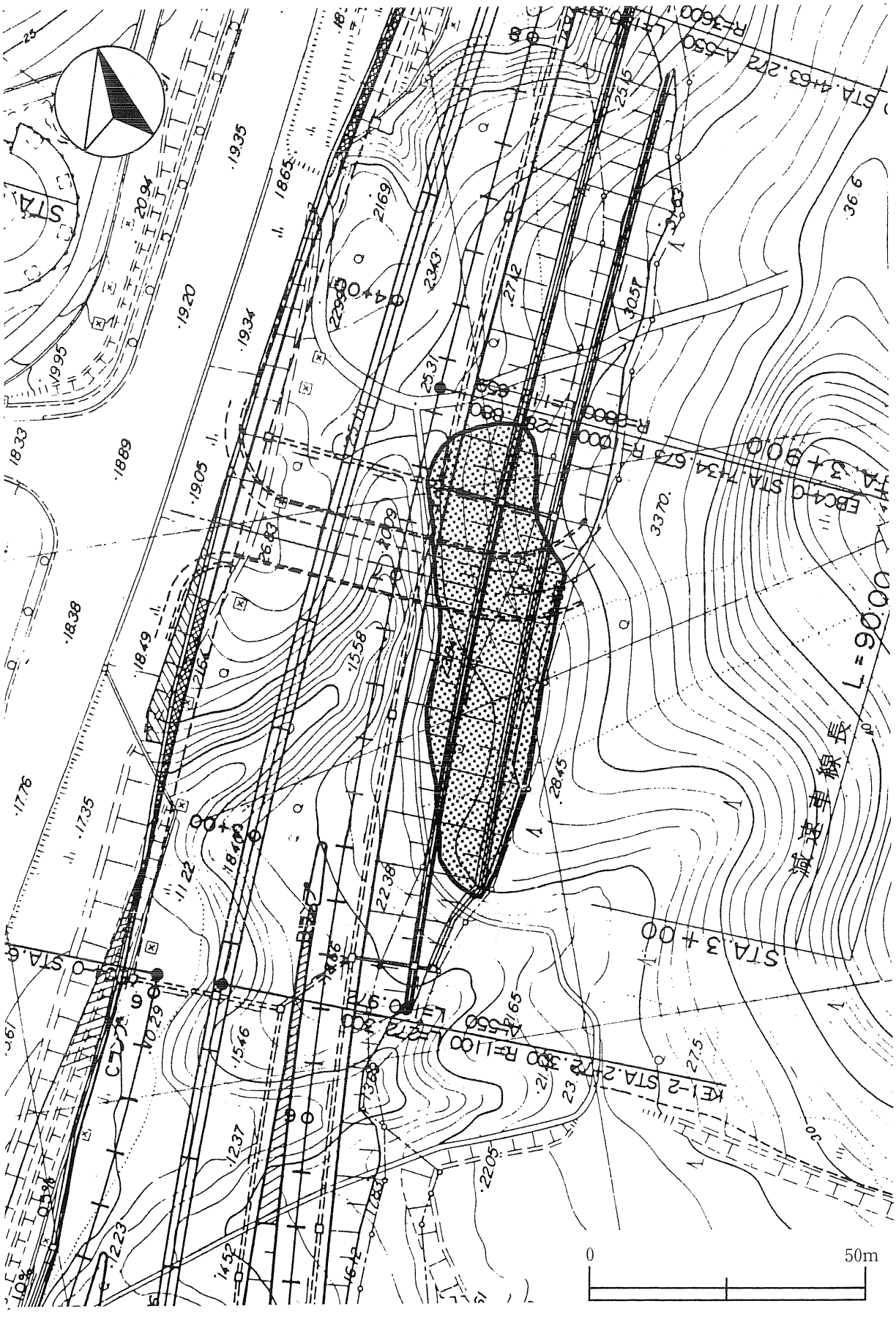
8月25日　全景写真撮影。ＳＩ01・04完掘写真撮影。

8月26日　機材の整理。遺物洗い。

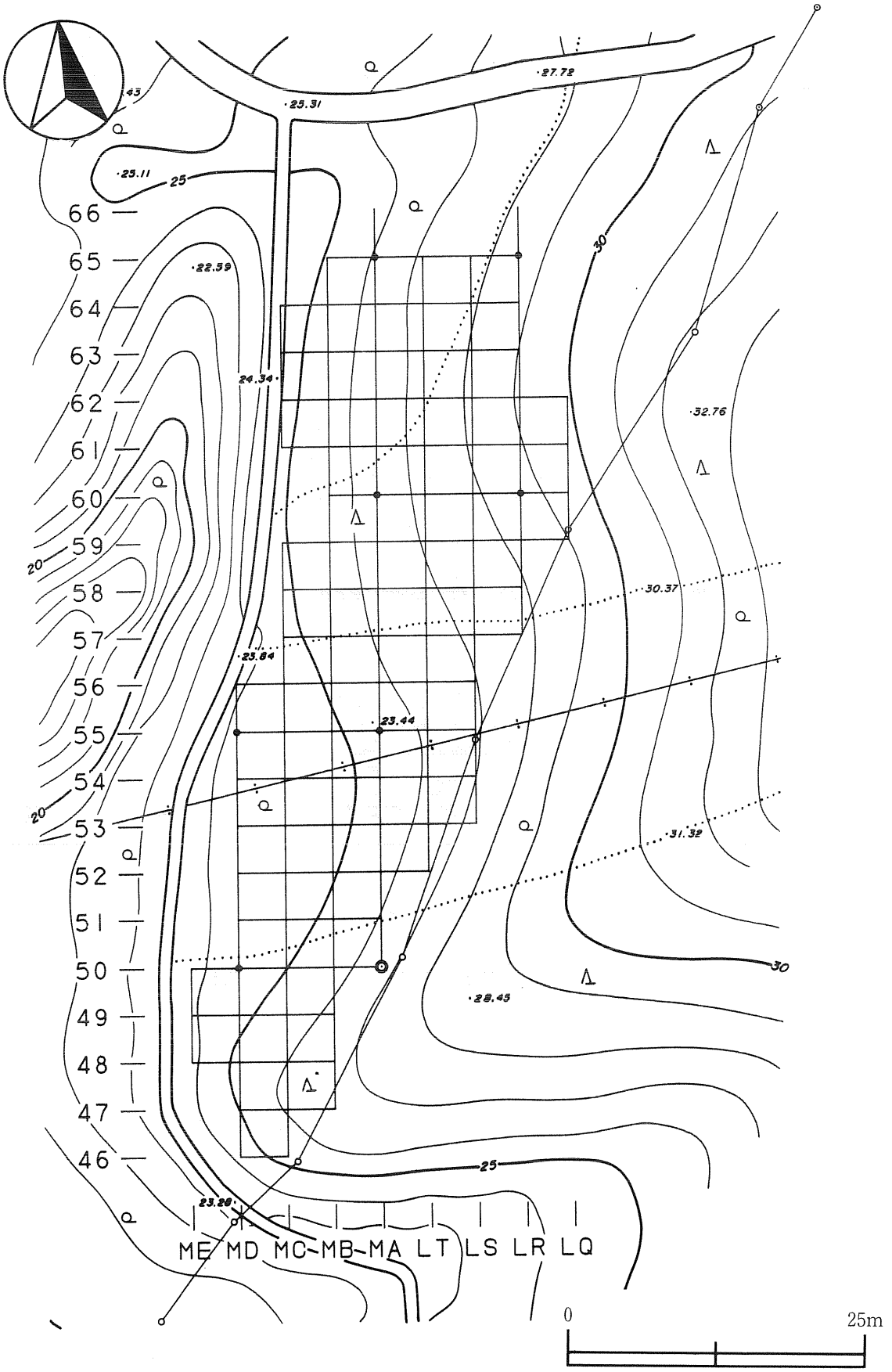
8月27日　大平遺跡へ一部の機材を搬出。

8月30日～9月1日　ＳＩ01西側の壁面検出作業。削平を受けており検出されなかった。ＳＩ01・04の焼土を精査。

9月2日　撤収。残りの機材を大平遺跡に搬出してすべての調査を終了した。



第１図　調査範囲図


66
65
64
63
62
61
60
59
58
57
56
55
54
53
52
51
50
49
48
47
46
ME MD MC MB MA LT LS LR LQ
0
25m

第2図　グリッド配置図

第２章　調査の記録

第１節　基本層序

層序は、ＳＩ01竪穴住居跡が検出された調査区東壁ＬＳ52～54ラインを基本とした。層序概念図はＳＩ01竪穴住居跡の土層断面図に譲るものとする(第４図)。

第Ⅰ層：耕作土　黒褐色土(10YR3/2)

第Ⅱ層：黒褐色土(10YR2/3)　にぶい黄褐色土(10YR4/3)を所々に斑状に含む。
径１cmほどの礫を含む。

第Ⅲ層：地山　にぶい黄橙色土(10YR6/4)

第２節　検出遺構とその遺物

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡２軒、土坑４基、焼土遺構１基である。

１　竪穴住居跡

ＳＩ01竪穴住居跡(第４図、図版２)

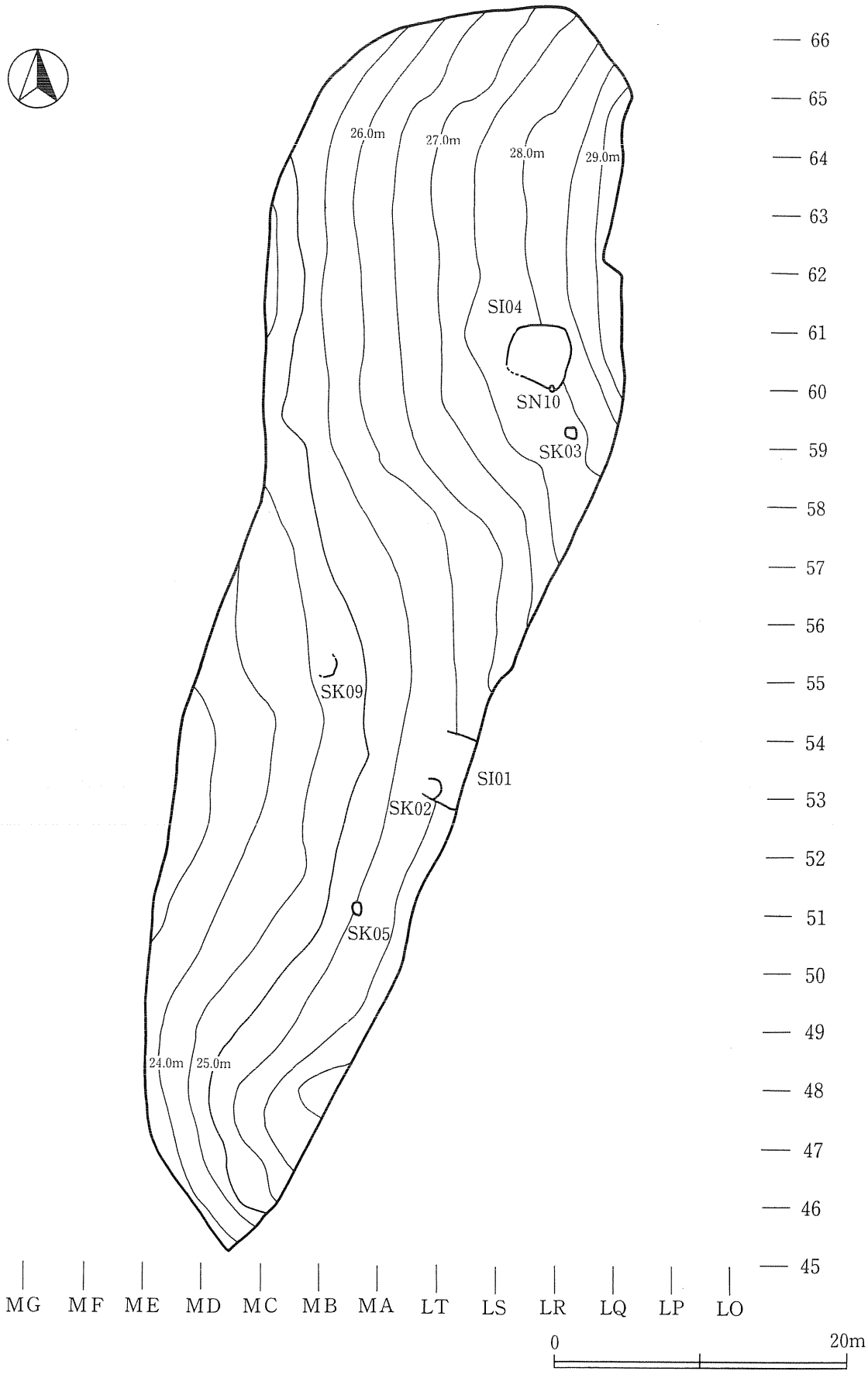
調査区中央部東側ＬＳ52～54、ＬＴ52・53グリッドで検出された。ほぼ平坦であるが、北東から南西に向かって緩やかに傾斜する斜面に構築されていた。南西隅に位置するＳＫ02土坑に破壊されていた。東側は調査区外に広がり、西側は削平されているが、平面形は一辺約4.9mの隅丸方形を呈するものと考えられる。南東隅はやや張り出していた。壁面は緩やかに立ち上がり、床面はほぼ平坦である。深さは0.4mである。北辺から東辺にかけて壁溝が検出された。壁溝は南辺では確認されておらず、斜面の上側のみに設けられていた可能性が考えられる。

床面からは柱穴が７基(Ｐ１～Ｐ７)検出された。Ｐ１～Ｐ４の配置と、その結ぶ範囲が約1.9m×2.3mの不整方形になることから、主柱穴であった可能性が考えられる。Ｐ１～Ｐ４の深さは床面が削平されてるものがあるため、0.13m～0.4mと幅があるが、底面レベルでは25.38m～25.47mとほぼ一定である。床面に焼土の堆積が６ヶ所確認された。

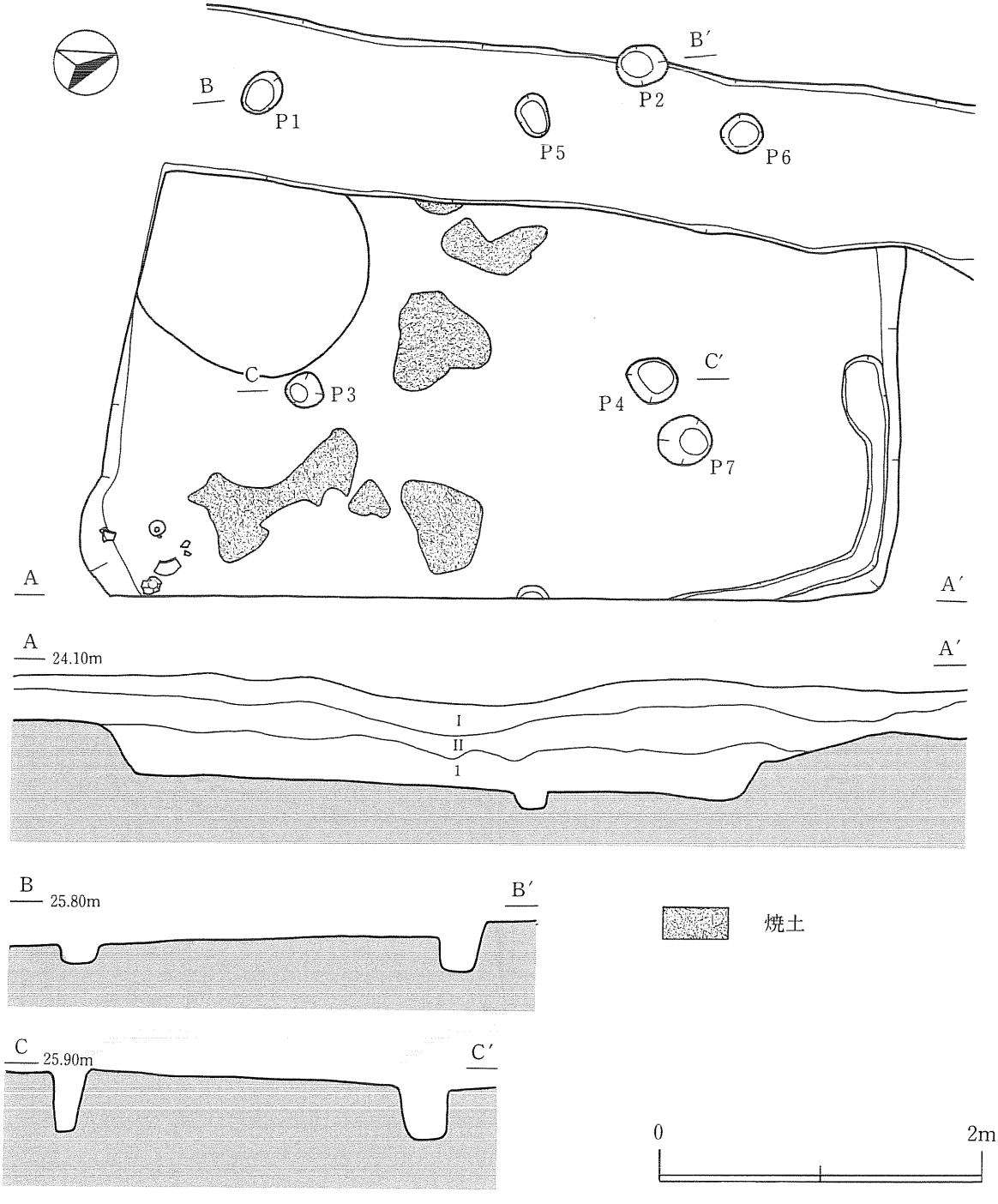
住居内からは須恵器・土師器が189点出土している。細片がほとんどで、残存する口縁部・底部、同一個体と認定される体部破片を抽出して個体数を算定したところ、須恵器が坏３個体、高台付坏１個体、蓋３個体、甕１個体、土師器が坏９個体、甕17個体分が確認された。以下に各遺物についての詳細を記す。

須恵器(第７図)

須恵器は坏・高台付坏・蓋・甕が確認された。坏(１)は回転ヘラ切りにより切り離されている。高台付坏(２)は体部下半がややふくらみ、口唇部が先細りする器形である。高台の高さは0.5cmである。蓋はすべて坏蓋である(３～５)。４の蓋はつまみの径が2.8cm、高さが0.8cmであり、天井部の縁辺に


26.0m
27.0m
28.0m
29.0m
SI04
SN10
SK03
SK09
SI01
SK02
SK05
24.0m
25.0m
66
65
64
63
62
61
60
59
58
57
56
55
54
53
52
51
50
49
48
47
46
45
MG
MF
ME
MD
MC
MB
MA
LT
LS
LR
LQ
LP
LO
0
20m

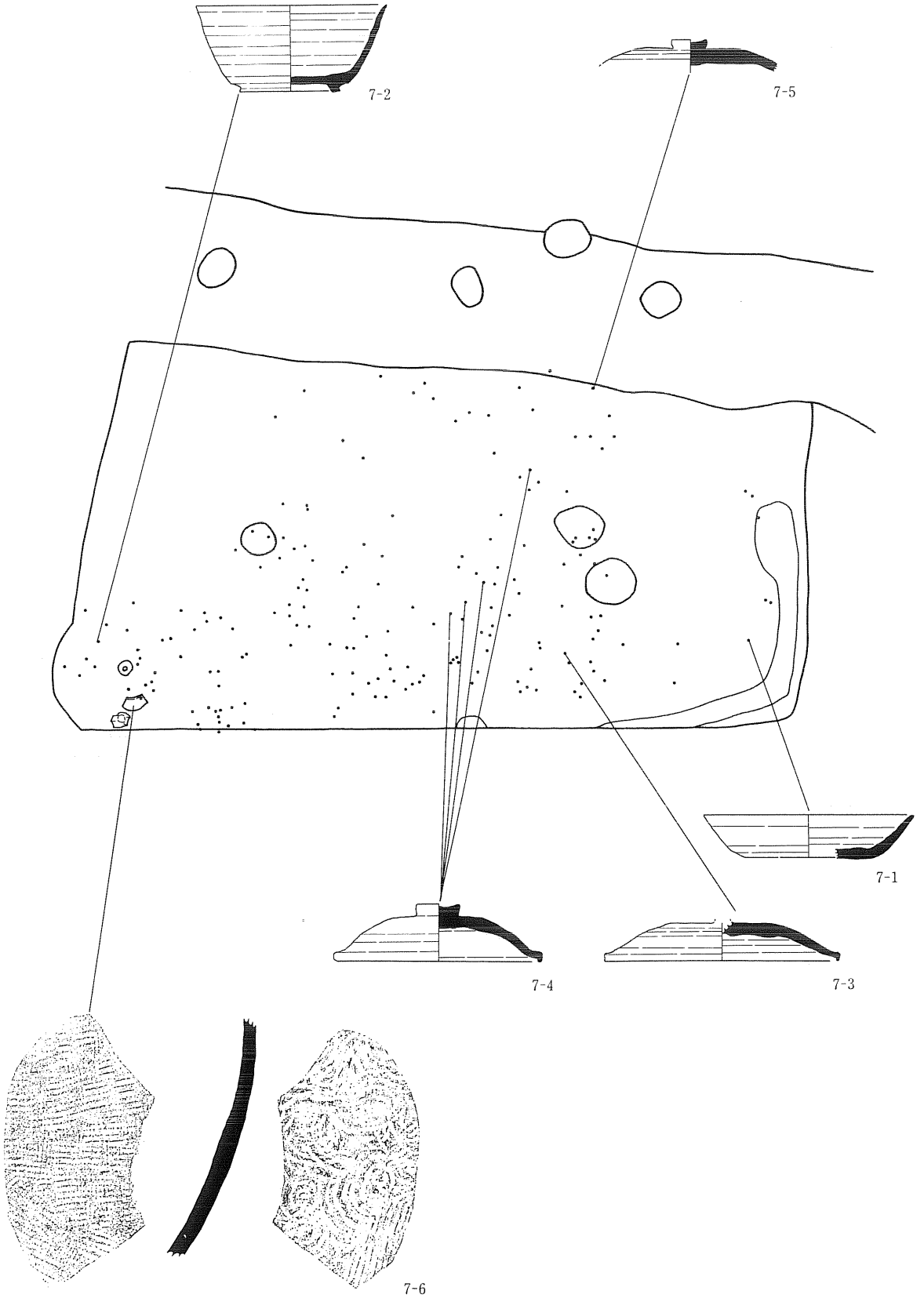
第 3 図　遺構配置図



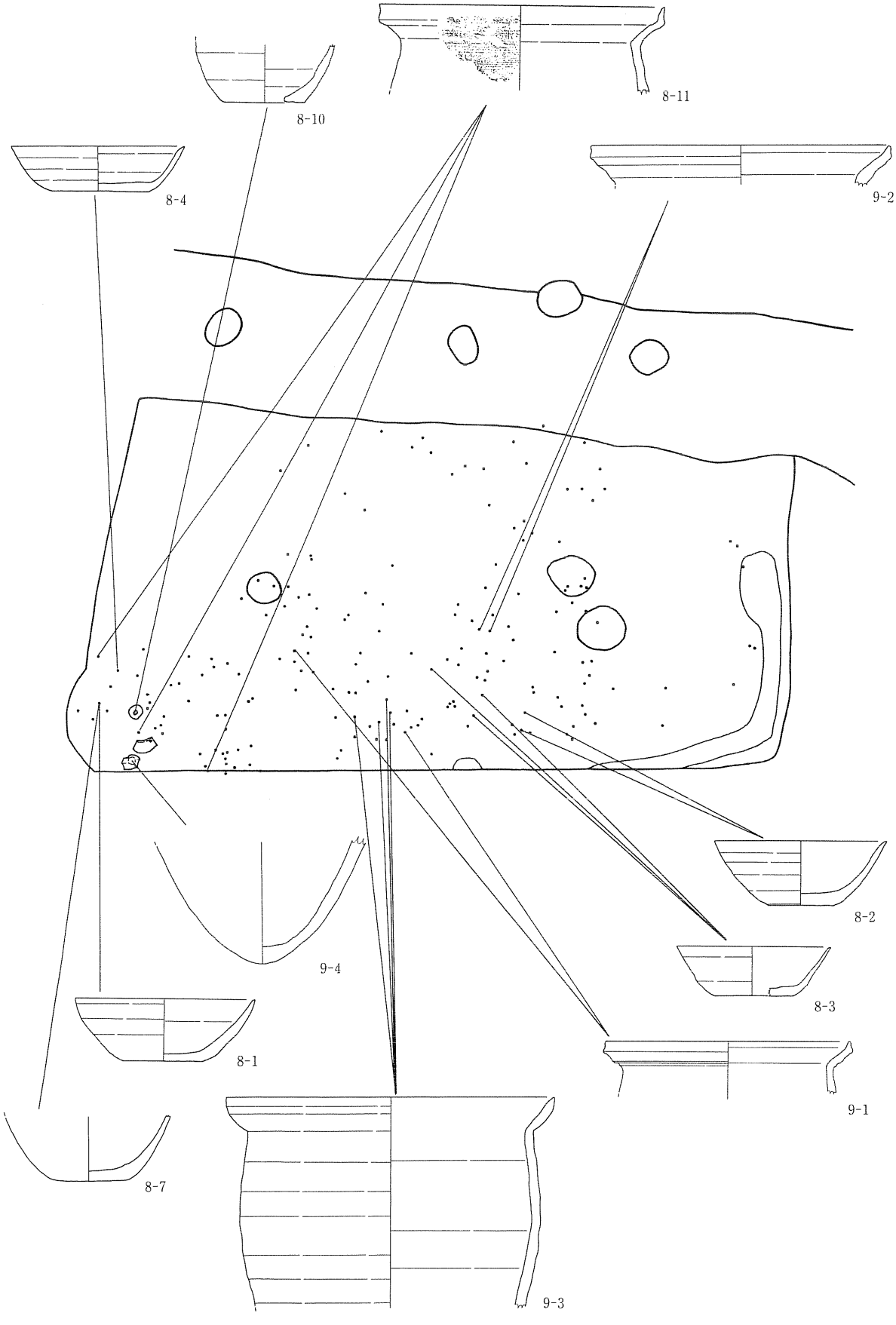
Ⅰ．黒褐色土(10YR3/2)　しまりやや弱
Ⅱ．黒褐色土(10YR2/3)　しまり中
　にぶい黄褐色土(10YR4/3)を斑状に含む。礫(径１cm程)を含む。
１．にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまりやや強
　炭化物を１％、礫(径１cm程)を１％含む。

遺構No.	検出地区	平面形	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
Ｐ１	LT53	楕円形	0.29	0.22	0.13
Ｐ２	LT53	円形	0.31	0.25	0.31
Ｐ３	LS53	円形	0.24	0.22	0.39
Ｐ４	LS53	円形	0.33	0.29	0.40
Ｐ５	LT53	楕円形	0.27	0.19	0.10
Ｐ６	LT53	円形	0.28	0.25	0.12
Ｐ７	LS53	円形	0.34	0.30	0.06

第４図　ＳＩ01竪穴住居跡



第５図　ＳＩ01竪穴住居跡遺物出土状況（１）



第６図　ＳＩ01竪穴住居遺物出土状況（２）

は焼成時にできた亀裂が見られる。同様の亀裂は５の蓋にも見られる。５のつまみは径2.3cm、高さ0.6cmである。３と５は内面が摩滅しており、転用された際の使用痕と考えられる。６は甕の体部破片で外面に平行タタキメ、内面に青海波状のアテ具痕が見られる。

土師器(第８～10図)

土師器は坏・甕が確認された。坏(第８図)は底部から口縁部までやや内湾しながら緩やかに立ち上がるもの(１・２・４)や、体部下半がややふくらむもの(３・５)がみられる。ロクロからの切り離しには回転ヘラ切りと回転糸切りが確認された。９点のうち回転ヘラ切りのものが４点、回転糸切りのものが３点であり、他の２点については摩滅が著しいためロクロからの切り離し方法は不明であった。

第８図10の底部中央には径３cm程の穿孔が施されている。孔の周辺は外側が剝落していることから、内部から力が加わって開いたものと考えられる。甑として使用された可能性が考えられるが、付着物等は確認できなかった。

甕は体部から頸部にかけて「く」の字状に屈曲し、頸部から口唇部にかけて逆「く」の字状に摘み出したもの(第８図11・第９図１・第10図５)、頸部から口唇部までゆるやかに内湾して立ち上がるもの(第９図２・３)、体部から頸部にかけて「く」の字状に屈曲し、口唇部が平坦なもの(第10図７)がみられる。口径はすべて20cm前後である。また、底部のみの出土であるため口縁部の形状は不明であるが、丸底の甕が出土している(第９図４)。第９図５・６、第10図１～４は甕の体部破片である。第９図５の外面には炭が付着する。第９図６、第10図１・２は外面にタタキメ、内面にアテ具痕が見られ、器厚や胎土から丸底の第９図４と類似したものと考えられる。第10図３・４は、内外面ともロクロナデによる成形である。

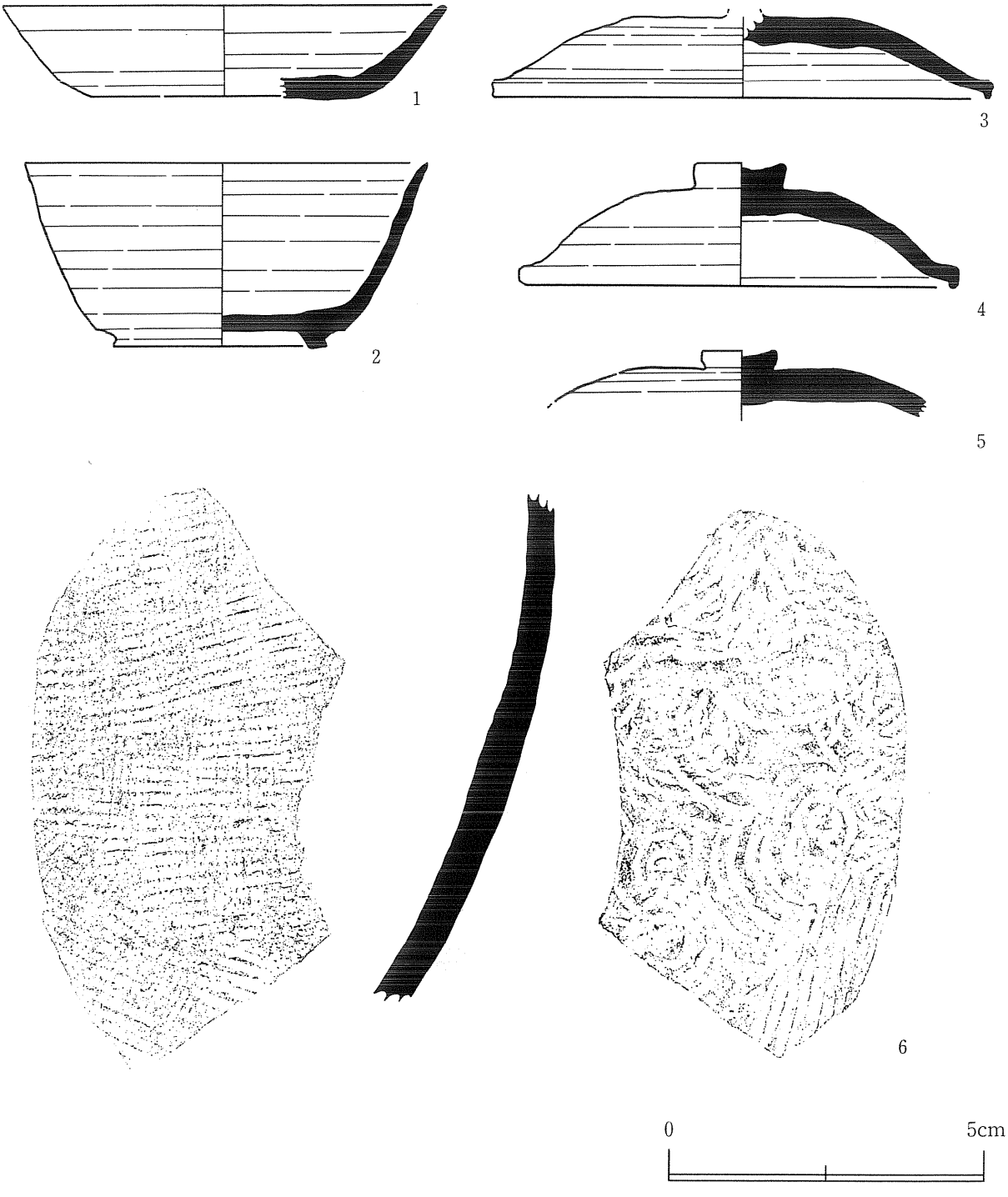
これらの遺物は住居内から第５・６図に示したように分布して出土した。第５図は須恵器、第６図は土師器の出土状況である。南東隅の張り出した部分からは須恵器の甕の体部、土師器の丸底甕の底部、穿孔のある底部などがまとまって出土している(図版２－２)。

ＳＩ04竪穴住居跡(第11図、図版３－１・２)

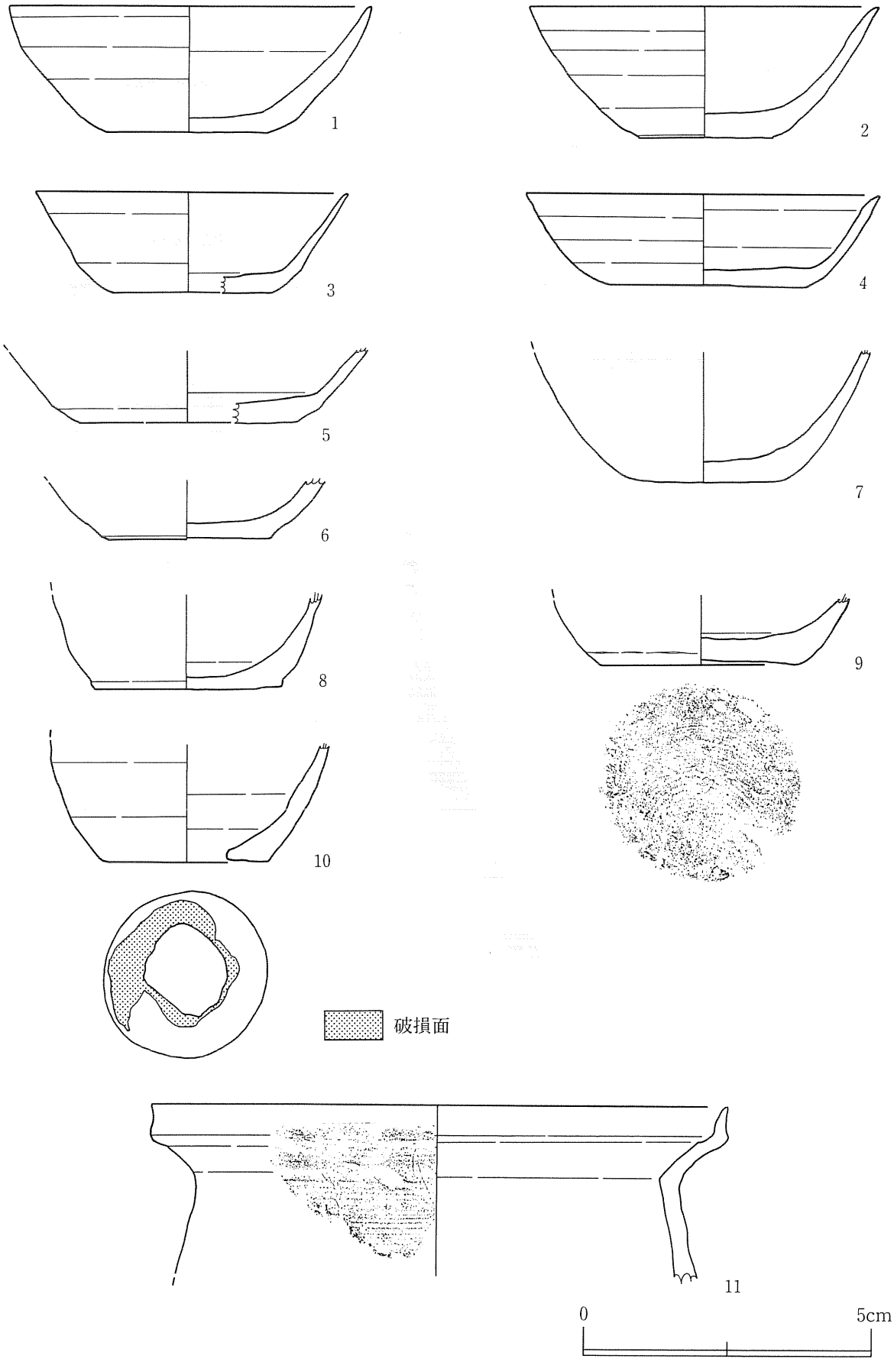
調査区北東部ＬＱ～ＬＲ60・61グリッドで検出された。南東隅に位置するＳＮ10焼土遺構に切られる。3.5m×3.55mの隅丸方形を呈する。深さは0.35mで、床面はほぼ平坦である。埋土は６層に分けられる。５・６層は壁面の崩落土と考えられる。最下層の４層は他の埋土に比べて地山が多く混入しており、しまりが強いことから、住居の貼床である可能性が考えられる。

焼土は南壁よりの中央部４層床面直上で確認された。1.1m×0.54mの範囲に分布し、厚さは８cmである。柱穴は焼土近くの南壁中央付近から１基のみ検出されている。

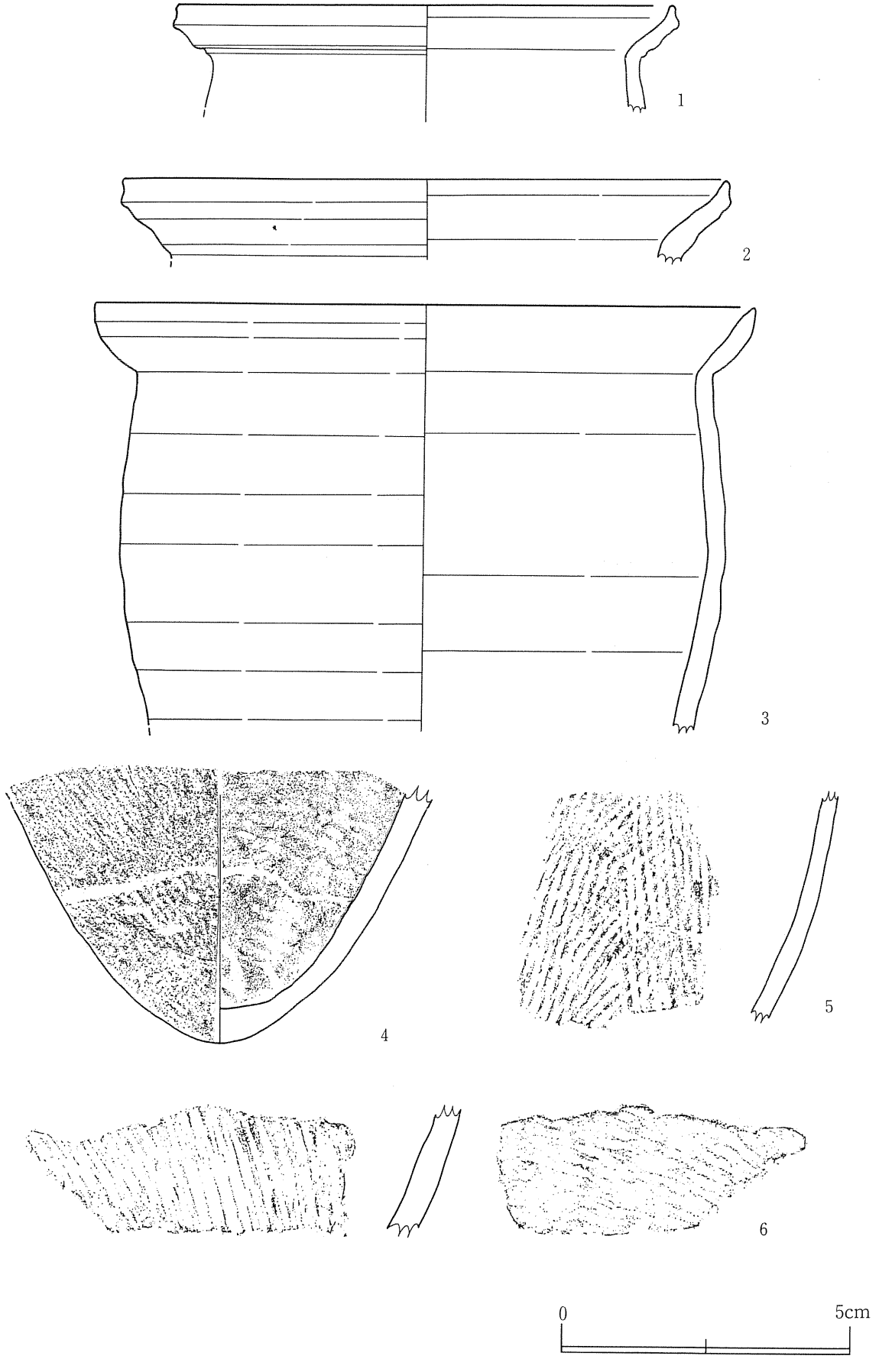
遺物は土師器・須恵器が出土している。大部分が細片であり、図示したものは第11図の須恵器の蓋１点である。坏蓋でつまみの径は2.5cm、高さは0.5cmである。



第７図　ＳＩ01竪穴住居跡出土遺物（１）



第８図　ＳＩ01竪穴住居跡出土遺物（２）



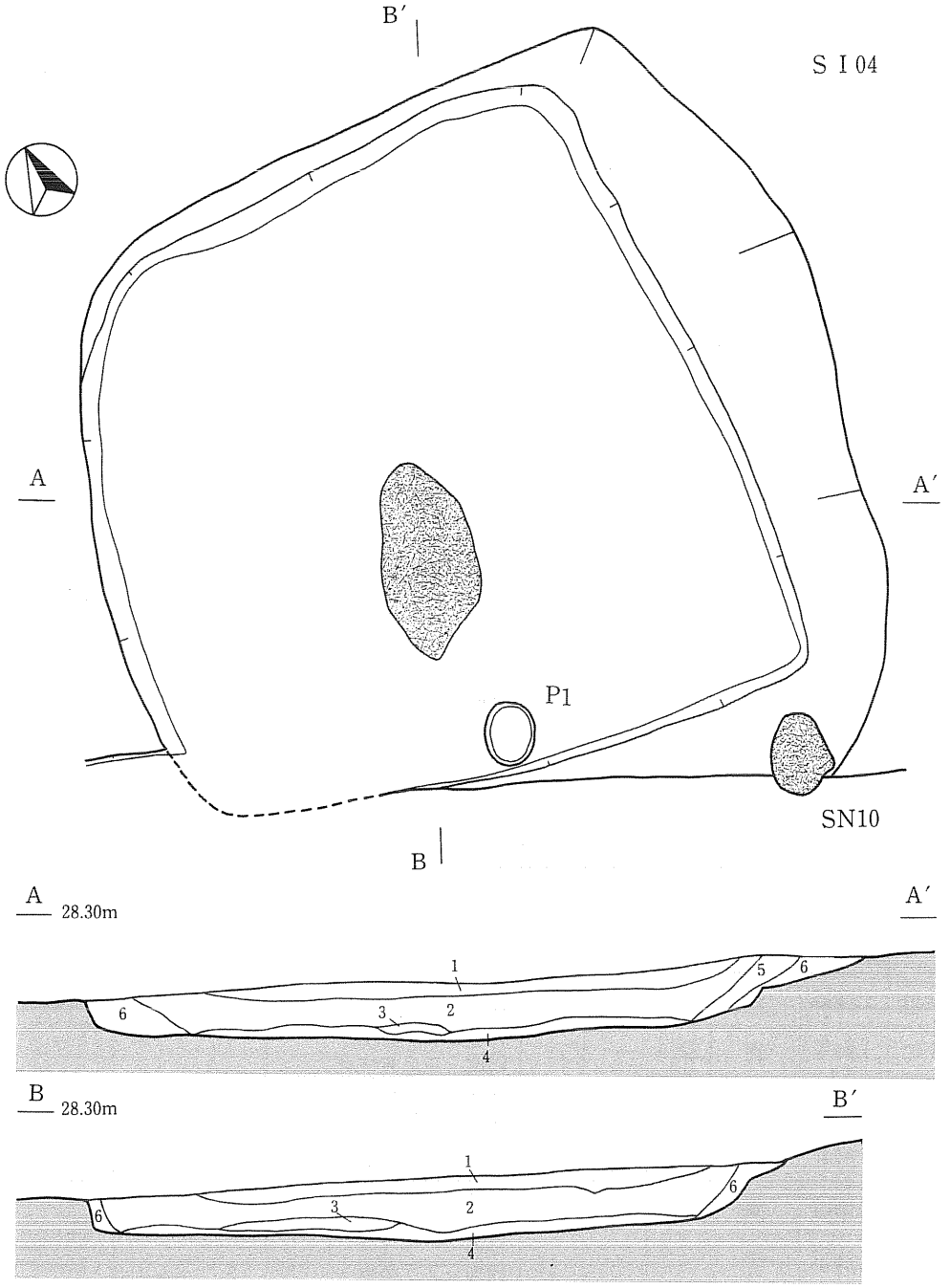
第９図　ＳＩ01竪穴住居跡出土遺物（３）

第10図　ＳＩ01竪穴住居跡出土遺物（４）

挿図No.	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	器面調整	切り離し技法	備考	図版No.
7－1	ＳＩ01	須恵器	坏	14.1	8.6	2.9	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	回転ヘラ切り		4－1
7－2	ＳＩ01	須恵器	高台付坏	12.8	6.8	5.8	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	—		4－2
7－3	ＳＩ01	須恵器	蓋	16	—	2.6	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	—		
7－4	ＳＩ01	須恵器	蓋	13.6	—	4.0	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	—		4－3
7－5	ＳＩ01	須恵器	蓋	—	—	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	—		4－4
7－6	ＳＩ01	須恵器	甕	—	—	—	外面：タタキメ 内面：アテ具痕	—		
8－1	ＳＩ01	土師器	坏	12.6	5.5	4.4	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	摩滅により不明		4－5
8－2	ＳＩ01	土師器	坏	12.1	4.6	4.5	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	摩滅により不明		4－6
8－3	ＳＩ01	土師器	坏	10.8	5.5	3.5	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	回転ヘラ切り		
8－4	ＳＩ01	土師器	坏	12.2	6.8	3.3	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	回転ヘラ切り		
8－5	ＳＩ01	土師器	坏	—	7.4	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	回転ヘラ切り		
8－6	ＳＩ01	土師器	坏	—	5.6	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	回転糸切り		
8－7	ＳＩ01	土師器	坏	—	4.8	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	回転ヘラ切り		
8－8	ＳＩ01	土師器	坏	—	6.5	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	回転糸切り		
8－9	ＳＩ01	土師器	坏	—	7.0	—	外面：ロクロナデ 内面：摩滅により不明	回転糸切り		
8－10	ＳＩ01	土師器	甑？	—	5.6	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	—	穿孔あり	4-7･8
8－11	ＳＩ01	土師器	甕	20	—	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	—		6－4
9－1	ＳＩ01	土師器	甕	17.1	—	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	—		6－2
9－2	ＳＩ01	土師器	甕	20.8	—	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	—		
9－3	ＳＩ01	土師器	甕	22.9	—	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	—		6－3
9－4	ＳＩ01	土師器	甕	—	—	—	外面：タタキメ 内面：アテ具痕	—		5－1
9－5	ＳＩ01	土師器	甕	—	—	—	外面：タタキメ 内面：アテ具痕	—		
9－6	ＳＩ01	土師器	甕	—	—	—	外面：タタキメ 内面：アテ具痕	—		
10－1	ＳＩ01	土師器	甕	—	—	—	外面：タタキメ 内面：アテ具痕	—		
10－2	ＳＩ01	土師器	甕	—	—	—	外面：タタキメ 内面：アテ具痕	—		
10－3	ＳＩ01	土師器	甕	—	—	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	—		
10－4	ＳＩ01	土師器	甕	—	—	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	—		
10－5	ＳＩ01	土師器	甕	—	—	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	—		
10－6	ＳＩ01	土師器	甕	—	—	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	—		6－1
10－7	ＳＩ01	土師器	甕	—	—	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	—		
11	ＳＩ04	須恵器	蓋	—	—	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	—		

※計測値単位はすべてcmである。

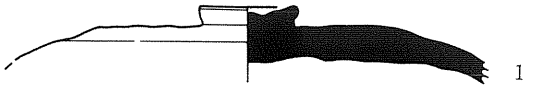
第１表　遺構内出土遺物計測表



1.黒褐色土(10YR3/2)　しまり中　地山粒子を２％、褐色土(10YR4/6)を斑状に３～５％含む。
2.黒褐色土(10YR2/2)　しまり中　炭化物を１％、地山粒子を１％、指頭大の礫を１％含む。
3.黒褐色土(10YR2/2)　しまり中　炭化物を１％、地山粒子を１％、焼土粒を５％含む。
4.暗褐色土(10YR3/4)　しまりやや強　地山粒子を20％含む。
5.褐色土(10YR4/4)　しまりやや強　暗褐色土を斑状に15％含む。
6.にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまり中　暗褐色土を斑状に20％含む。

焼土

遺構No.	検出地区	平面形	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	LR60	楕円形	0.36	0.27	0.19



0　(1のみ)　5cm

0　2m

第11図　ＳＩ04竪穴住居跡・ＳＮ10焼土遺構

２　土坑

ＳＫ02土坑(第12図、図版３－７)

調査区中央部東側ＬＴ53グリッドⅢ層上面で検出された。ＳＩ01竪穴住居跡の南西隅に位置し、竪穴住居跡を掘り込んでいる土坑である。南側と西側が削平されているが、径約1.4mの円形を呈するものと考えられる。深さは0.18m、堆積層は１層である。底面はやや凸凹がある。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

ＳＫ03土坑(第12図、図版３－３・４)

調査区北東部ＬＱ59グリッドⅢ層上面で検出された。ＳＩ04竪穴住居跡の南東に位置する。隅丸に近い方形を呈し、一辺0.78m、深さは0.23mである。堆積層は２層に分かれる。第２層は炭化物のみが堆積した層であり、炭化した木片が混じる。この炭化物はC^{14}年代測定で13～14世紀という年代が算定されている(詳細は第３章)。

ＳＫ05土坑(第12図、図版３－５・６)

調査区南東部ＭＡ51グリッドⅢ層上面で検出された。0.92m×0.86mの円形を呈し、深さは0.14mである。遺物は土師器が１点出土している。

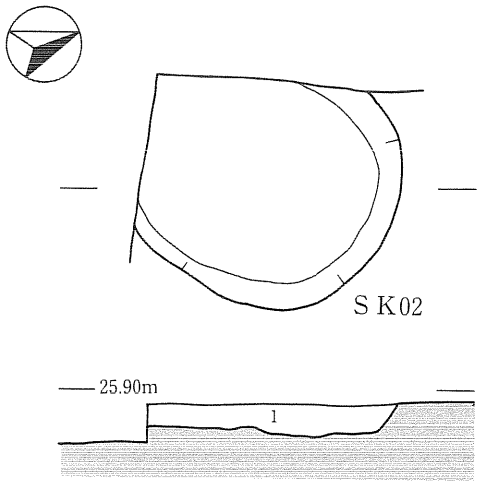
ＳＫ09土坑(第12図、図版３－８)

調査区北西部ＭＢ55グリッドⅢ層上面で検出された。南側は削平されているが、径1.54m程の円形を呈するものと考えられる。深さは0.34m、堆積層は２層に分けられる。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

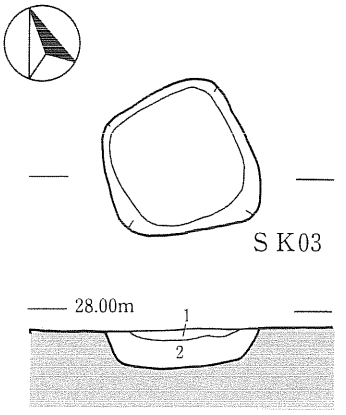
３　焼土遺構

ＳＮ10焼土遺構(第11図)

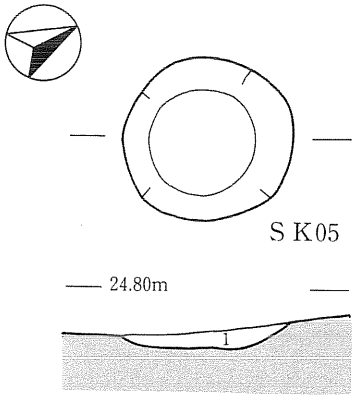
調査区北東部ＬＲ60グリッドⅢ層上面で確認された。ＳＩ04竪穴住居跡の南東隅に位置し、同住居跡を切る。焼土の範囲は0.4m×0.36mであり、不整円形を呈する。層厚は１㎝にも満たない。遺物は出土しておらず、時期は不明である。



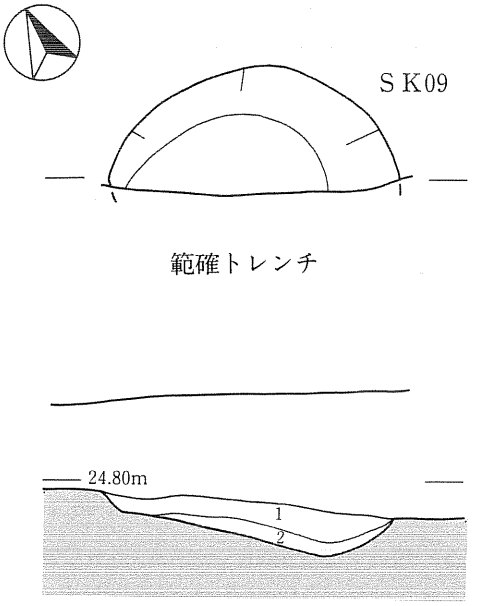
.黒褐色土(10YR2/3)　しまり中
褐色土(10YR4/3)を径1～1.5cm程のブロック状に10%、指頭大の礫を3%含む。



1.黒褐色土(10YR3/1)　しまり中
暗褐色土(10YR3/4)をブロック状に含む。
2.黒色土(10YR1.7/1)　しまり弱　炭化物が堆積する。



1.黒褐色土(10YR3/2)
小石を1%含む。にぶい黄褐色土(10YR4/3)を径1～2cm程のブロック状に5%含む。



1.黒褐色土(10YR3/2)　しまりあり
褐色土(10YR4/4)をブロック状に15%、
炭化物(径1～2mm程)を5%、小石を1%含む。
2.灰黄褐色土(10YR4/2)　しまり弱　炭化物を斑に3%含む。

0　2m

第12図　SK02・03・05・09 土坑

第３節　遺構外出土遺物

遺構外からは、須恵器・土師器が出土している。今回の調査では旧石器時代の石器は出土していないが、範囲確認調査では１点出土しているので、参考資料として掲載することとする。

１　須恵器(第13図～第15図１)

坏・高台付坏・蓋・甕・壷が出土している。

坏(第13図１～５)・高台付坏(第13図６・７)

１の口縁部にはごくわずかではあるが漆が付着している。坏で底部が残存するものは５点で、すべて回転ヘラ切りによりロクロから切り離されている。６の高台は高さが0.4cmである。７は高台付坏であるが、高台部分が剝落している。底部から体部にかけて丸みを帯びて立ち上がり、口縁部に向かってやや先細りになる。また、底部中央が粘土の接合面に沿って径10cm程剝落している。

蓋(第13図８)

坏蓋でつまみは径が2.6cm、高さが1.0cmである。

甕(第13図９・第14図)

第13図９は体部上半に最大径をもち、ロクロ成形後、外面下部に縦方向にヘラケズリを施す。内外面には自然釉がかかる。第14図はすべて体部破片である。外面にタタキメ、内面にはアテ具痕がみられる。タタキメはすべて平行であり、アテ具は平行のもの(第14図３・５・６)、青海波状のもの(同図４)が確認された。

壷(第15図１)

１点のみ確認された。内外面ともロクロ成形で、外面の体部上半に平行沈線が２本施される。

２　土師器(第15図２～８、第16図１～３)

坏(第15図２～８)

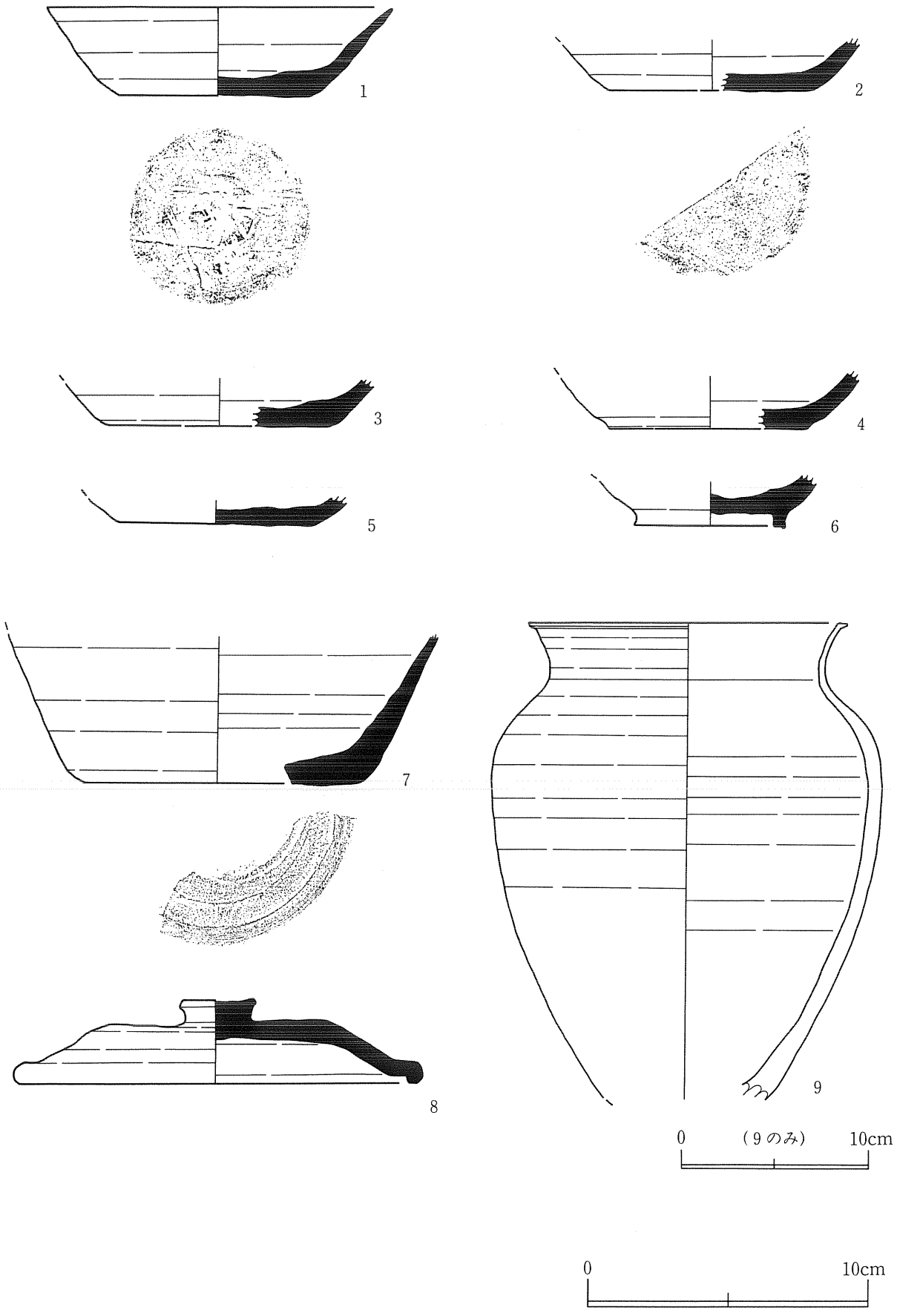
出土した坏は一部摩滅により不明のもののあるが、ロクロによる成形である。底部が残存するものは７点で、ロクロからの切り離しは摩滅しているものを除いて、回転糸切り、回転ヘラ切りが各３点ずつ確認された。第15図２は体部下半がふくらみ、口縁部が先細りする器形である。同図６は底部と体部の境に粘土積み上げの痕跡がみられ、やや外湾しながら立ち上がる。

甕(第16図１～３)

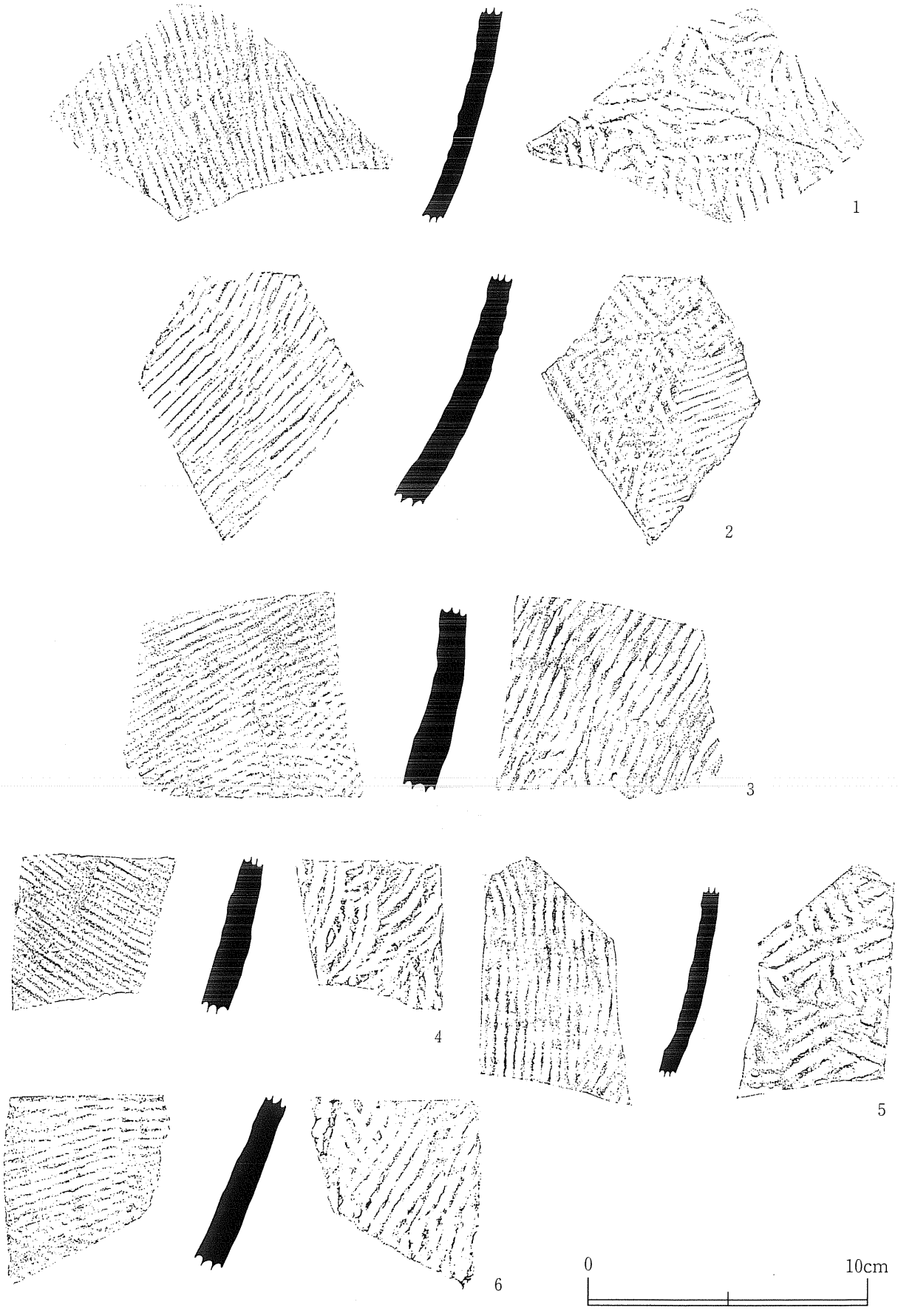
１は体部から頸部にかけて「く」の字状に屈曲し、頸部から口唇部にかけて「く」の字状に摘み出した器形で、内外面ともロクロナデによる成形である。２・３は甕の体部破片であり、外面に平行タタキメ、内面には平行アテ具痕が残る。

３　旧石器時代の石器(第16図４、図版６－５)

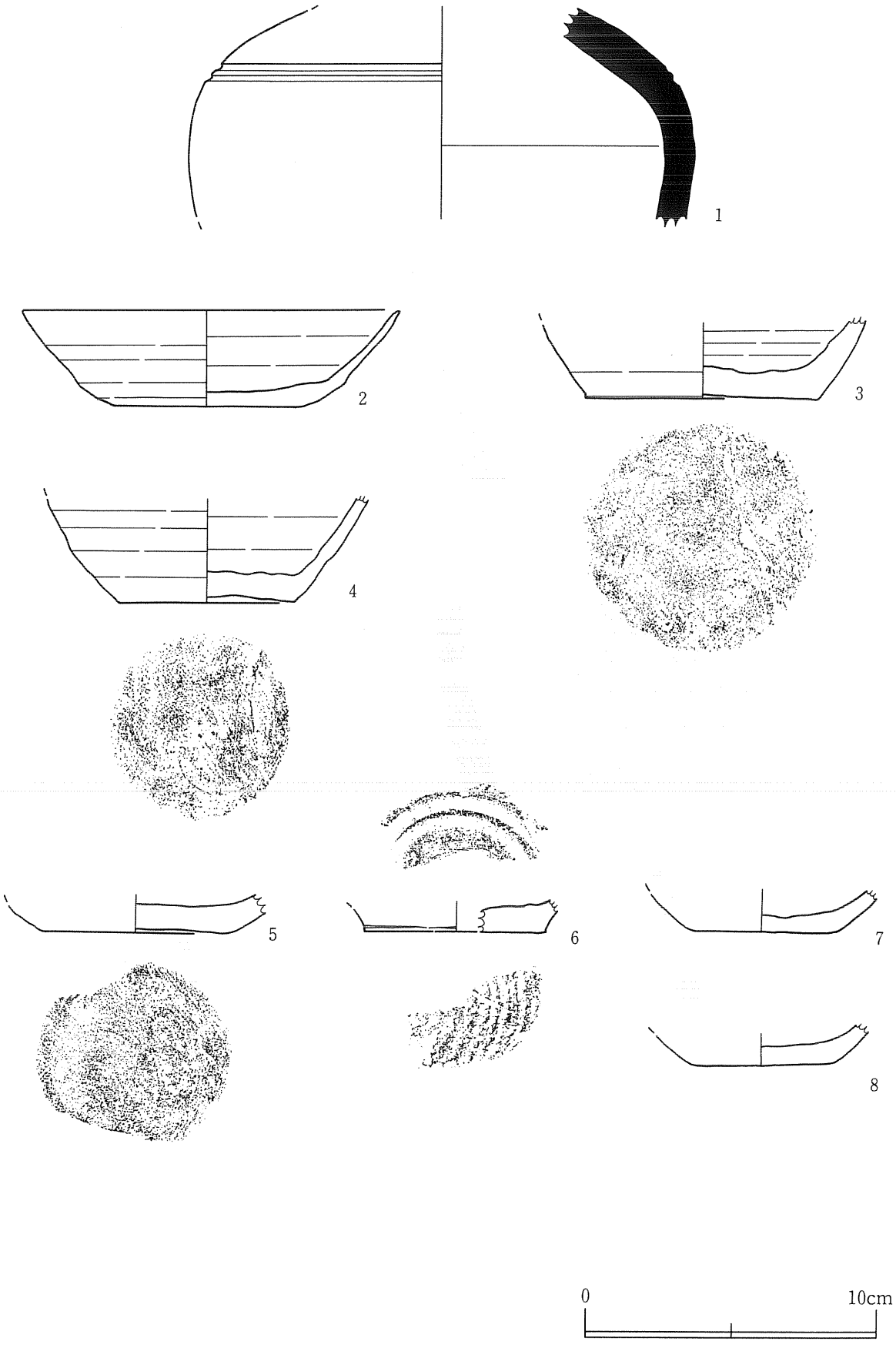
範囲確認調査においてＬＲ60グリッド近くの地山直上で１点のみ出土した。長さ10.6cm、幅2.4cm、厚さ1.1cmのエンドスクレイパーである。縦長剝片の両側と先端部を裏面からの加工により成形し、刃部を作りだしている。



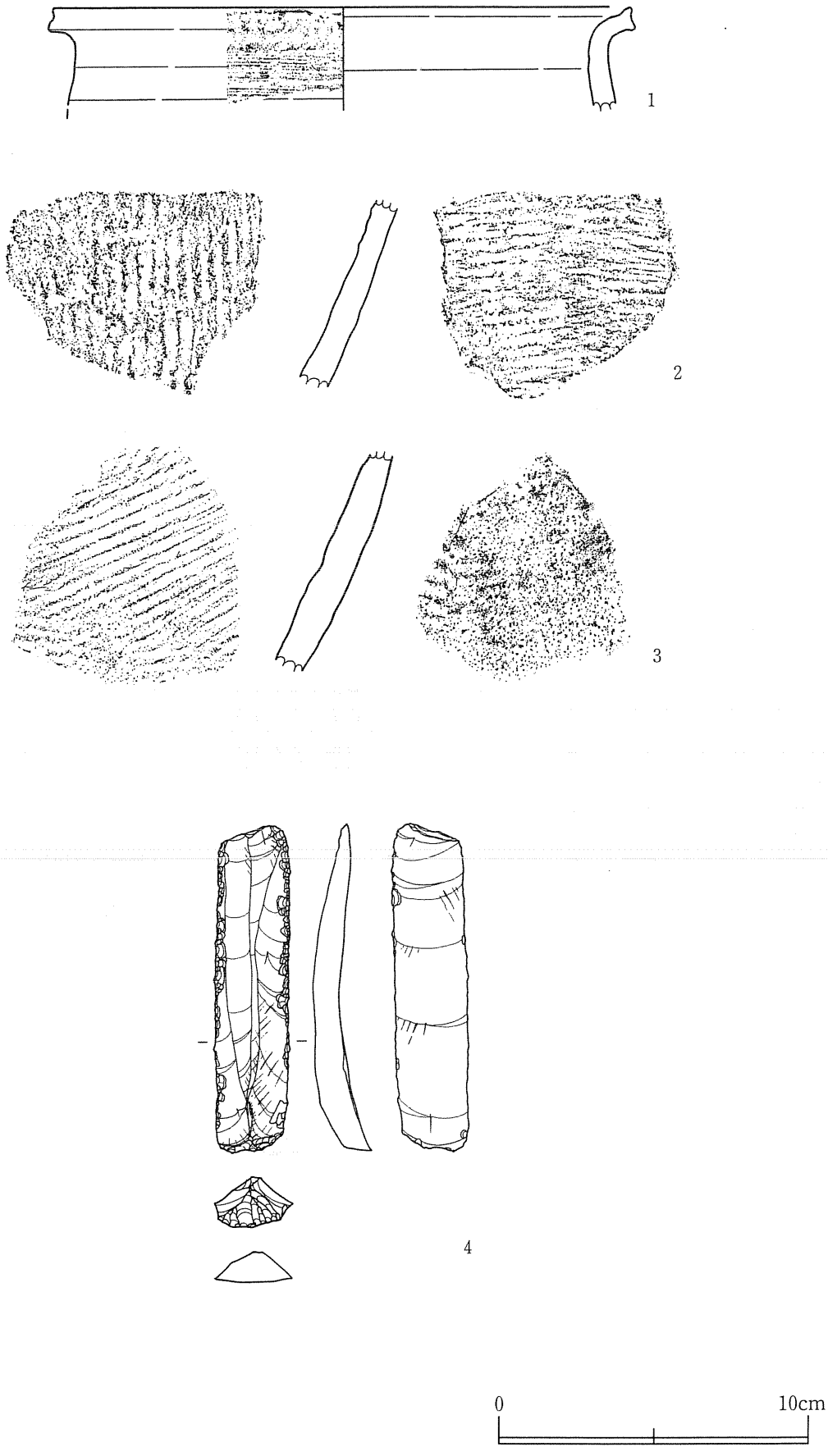
第13図　遺構外出土遺物(1)



第14図　遺構外出土遺物（２）



第15図　遺構外出土遺物（３）



第16図　遺構外出土遺物（４）

挿図No.	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	器面調整	切り離し技法	備考	図版No.
13－1	LR57	須恵器	坏	12.3	6.6	3.2	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	回転ヘラ切り	漆(口縁部)	5－2
13－2	1トレ	須恵器	坏	—	7.2	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	回転ヘラ切り		5－3
13－3	2トレ	須恵器	坏	—	7.8	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	回転ヘラ切り		
13－4	LS61	須恵器	坏	—	7.1	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	回転ヘラ切り		
13－5	1トレ	須恵器	坏	—	7.0	—	外面：摩滅により不明 内面：ロクロナデ	回転ヘラ切り		
13－6	3トレ	須恵器	高台付坏	—	5.4	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	回転ヘラ切り		5－4
13－7	LS51	須恵器	甕	—	9.7	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	回転ヘラ切り	底部に円形の割れ	5－5
13－8	1トレ	須恵器	蓋	14.2	—	3.0	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	—		
13－9	7トレ	須恵器	甕	16.9	—	—	外面：ロクロナデ→ヘラケズリ 内面：ロクロナデ	—	内外面に自然釉	
14－1	1トレ	須恵器	甕	—	—	—	外面：タタキメ 内面：アテ具痕	—		
14－2	LT58	須恵器	甕	—	—	—	外面：タタキメ 内面：アテ具痕	—		
14－3	16トレ	須恵器	甕	—	—	—	外面：タタキメ 内面：アテ具痕	—		
14－4	MA55	須恵器	甕	—	—	—	外面：タタキメ 内面：アテ具痕	—		
14－5	LQ60	須恵器	甕	—	—	—	外面：タタキメ 内面：アテ具痕	—		
14－6	MC54	須恵器	甕	—	—	—	外面：タタキメ 内面：アテ具痕	—		
15－1	MC52・53	須恵器	壺	—	—	—	外面：ロクロナデ→タタキメ 内面：ロクロナデ	—		
15－2	1トレ	土師器	坏	12.9	6.4	3.4	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	回転ヘラ切り		5－6
15－3	7トレ	土師器	坏	—	8.1	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	回転糸切り		5－7
15－4	4トレ	土師器	坏	—	6.1	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	回転ヘラ切り		5－8
15－5	7トレ	土師器	坏	—	6.4	—	外面：　— 内面：ロクロナデ	回転糸切り		
15－6	7トレ	土師器	坏？	—	6.4	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	回転ヘラ切り		
15－7	4・7トレ	土師器	坏？	—	5.4	—	外面：ロクロナデ 内面：摩滅により不明	回転糸切り		
15－8	7トレ	土師器	坏？	—	4.6	—	外面：摩滅により不明 内面：摩滅により不明	不明		
16－1	4トレ	土師器	甕	18.4	—	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	—		
16－2	4トレ	土師器	甕	—	—	—	外面：タタキメ 内面：アテ具痕	—		
16－3	4トレ	土師器	甕	—	—	—	外面：タタキメ 内面：アテ具痕	—		

※計測値単位はすべてcmである。

第2表　遺構外出土遺物計測表

第３章　自然科学的分析

元木山根Ⅱ遺跡における放射性炭素年代測定

株式会社　古環境研究所

１．試料と方法

No.	試料	試料の種類	重量	前処理・調整	測定法
1	ＳＫ03	炭化物	3.70ｇ	酸／アルカリ／酸洗浄 石墨調整	ＡＭＳ法 （加速器質量分析法）

２．測定結果

試料名	^{14}Ｃ年代 （年BP）	δ^{13}Ｃ （‰）	補正^{14}Ｃ年代 （年BP）	暦年代	測定No. Beta-
No.1	670±40	−27.3	630±40	交点AD1310，1365，1380 2σAD1285 to 1410 1σAD1295 to 1395	137720

１）^{14}Ｃ年代測定値

試料の^{14}Ｃ/^{12}Ｃ比から、単純に現在（1950年AD）から何年前かを計算した値。^{14}Ｃの半減期は5,568年を用いた。

２）δ^{13}Ｃ測定値

試料の測定^{14}Ｃ/^{12}Ｃ比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}Ｃ/^{12}Ｃ）。この値は、標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

３）補正^{14}Ｃ年代値

δ^{13}Ｃ測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}Ｃ/^{12}Ｃの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

４）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}Ｃ濃度の変動に対する補正により、暦年代（西暦）を算出した。具体的には年代既知の樹木年輪の^{14}Ｃの詳細な測定、サンゴのU-Th年代と^{14}Ｃ年代の比較により補正曲線を作成して暦年代を算出する。最新のデータベース（"INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration"Stuiver M.,et.al.,1998,Radiocarbon40(3)）により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代との交点は、補正^{14}Ｃ年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。１σ（68％確率）・２σ（95％確率）は、補正^{14}Ｃ年代値と暦年代補正曲線との交点との暦年代値を意味する。したがって、複数の交点が表示される場合や、複数の１σ・２σ値が表記される場合もある。

５）測定No.

測定は、Beta Analytic Inc.（Florida,U.S.A）において行われた。Beta-は同社の測定No.を意味する。

第4章　まとめ

今回の調査では第2章で述べたように竪穴住居跡2軒、土坑4基、焼土遺構1基が検出され、住居内から土師器・須恵器が出土した。ここでは遺物が集中して出土した第1号竪穴住居跡について若干考察する。

第1号竪穴住居跡は一辺約4.9mの隅丸方形を呈し、壁溝及び4本の主柱穴を伴う。壁溝は幅0.12m～0.24m、深さ1.9cm～3.6cmである。住居は北東から南西にかけて緩やかに傾斜した場所に構築され、壁溝は斜面上方の北壁と東壁にかけて設けられており、住居内への水の進入を防止する機能を有していた可能性が考えられる。

遺物は須恵器・土師器が出土している。土師器の丸底甕(第9図4)は、8世紀前葉から10世紀前半まで確認されている。ロクロ成形で外面にタタキメ、内面にアテ具痕があるものは、利部氏の分類でB類に属し、8世紀から9世紀にかけて卓越して見られる器形である(利部：1997)。アテ具痕の種類によりさらに細分がなされ、時期ごとの特徴が出されている。第9図4は摩滅が著しいが、アテ具痕は平行のもの(c類)と考えられる。平行のものは9世紀代に属するものとされており、第9図4もこの時期に属すると考えられる。

9世紀前半に属すると考えられる遺物が多いことから、本同住居跡もこの時期に機能していたものと考えられる。

参考文献

利部　修　「出羽国の丸底長胴甕をめぐって」　『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第12号
秋田県埋蔵文化財センター　1997(平成9)年

利部　修　「竹原窯跡における坏蓋の変化」　『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第6号
秋田県埋蔵文化財センター　1991(平成3)年

秋田県教育委員会　『秋田ふるさと村(仮称)建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―富ヶ沢A・B・C窯跡　田久保下遺跡　富ヶ沢1号～4号塚』　秋田県文化財調査報告書第220集　1992(平成4)年

秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XI―竹原窯跡―』　秋田県文化財調査報告書第209集
1991(平成3)年

秋田県教育委員会・秋田県教育庁払田柵跡調査事務所　『払田柵跡　第115・116次調査概要』
秋田県文化財調査報告書第307集　払田柵跡調査事務所年報1999　2000(平成12)年

1　調査前風景(南西→)

2　調査区全景(元木山公園→)

図版2

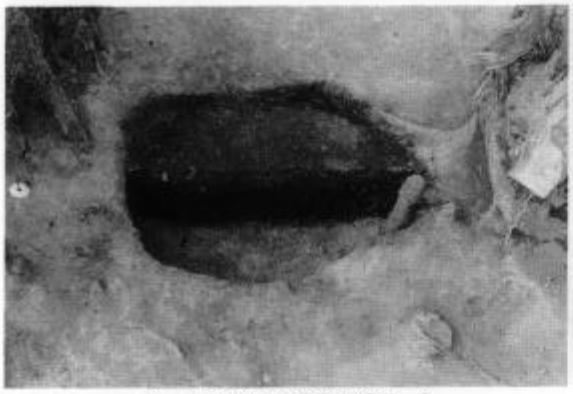
1　ＳＩ01遺物出土状況（１）（南→）

2　ＳＩ01遺物出土状況（２）

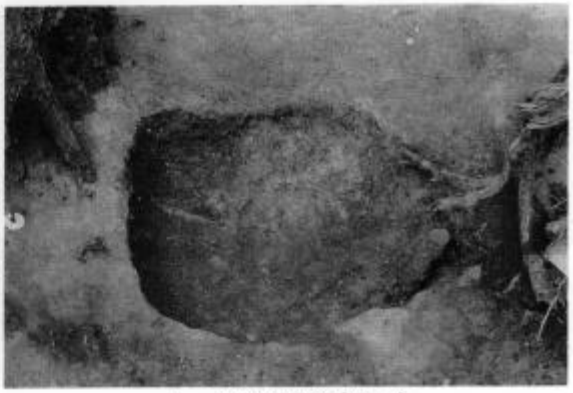
3　ＳＩ01完掘（南→）

1　ＳＩ04土層断面(東→)

2　ＳＩ04完掘(南→)



3　ＳＫ03土層断面(南→)

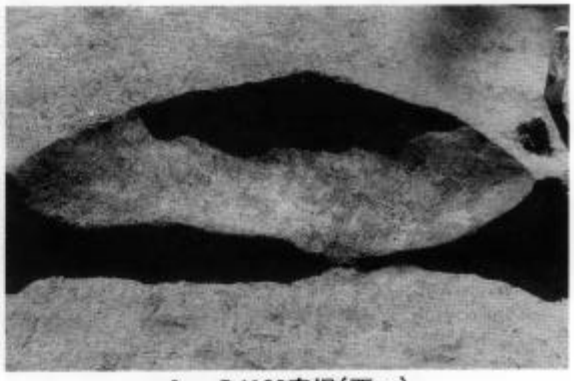


4　ＳＫ03完掘(南→)

5　ＳＫ05土層断面(西→)

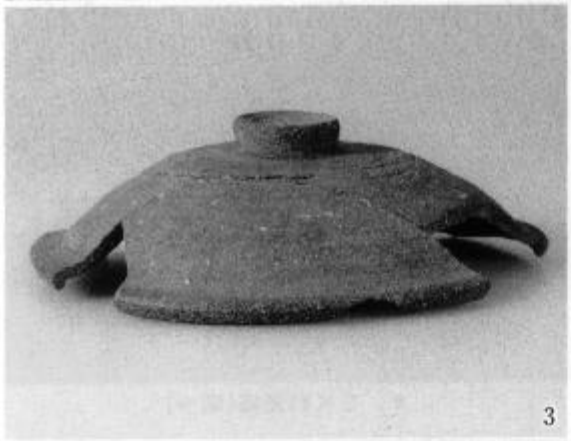
6　ＳＫ05完掘(西→)

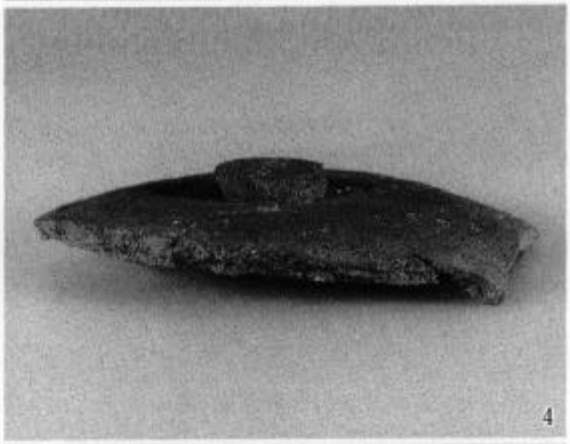
7　ＳＫ02土層断面(南→)

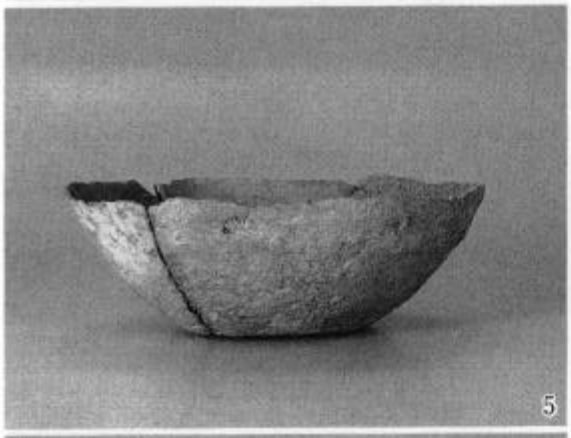


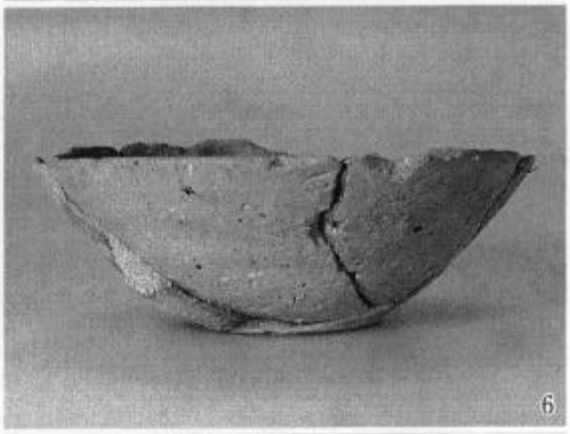
8　ＳＫ09完掘(西→)

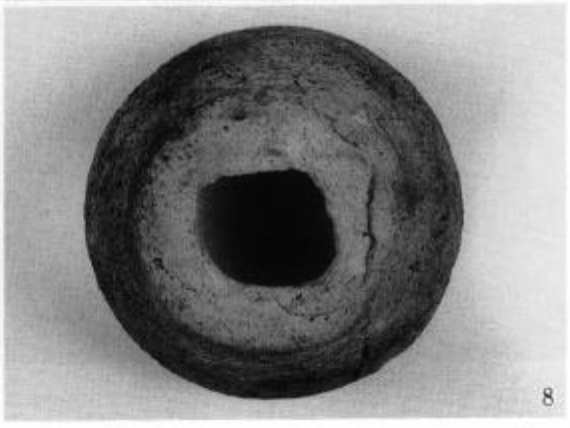
図版4









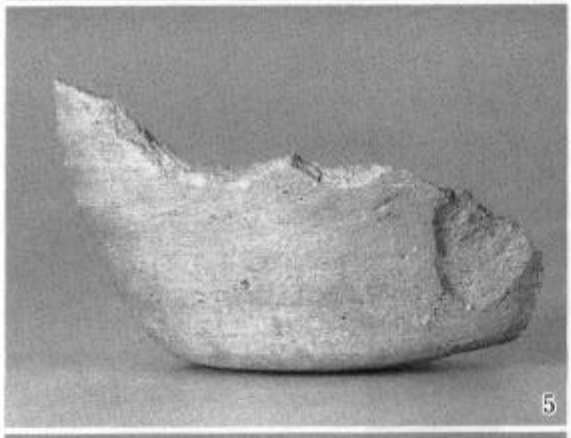


1

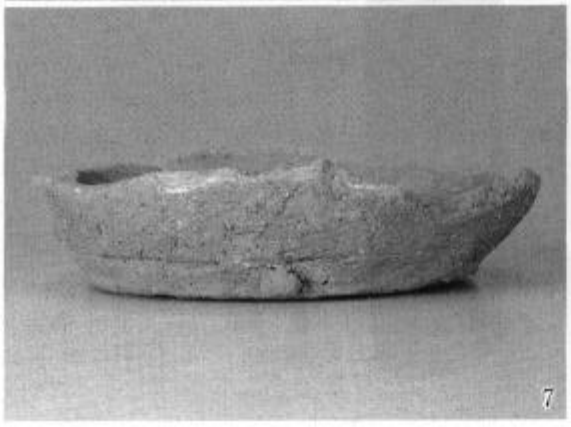
2

3

4


5

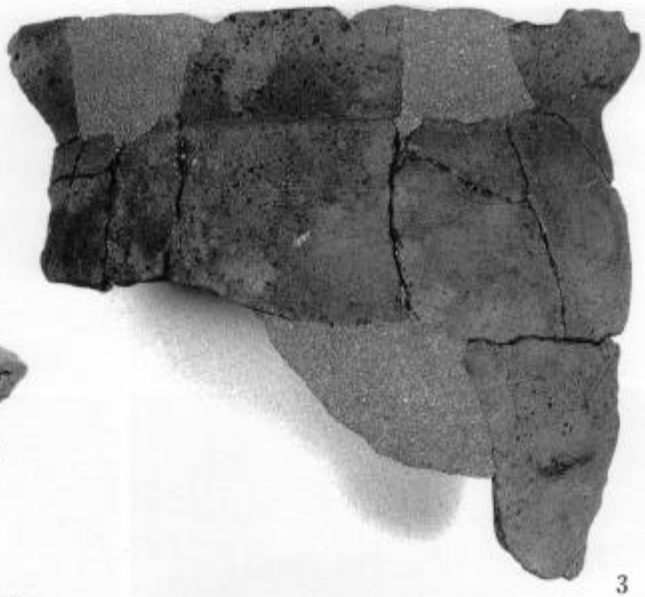
6


7

8

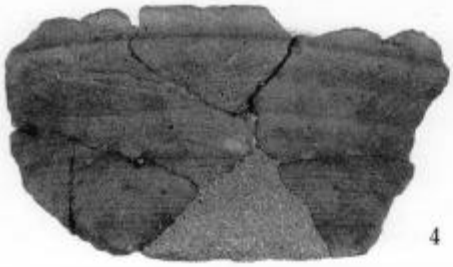
図版6

1



3

2



4

5

毘 沙 門 遺 跡

(4 BSM)

第１章　遺跡の概要

第１節　遺跡の概観

毘沙門遺跡は豊川により形成された平坦な沖積平野に位置し、西には国道13号線が並行して接する。調査区内は水田や畑地として利用されていた。標高は３ｍ～７ｍである。調査区東側には隣接する民家で使用されていた井戸があり、井戸底には桶が埋設されていた。この井戸内からは磁器の瓶が３点出土していたが、３点とも頸部から上部が欠損していた。

調査にあたっては、南部をＡ区、北部をＢ区として呼称することとした。

また、調査開始当初の調査面積は840㎡であったが、調査区東側の宅地部分に遺構が広がると考えられたため、工事区域内にあたる100㎡を拡張して940㎡を調査することとなった。なお、北部Ｂ区東側の現道路部分については、周囲の遺構・遺物検出状況と現況から遺構の分布は希薄であると考えられたため、幅２ｍのトレンチを設定して調査をおこなった。

第２節　調査の方法

発掘調査はグリッド法を採用した。調査区近くに設置されている日本海沿岸東北自動車道建設の道路中心杭（ＳＴＡ.14＋00）から国家座標系第Ｘ系座標北を求めて南北基準線とし、これに直交する東西基準線を設け、４ｍ×４ｍのグリッドメッシュを設定した。このＳＴＡ.14＋00を今回の調査基準杭ＭＡ50とした。グリッド杭には、東西方向には東からＬＱ…ＬＴ、ＭＡ、ＭＢ…のアルファベットと、南北方向には南から北に向かって昇順となる連続した２桁の数字を組み合わせた記号を記入し、グリッド名とした。方眼杭に囲まれたグリッドの呼称は、その南東隅に位置する杭を代表させた。

検出した遺構は、その種類を問わず一連の番号を付している。ただし、柱穴様ピット（ＳＫＰ）については別個に１から番号をあてている。番号登録の後、遺構と判断できなくなったものについては欠番として扱った。また、掘立柱建物跡（ＳＢ）となったＳＫＰについても欠番として扱い、建物内で新たに一連の番号を付した。

調査の記録は図面と写真によった。遺構・遺物の実測は、グリッド杭を基準とする簡易遣り方測量を採用している。図面は基本的に１/20縮尺とした。ただし調査範囲等は１/100縮尺でおこなっている。写真撮影は35㎜のネガカラーフィルム、リバーサルフィルムを中心に、長期保存のためモノクロフィルムをまじえておこなった。

第３節　調査の経過

６月14日　センターからの発掘機材の積み降ろし。ベルトコンベアーの設置(～15日)。

６月15日　表土除去開始(～17日)。須恵器片等の遺物19点出土。柱穴10数基確認。
昭和町教育委員会瀬下氏来跡。

６月16日　調査区中央部から柱材・柱痕の残る柱穴多数検出。土坑と思われるプラン１基検出。
確認面から焼けた石が出土。擂鉢等の遺物出土。

６月17日　調査区南部をＡ区、北部をＢ区と呼称することとした。Ｂ区では遺構プラン検出されず。
Ｂ区西側にサブトレンチを入れて堆積状況を確認。Ｂ区東側の砂利道にトレンチを設定。

６月18日　Ａ区精査(～14日)。ＳＫ03・04の確認写真撮影。Ａ区で柱穴が多数検出されていることから、確認写真を南から撮影。ＳＫ04の確認面から礫がまとまって検出された。ＳＸ02の埋土に焼けた木が混じる。

６月21日　ＳＫＰの検出・精査。ＳＫＰ内から柱材検出。ＳＫ08・09、ＳＸ02確認写真、ＳＫ03断面写真撮影。

６月22日　ＳＫ02から板、陶磁器片等出土。ＳＫ04検出面から0.3m程下から桶を２基検出。
ＳＫ09の断面写真、実測、完掘写真撮影。新しい時期のゴミ捨て場の可能性あり。

６月23日　ＳＫ01確認写真、ＳＫ02断面写真撮影。ＳＫ02埋土よりガラス片出土。ＳＫ04断面写真、ＳＫ09の完掘写真、ＳＫＰ断面・完掘写真撮影。遺構の完掘平面実測(～13日)。

６月24日　遺構精査(ＳＫＰの半截)。午後には雨のため作業中止。

６月25日　ＳＫ01断面写真、ＳＫ02完掘写真、ＳＫ04遺物検出状況写真、ＳＫＰ断面・完掘写真撮影。

６月28日　ＳＫ04出土の桶の断面図作成。ＳＫＰ断面写真撮影。
Ａ区東側調査区外100㎡の拡張について午後に現地立合い。

６月29日　ＳＫ04は桶を掘り上げて精査終了した。

６月30日　雨のため作業中止。

７月１日　Ａ区東側拡張部分の表土除去、精査開始(～14日)。

７月２日～５日　雨により冠水。遺構保存のため作業中止。

７月６日　復旧作業。ＳＫＰ完掘写真撮影。

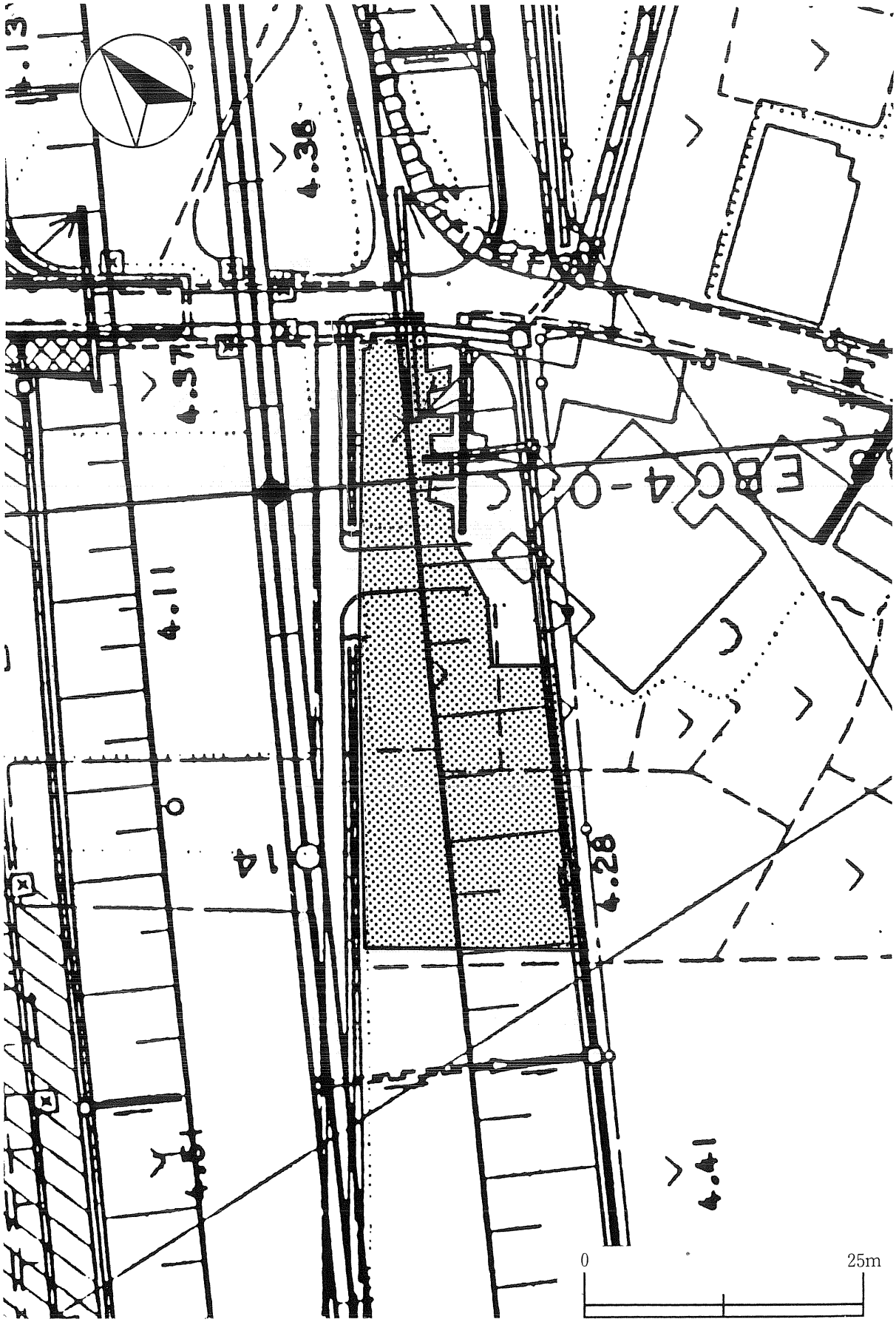
７月７日　明日の写真撮影に備え、タワーの移動。午前中でベルトコンベアーすべて撤収。

７月８日　完掘全景写真撮影(南・西・北から)。

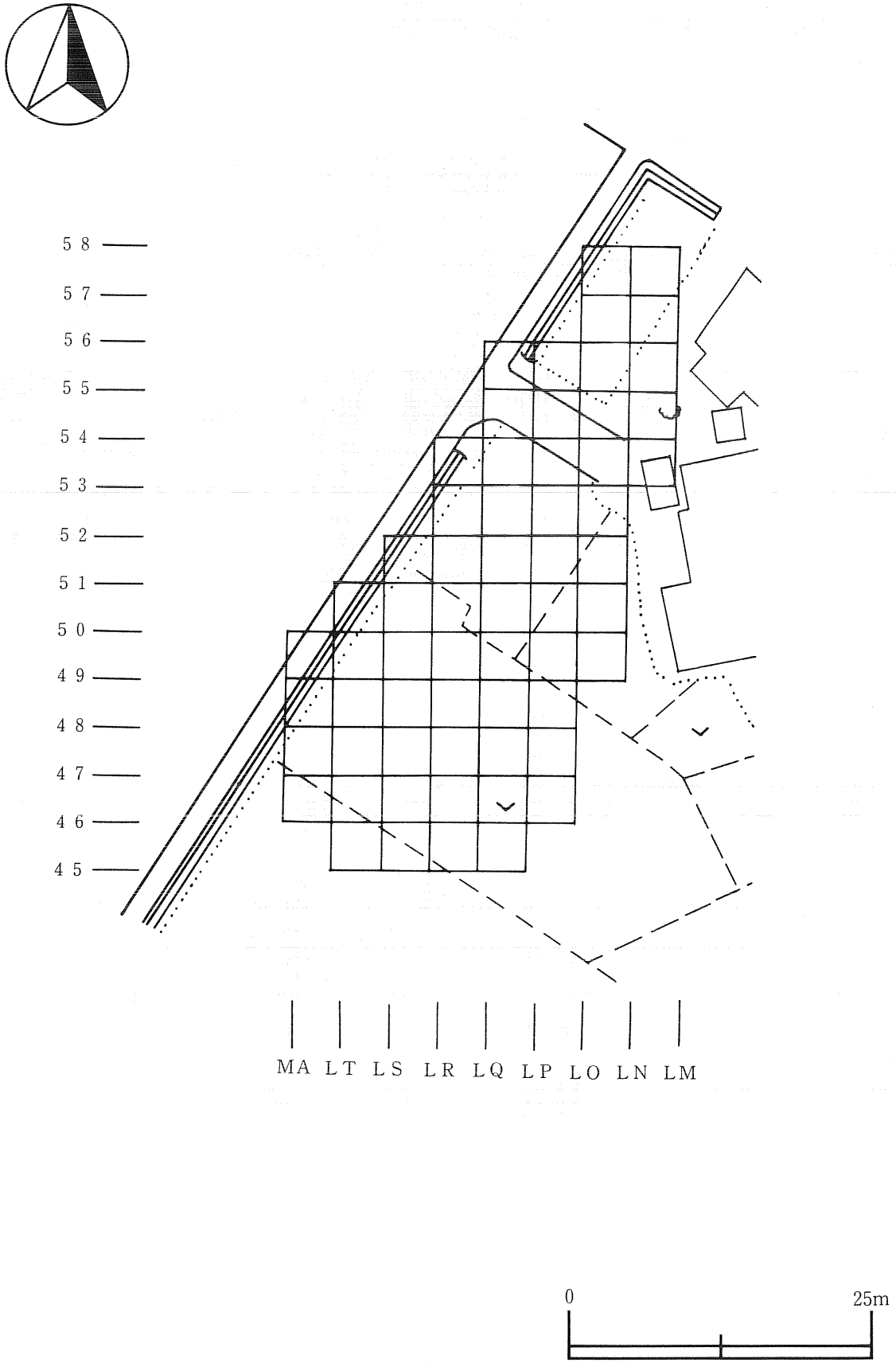
７月９日　遺構集中部分(Ａ区東側)の写真撮影。

７月13日～14日　撤収準備。13日栗山氏来跡。

７月15日　撤収。機材を大平遺跡に搬出しすべての調査を終了した。



第１図　調査範囲図


58
57
56
55
54
53
52
51
50
49
48
47
46
45
MA LT LS LR LQ LP LO LN LM
0
25m

第2図　グリッド配置図

第２章　調査の記録

第１節　基本層序

調査区内は、全体に耕作土が20cm～30cm均一に堆積し、耕作土下が遺構確認面であった。各層位の特徴は以下の通りである。

Ⅰ層：耕作土　黒褐色土

Ⅱ層：灰褐色土　遺構確認面

第２節　検出遺構とその遺物

今回の調査で検出された遺構は、土坑が５基、掘立柱建物跡が１棟、柱穴状ピットが132基である。遺構はすべて南部Ａ区から検出された。北部Ｂ区は耕作による攪乱が著しく、遺構は検出されなかった。

１　土坑

ＳＫ01土坑(第４図、図版３－１・２)

Ａ区中央部東側のＬＯ53グリッドで検出された。一辺1.02mの隅丸方形を呈し、深さは0.62mである。堆積層は２層に分けられる。１層と２層との間には炭化物を含む黒褐色土がうすく堆積している。底面からは木が出土している。

ＳＫ02土坑(第４図、図版３－３・４)

Ａ区中央部ＬＯ～ＬＱ52グリッドで検出された。長軸4.43m、短軸0.54m～1.43mの細長い不整形を呈する。底面は凸凹しており、深さは0.12m～0.34mと一定していない。堆積層は１層で、板くずや枝等を含む。磁器が多く出土したが、ほかにガラス片も出土しており、ゴミ捨て場として使用した土坑であると考えられる。第10図１の陶磁器は、破断面にガラス質の付着物が見られる。さらに器面の釉が青みを帯びた灰色に変色し、発泡あるいは融解していることから、二次的に熱を受けたものと考えられる(図版６－１)。

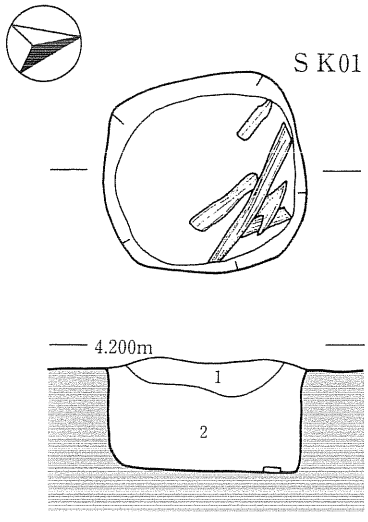
ＳＫ03土坑(第４図、図版３－５・６)

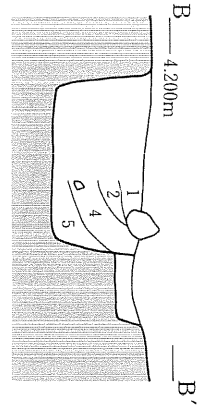
Ａ区中央部東側ＬＯ80グリッドで検出された。ＳＫＰ180・181・182を切る。径0.96mの円形を呈し、深さは0.54m、底面は平坦である。壁面は緩やかに立ち上がる。確認面と底面付近から礫が４点出土している。

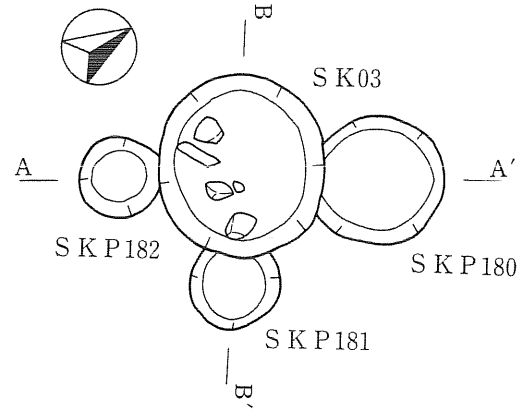
ＳＫ04土坑(第５図、図版２)

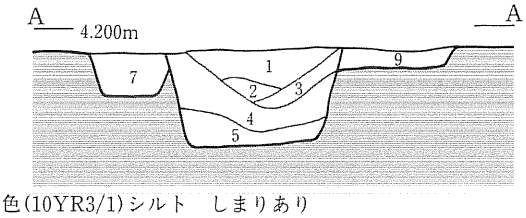
Ａ区南部ＬＱ46・47、ＬＲ46・47グリッドで検出された。隅丸の長方形を呈し、一辺が2.6m×1.1mである。確認面から0.3m程掘り下げたところから桶が２個並んで検出された。桶の規模は、西側が径30cm、高さ50cm、東側が径38cm、高さ45cmである。２個ともに底板は残されていなかった。堆積層は３層に分けられる。１・２層は遺構廃絶後に人為的に埋め戻した土で、２層からは遺物がまとまって出土している。

第3図　遺構配置図





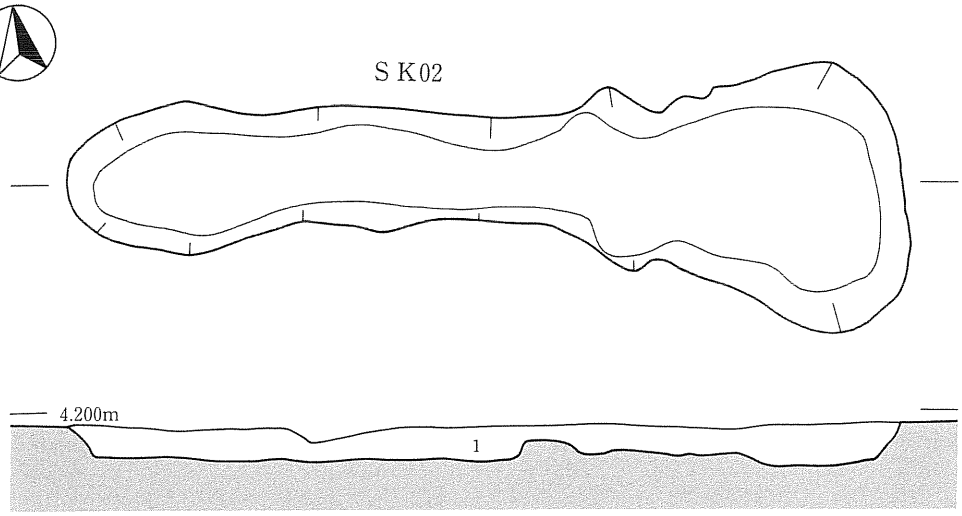




1.暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト　粘りあり　しまり弱
　黒色土が1層と2層の間に入る。
2.褐色(10YR4/4)シルト　粘りあり　しまり弱
　にぶい黄褐色土を斑状に含む。

1.黒褐色(10YR3/1)シルト　しまりあり
　炭化物(径３㎜程)を１％、黄褐色(10YR5/6)の地山ブロック(径２～５㎜)を10％含む。
2.黒褐色(10YR2/2)シルト　しまり弱
　１層下部にブロック状に入る。
3.黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト　しまりやや強
　黄褐色(10YR5/6) の地山ブロック(径２～５㎜)を10％含む。
4.にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト　しまりあり
　炭化物(径１㎜程)を５％、灰褐色土(10YR4/1)を含む。
5.黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト　しまり弱
　黒褐色(10YR2/2)シルトをブロック状に含む。
6.黒褐色(10YR3/2)シルト　しまりやや強
　地山を斑状に10％、炭化物(径１㎜)を１％含む。
7.黒褐色(10YR3/2)シルト　しまりやや弱
　黄褐色(10YR5/6)の地山をブロック状に10％含む。

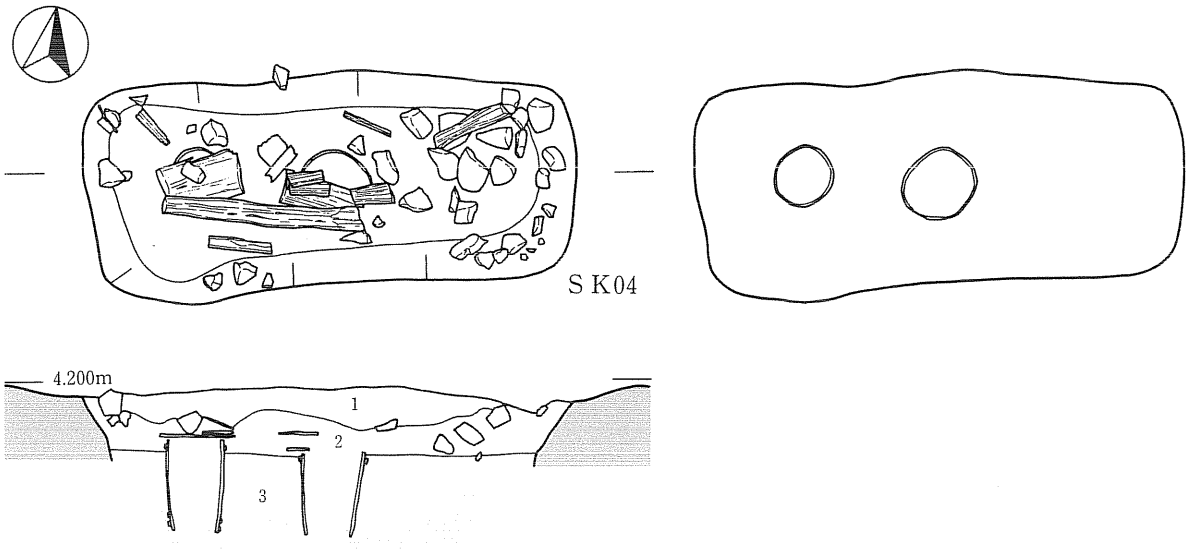
0　2m



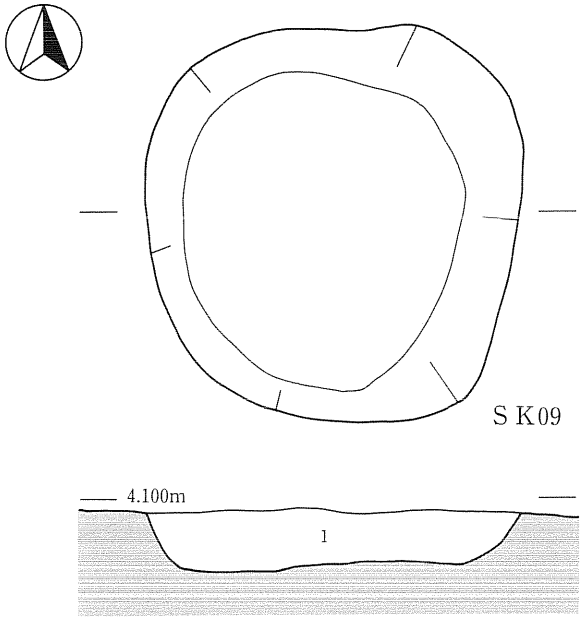
1.褐色(10YR4/4)シルト　粘りあり　しまり弱い
　褐色土、暗褐色土、グライ化した土、板くず、枝くず等などを含む。

0　2m

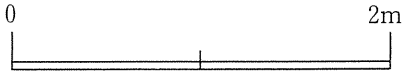
第４図　ＳＫ01・02・03土坑



1.明褐色(7.5YR5/6)シルト　粘りなし　しまり強　黒褐色土(10YR3/2)を20%斑状に含む。
2.黒褐色(2.5Y3/1)シルト　粘りあり　しまり非常に弱　遺物は2層より出土。
3.灰オリーブ色(3.5Y4/2)シルト　粘りあり　しまり非常に弱。



1.褐色(10YR4/4)シルト　粘りあり　しまり弱　褐色土、暗褐色土、グライ化した土、泥炭ぎみの土を含む。



第5図　SK04・09土坑

桶は３層に押し込むようにして確認された。３層はしまりが非常に弱く、掘り方のプランが確認されないことから、桶は３層に押し込んで設置したものと考えられる。桶の内部には下から１/３程まで３層が堆積していた。桶の上には板材や自然木がかぶさっており、残りの上部２/３は空洞になっている。

遺物は磁器、板材、礫、砥石が２層から出土した(第10図２～５、図版６－２～５)。磁器は椀(２、３)、瓶(４)がある。砥石(５)は両面に擦痕が確認された。

ＳＫ09土坑(第５図)

Ａ区中央部で検出された。1.98m×2.08mの不整円形を呈し、深さは0.34mである。

２　掘立柱建物跡

今回の調査では172基の柱穴状ピットが検出された(第６図)。柱材・柱痕が残るものや礎板・礎石が確認されたものがあったため、数棟の掘立柱建物跡が想定された。しかし、遺跡が調査区外の東側に広がっており、柱材・柱痕・礎板等から全体を把握できた建物跡は１棟であった。ここでは、全体を確認できた１棟のみを掘立柱建物跡として扱うこととした。他に建物跡と関係すると考えられる柱穴状ピットについては、次項で一括して扱うものとする。

ＳＢ10掘立柱建物跡(第７図)

掘立柱建物跡はＡ区中央東側で確認された(第６図)。５間×３間で規模は桁行13.6m、梁行6.25m、一部調査区外に延びるものの、東側に１間庇が付くものと考えられる。主軸方向はＮ－３°－Ｗで、ほぼ磁北を向く。身舎内は北から３間×３間と３間×２間に仕切られる。身舎の柱間は2.0m～4.1m、身舎から庇の縁までは3.25mを測る。身舎内のＰ21・23・25・26は柱間が2.0mである。

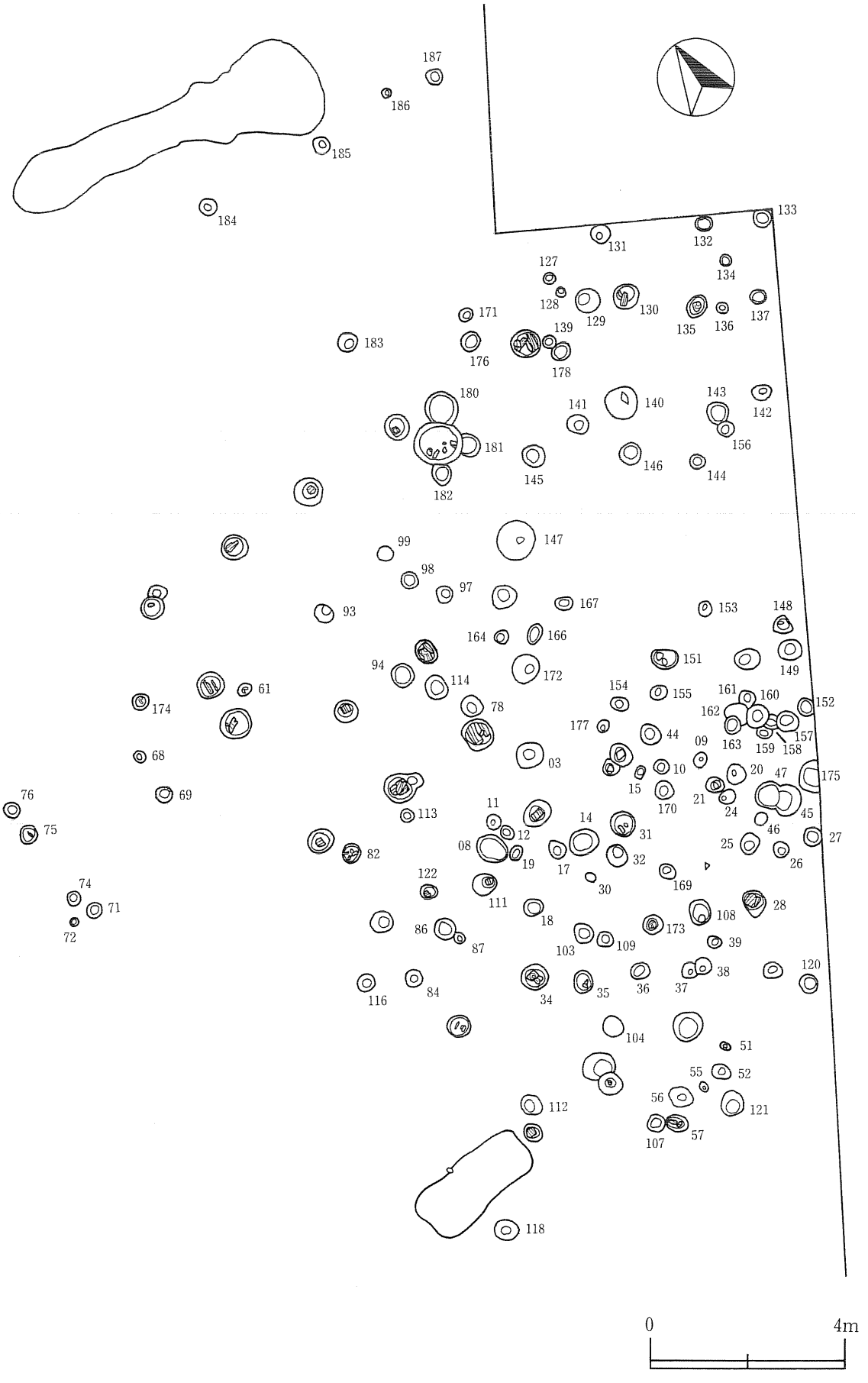
柱穴は切り合いのあるものも含め、27基に番号を付している。Ｐ７とＰ15の間は攪乱を受けているため、柱穴の有無は不明である。また、Ｐ27はプランは確認されず、材のみの検出である。柱穴の大部分から柱材や柱痕、礎板・礎石と考えられる板材や礫が検出された(第８・９図、図版４・５、第１表)。円形もしくは略円形で径0.37m～0.67mである。深さは平均0.32mで浅いものでは0.12m、深いものでは0.58mある。柱材は方形のものが多く、大きさは一辺が0.15m前後に分布する。

遺物はＰ５から出土した銭貨１点のみである(第10図６、図版６－６)。永楽通寶(明：1408年)で外径2.4cm、銭厚0.2cm、量目1.9ｇである。

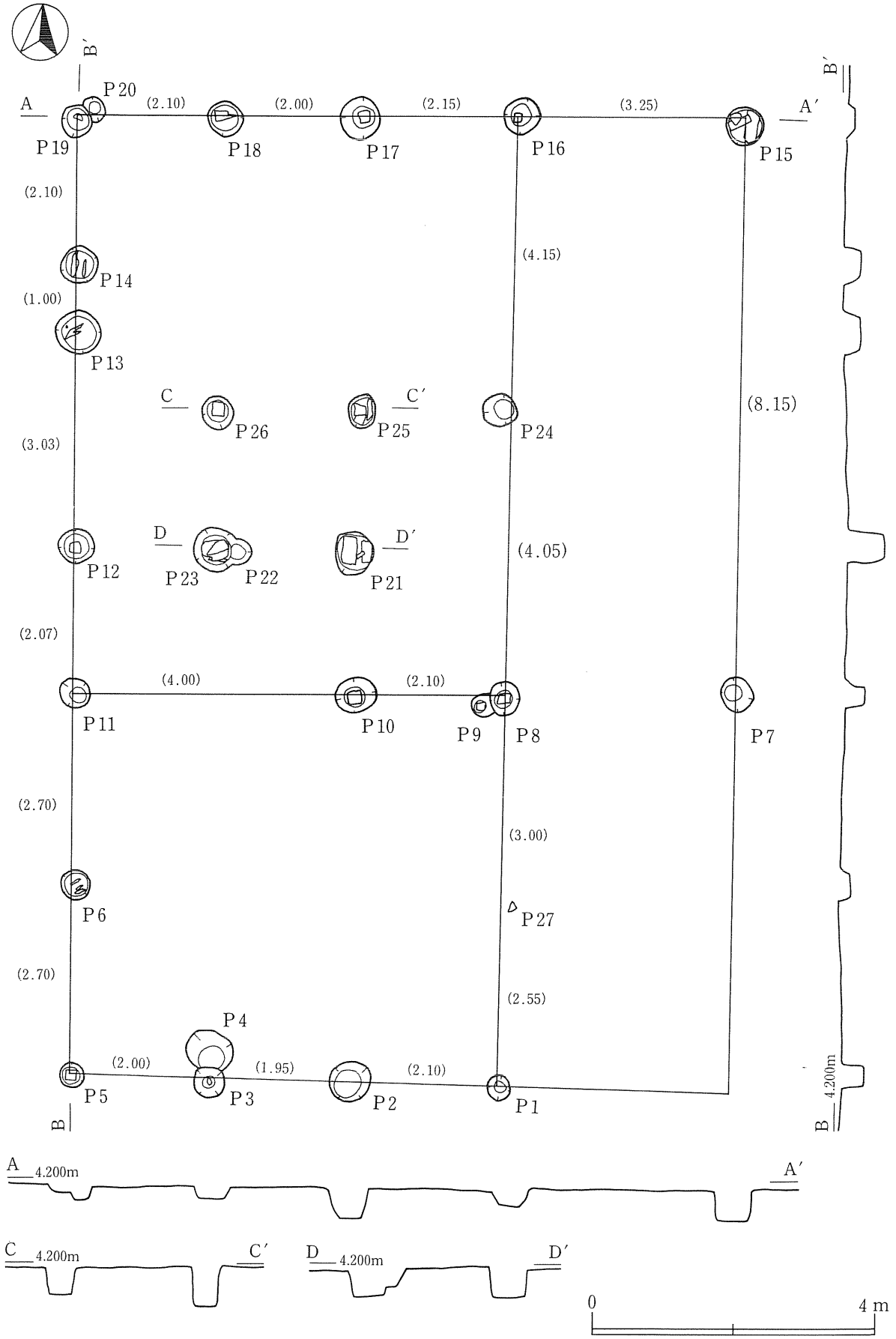
３　柱穴様ピット

確認された132基の柱穴様ピットのうち、掘立柱建物跡以外で柱材・柱痕、礎板等が残るものは31基である。各柱穴様ピットの計測値は第２～４表に記している。

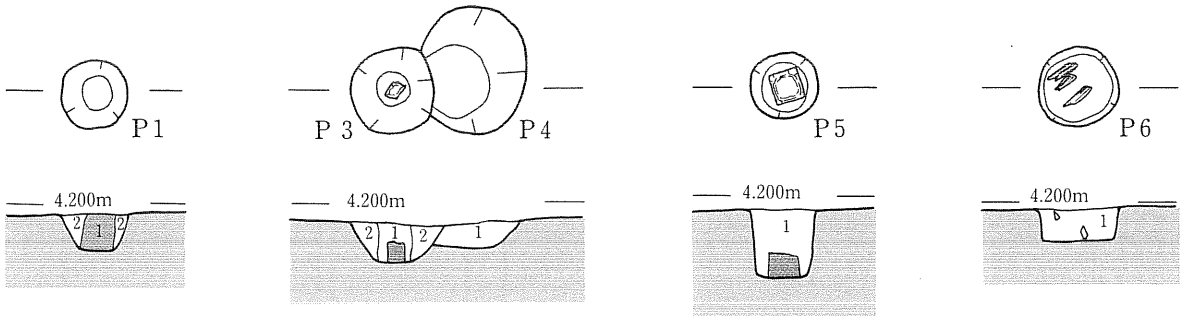
柱穴様ピットはＡ区中央部東側に集中して検出された(第６図)。平面形は円形・略円形・不整円形に分けられる。規模は大きいもので径0.8m前後、小さいものでは0.17m前後で、平均すると0.38mである。また、深さは浅いもので0.1m前後、深いものでは0.5m前後あり、平均すると0.25mである。残存する柱材から、太さ0.15m前後の材が多く用いられていたと考えられる。



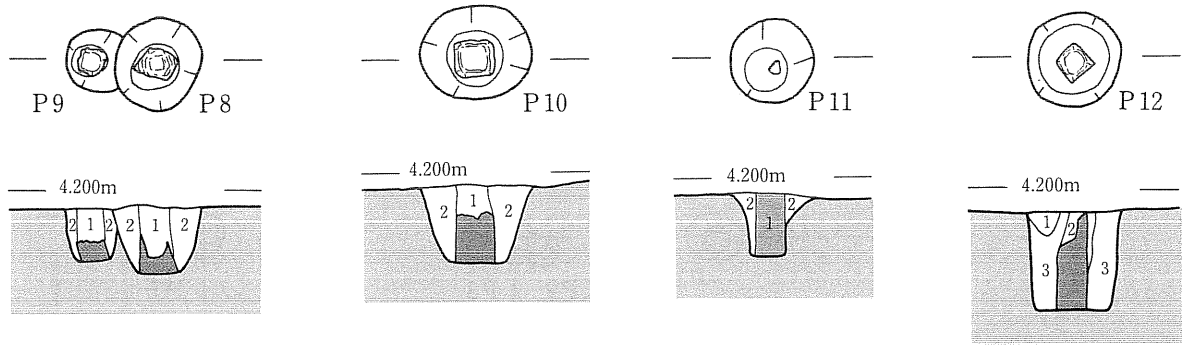
第６図　Ａ区東側遺構配置図



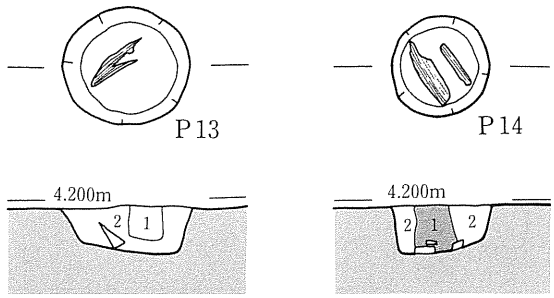
第７図　ＳＢ10掘立柱建物跡



P 1
1.黒褐色(10YR3/2)シルト　しまりあり　地山(10YR5/3)をブロック状に10%、径1～3㎜の炭化物を1%含む。
2.暗褐色(10YR3/3)シルト　しまりやや弱　炭化物(径1㎜程)を1%含む。
P 3
1.黒褐色(10YR3/2)シルト　しまりあり　地山(10YR5/3)をブロック状に10%、径1～3㎜の炭化物を1%含む。
2.にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト　しまりあり　黒褐色(10YR3/1)シルトを斑状に含む。炭化物(径1㎜程)を3%含む。
P 4
1.黒褐色(10YR3/1)シルト　しまりやや弱　炭化物を斑状に含む。
P 5
1.黒褐色(10YR2/2)シルト　粘りあり　褐色土(7.5YR4/4)を5%含む。
P 6
1.黒褐色(10YR3/2)シルト　しまりあり　地山(10YR5/3)をブロック状に10%、径1～3㎜の炭化物を1%含む。



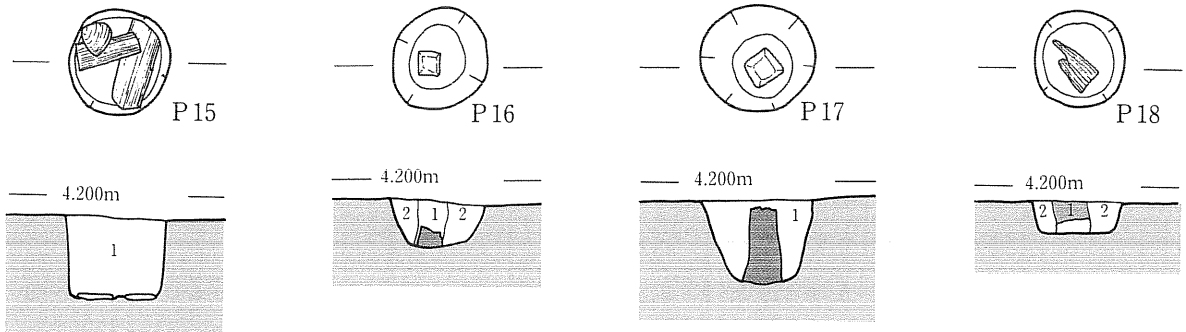
P 8
1.暗褐色(10YR3/3)シルト　しまりやや弱　炭化物(径1㎜程)を1%含む。
2.にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト　しまりあり　炭化物(径1㎜程)をわずかに含む。黒褐色(10YR3/1)シルトを斑状に含む。
P 9
1.灰褐色(10YR4/1)シルト　しまりあり　炭化物(径1㎜程)を1%含む。
2.にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト　しまりあり　黒褐色(10YR3/1)シルトを斑状に含む。
P10
1.暗褐色(10YR3/3)シルト　しまりやや弱　炭化物(径1㎜)を1%含む。
2.にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト　しまりあり　炭化物(径1㎜程)を1%含む。黒褐色(10YR3/1)シルトを斑状に含む。
P11
1.黒褐色(10YR3/1)シルト　にぶい黄褐色土(10YR4/3)を斑状に5%含む。炭化物(径1㎜)を1%含む。柱痕。
2.にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト　しまりあり　黒褐色(10YR3/1)シルトを斑状に含む。炭化物(径1㎜程)を3%含む。
P12
1.黒褐色(10YR2/2)シルト　粘りあり　しまり弱　にぶい黄褐色土(10YR5/4)を5%含む。
2.黒褐色(10YR2/2)シルト　粘りあり　しまり弱　にぶい黄褐色土(10YR5/4)を2%含む。
3.にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト　粘りあり　しまり中　黒褐色土(10YR2/2)を3%含む。

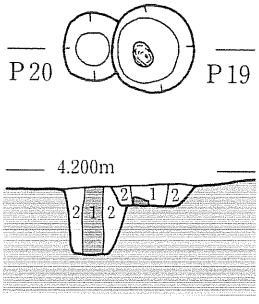


P13
1.黒褐色(10YR2/2)シルト　粘りあり　しまり弱
にぶい黄褐色土(10YR5/4)を5%、暗褐色土(7.5YR3/4)を3%含む。
2.にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト　粘りあり　しまり中
黒褐色土(10YR2/2)を10%、暗褐色土(7.5YR3/4)を3%含む。
P14
1.黒褐色(10YR2/2)シルト　粘りあり　グライ化する。
暗褐色土(7.5YR3/4)を5%含む。
2.黒褐色(10YR3/1)シルト　粘りあり
にぶい黄褐色土(7.5YR3/4)を5%含む。

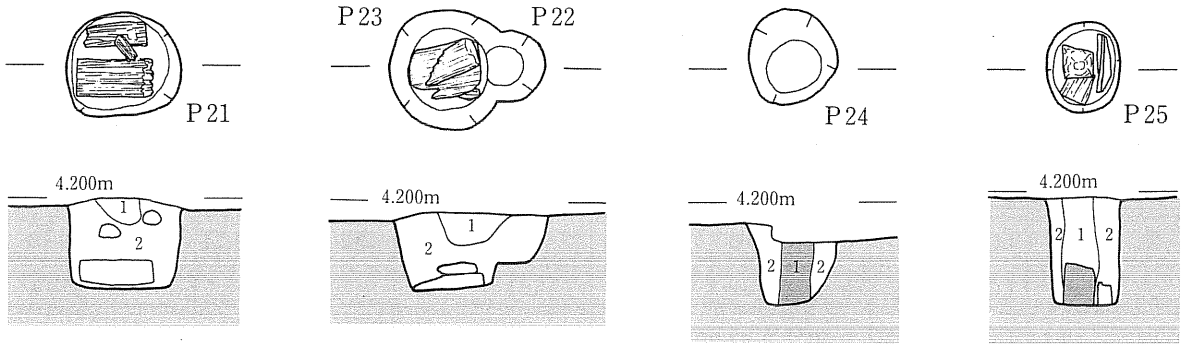
0　2m

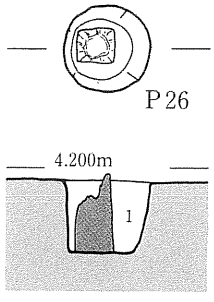
第8図　SB10掘立建物跡柱穴(1)





P15
1.黒褐色(10YR3/2)シルト　しまりあり　地山(10YR5/3)をブロック状に10%、径１～３㎜の炭化物を１%含む。下部に灰色(5Y4/1)砂が堆積する。
P16
1.黒褐色(10YR3/2)シルト　しまりやや弱
2.黒褐色(10YR3/1)シルト　しまりあり　炭化物(径１～３㎝)を３%、にぶい黄褐色(10YR4/3)地山をブロック状に10%含む。
P17
1.黄褐色(10YR5/6)シルト　粘りあり　しまり中　黒褐色土(2.5Y3/1)を斑状に含む。
P18
1.黒褐色(10YR2/2)シルト　少しグライ化する。
2.にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト
P19
1.黒褐色(10YR2/2)シルト　粘りあり　少しグライ化する。柱痕。
2.黒褐色(10YR3/1)シルト　粘りあり　にぶい黄褐色土(10YR5/4)を20%斑状に含む。
P20
1.にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト　しまり中　粘りあり　黒褐色土(10YR2/2)を40%、暗褐色土(7.5YR3/4)を10%含む。柱痕。
2.にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト　しまり中　粘りあり　黒褐色(10YR2/2)土を50%斑状に含む。





P21
1.暗褐色(10YR3/3)シルト　しまりやや弱　炭化物(径１㎜程)を１%含む。
2.黒褐色(10YR3/2)シルト　しまりあり　地山(10YR5/3)をブロック状に10%、径１～３㎜の炭化物を１%含む。
P22・23
1.にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト　しまりやや弱
2.黒褐色(10YR3/2)シルト　しまりあり　地山(10YR5/3)をブロック状に10%含む。径１～３㎜の炭化物を３%含む。
P24
1.黒褐色(10YR3/2)シルト　しまりあり　地山(10YR5/3)をブロック状に20%含む。
2.黒褐色(10YR3/2)シルト　しまりあり　地山(10YR5/3)をブロック状に10%含む。
P25
1.黒褐色(10YR3/2)シルト　しまり弱　細かな砂利を３%含む。
P26
1.オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト　粘りあり　しまり中　黒褐色土(2.5Y3/1)が斑状あるいは水平に50%堆積する。

0　2m

第９図　ＳＢ10掘立柱建物跡柱穴(２)

遺構No.	挿図No.	検出地区	平面形			深さ	材		礎板等		備考	図版No.
			形	長径	短径		断面形	太さ	種類	規模		
1	8	LO47	円形	0.38	0.36	0.20					柱痕	
2	7	LO48	略円形	0.49	0.48	0.29						
3	8	LP47	円形	0.44	0.44	0.22	四角形	0.8×0.6				
4	8	LP47	略円形	0.67	0.58	0.15						
5	8	LQ47	円形	0.36	0.35	0.37	正方形	0.17×0.16				4－5
6	8	LQ47	円形	0.42	0.41	0.16			礎板	0.17×0.40		
7	7	LP49	略円形	0.60	0.54	0.48			礎板	0.40×0.20		
8	8	LP48	円形	0.49	0.43	0.37	四角形	0.18×0.16				4－1・2
9	8	LP48	円形	0.34	0.26	0.29	四角形	0.17×0.14				4－2
10	8	LP48	円形	0.60	0.49	0.40	正方形	0.2×0.2				4－3・4
11	8	LQ48	円形	0.45	0.43	0.34			礫	0.70×0.60	柱痕	
12	8	LQ49	円形	0.52	0.50	0.53	正方形	0.15×0.15				4－6
13	8	LQ49	円形	0.65	0.62	0.27			礎板	0.36×0.90		4－7
14	8	LQ50	円形	0.55	0.52	0.21(0.25)			礎板	0.36×0.90		4－8
15	9	LO50	円形	0.56	0.53	0.42(0.45)			礎板	0.45×0.18		5－1
16	9	LP50	円形	0.57	0.52	0.26	長方形	0.12×0.11				5－2
17	9	LP50	円形	0.61	0.56	0.44	長方形	0.17×0.15				5－3
18	9	LQ50	円形	0.51	0.50	0.10(0.18)			礎板	0.36×0.15		5－4
19	9	LQ50	円形	0.46	0.37	0.12	楕円形	0.14×0.10				
20	9	LQ50	円形	0.36	0.34	0.36						
21	9	LP47	円形	0.62	0.57	0.27						5－5
22	9	LQ49	円形	0.66	0.65	0.26(0.41)			礎板	0.42×0.34		5－6
23	9	LQ49	円形	0.37	—	0.26						5－6
24	9	LP49	略円形	0.50	0.47	0.43					柱痕	
25	9	LP49	略円形	0.47	0.39	0.58	長方形	(0.18)×0.15	礎板	0.17×0.14		5－7
26	9	LQ49	円形	0.46	0.45	0.39	長方形	0.20×0.18				5－8
27	7	LO47	—	—	—	—	三角形	0.80×0.70				

1．計測値単位はすべてmである。
2．深さで(　)内の計測値は礎板等の下までの値である。

第１表　ＳＢ10掘立柱建物跡柱穴計測表

遺構No.	検出地区	平面形			深さ	材		礎板等		備考
		形	長径	短径		断面形	太さ	種類	規模	
3	LP48	円形	0.55	0.55	0.35					
7	LP48	略円形	0.68	0.53	0.56					SKP08と切り合う
8	LP48	略円形	0.14	0.12	0.56					SKP07と切り合う
9	LO48	円形	0.32	0.25	0.21					
10	LO48	円形	0.32	0.30	0.31					
11	LP48	円形	0.32	0.29	0.10					
12	LP48	円形	0.30	0.29	0.15					
14	LP48	円形	0.61	0.56	0.20					
15	LO48	略円形	0.30	0.17	0.07					
17	LP48	円形	0.41	0.34	0.13					
18	LP48	略円形	0.38	0.36	0.40					
19	LP48	略円形	0.34	0.25	0.18					
20	LO48	不整円形	0.45	0.35	0.31					
21	LO48	円形	0.34	0.33	0.31(0.34)			礎板	0.16×0.06	
24	LO48	略円形	0.38	0.31	0.41					
25	LO47	不整円形	0.44	0.32	0.42					
26	LO47	不整円形	0.33	0.33	0.25					
27	LO47	円形	0.40	0.35	0.13					
28	LO47	不整円形	0.45	0.42	0.24(0.30)			礎板	0.29×0.18	
30	LP48	略円形	0.23	0.18						
31	LP48	略円形	0.55	0.48	0.12(0.18)			礎板	0.21×0.09	
32	LP48	円形	0.47	0.42	0.32			礫	0.10×0.08	
34	LQ47	円形	0.54	0.52	0.43	長方形				
35	LP47	略円形	0.44	0.37	0.30	三角形	0.16×0.14			
36	LP47	略円形	0.39	0.32	0.15					
37	LP47	円形	0.38	0.34	0.21					
38	LP47	円形	0.37	0.35	0.27					
39	LP47	円形	0.27	0.26	0.26					
44	LO48	略円形	0.47	0.39	0.26					
45	LO47	不整円形	0.65	0.58	0.40					
46	LO47	円形	0.29	0.25	0.17					
47	LO47	(円形)	0.56	0.56	0.45					
51	LP47	円形	0.19	0.16	0.23					
52	LP46	円形	0.37	0.36	0.26					
55	LP46	略円形	0.19	0.16	0.18					
56	LP46	略円形	0.50	0.45	0.17					
57	LP46	略円形	0.45	0.32	0.18(0.22)			礎板	0.18×0.06	
61	LQ49	円形	0.25	0.24	0.18(0.22)			礎板	0.13×0.06	
68	LR49	円形	0.23	0.22	0.13					
69	LR49	円形	0.34	0.33	0.10					
71	LR49	円形	0.30	0.28	0.25					
72	LR49	円形	0.18	0.17	0.10					
74	LR49	円形	0.29	0.29	0.07					
75	LR49	円形	0.36	0.36	0.17(0.33)			礎板	0.15×0.04	
76	LR50	円形	0.37	0.36	0.52					
78	LP49	円形	0.42	0.40	0.38					
82	LQ48	円形	0.38	0.36	0.25(0.31)			礎板、礫	0.16×0.04	

第２表　柱穴跡計測表（１）

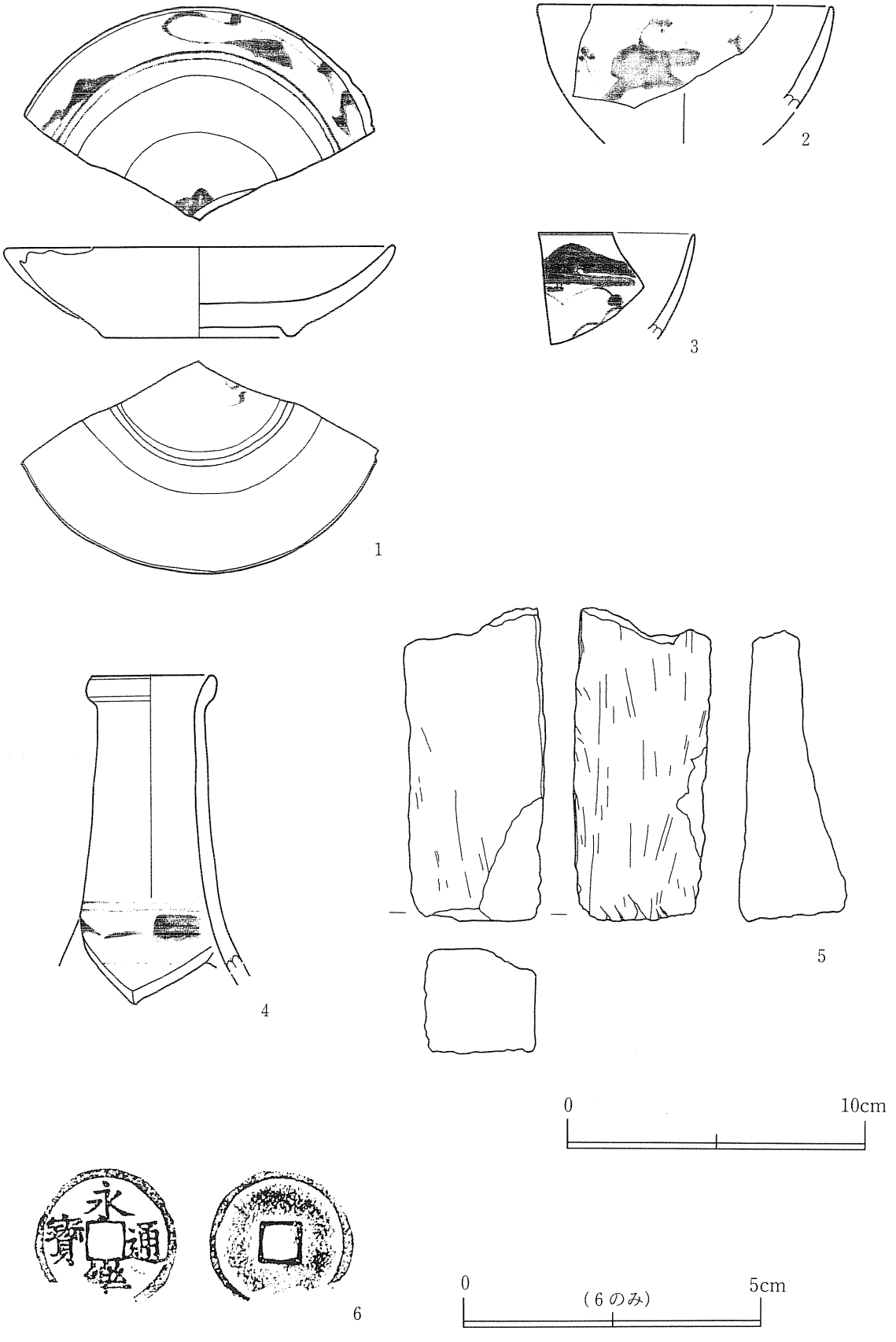
遺構No.	検出地区	平面形			深さ	材		礎板等		備考
		形	長径	短径		断面形	太さ	種類	規模	
84	LQ48	円形	0.37	0.35	0.15					
86	LQ48	円形	0.48	0.44	0.38			礎板	0.07×0.05	
87	LQ48	円形	0.25	0.23	0.08					
93	LP50	円形	0.40	0.34	0.38					
94	LP49	円形	0.45	0.45	0.32					
97	LP49	円形	0.35	0.33	0.20					
98	LP49	円形	0.35	0.33	0.11					
99	LP50	円形	0.30	0.30	0.09(-)			礫	0.18×0.09	
103	LP47	円形	0.39	0.35	0.34					
104	LP47	円形	0.46	0.39	0.09					
107	LP46	略円形	0.40	0.36	0.22					
108	LP47	略円形	0.55	0.41	0.22(0.26)			礫	0.18×0.13	
109	LP47	円形	0.36	0.31	0.23					
111	LP48	略円形	0.49	0.47	0.32	四角形	0.15×0.13			
112	LQ47	円形	0.45	0.41	0.31					
113	LQ48	円形	0.28	0.27	0.06					
114	LP49	略円形	0.50	0.42	0.25					
116	LQ48	円形	0.37	0.35	0.23					
118	LQ46	略円形	0.48	0.40	0.25			礫	0.15×0.05	
120	LO47	円形	0.40	0.34	0.20					
121	LP46	略円形	0.56	0.45	0.19(0.27)			礫	0.12×0.05	
122	LQ48	円形	0.32	0.32	0.25	長方形	(0.14×0.12)			
127	LO50	円形	0.25	0.22	0.26					
128	LO50	略円形	0.23	0.21	0.36					
129	LN50	円形	0.54	0.51	0.18					
130	LN50	円形	0.53	0.50	0.30			礎板	0.35×0.09	
131	LN50	円形	0.42	0.40	0.20					
132	LN50	円形	0.37	0.33	0.08					
133	LN50	円形	0.38	0.37	0.27					
134	LN50	円形	0.25	0.23	0.27					
135	LN50	略円形	0.48	0.38	0.40	長方形	(0.20)×0.17			
136	LN50	円形	0.26	0.25	0.19					
137	LN50	円形	0.32	0.32	0.30					
139	LO50	円形	0.27	0.25	0.07(-)			礫	0.06×0.06	
140	LO50	円形	0.65	0.65	0.11(0.17)			礫	0.31×0.19	
141	LO50	円形	0.43	0.41	0.14					
142	LN49	円形	0.37	0.35	0.20					
143	LN49	円形	0.44	0.43	0.36					
144	LN49	円形	0.30	0.28	0.40					
145	LO50	円形	0.48	0.46	0.21					
146	LO49	円形	0.44	0.41	0.11					
147	LO49	円形	0.80	0.78	0.24(0.28)			礫	0.24×0.22	
148	LN48	(円形)	0.39	0.30	0.45(0.50)			礎板	0.10×0.09	
149	LO48	円形	0.49	0.46	0.42					
151	LO48	楕円形	0.55	0.41	0.24(0.32)			礫	0.19×0.15	
152	LO48	円形	0.32	—	0.16					
153	LO48	略円形	0.31	0.27	0.23					

第 3 表　柱穴跡計測表(2)

遺構No.	検出地区	平面形			深さ	材		礎板等		備考
		形	長径	短径		断面形	太さ	種類	規模	
154	LO48	略円形	0.35	0.28	0.14					
155	LO48	円形	0.37	0.29	0.38					
156	LN49	略円形	0.37	0.32	0.42					
157	LO48	円形	0.46	0.46	0.38					
158	LO48	円形	0.38	0.36	0.26					
159	LO48	円形	0.34	0.30	0.20					
160	LO48	円形	0.53	0.49	0.37					
161	LO48	略円形	0.39	0.30	0.32					
162	LO48	円形	0.54	0.52	0.28(0.34)			礫	(0.37)×0.1	
163	LO48	不整円形	0.37	0.35	0.28					
164	LP49	不整円形	0.29	0.27	0.20(0.22)			礎板	0.08×0.04	
166	LP49	楕円形	0.42	0.28	0.42					
167	LO49	略円形	0.37	0.29	0.20					
169	LO47	略円形	0.37	0.28	0.11					
170	LO48	略円形	0.41	0.35	0.26					
171	LO50	円形	0.27	0.25	0.16					
172	LP49	円形	0.59	0.56	0.30					
173	LP47	円形	0.39	0.37	0.16	丸、四角？	0.17×0.16			
174	LR50	円形	0.32	0.31	0.39	長方形？	0.13×0.10			
175	LO47	(円形)	0.69	—	0.59			礫	0.19×0.15	
176	LN50	円形	0.39	0.37	0.16					
177	LP48	円形	0.26	0.24	0.19					
178	LO50	円形	0.39	0.34	0.13					
180	LO50	円形	0.72	0.69	0.09					
181	LO50	円形	0.48	0.48	—					
182	LP50	円形	0.46	0.43	0.24					
183	LP51	円形	0.40	0.40	0.32					
184	LP52	円形	0.38	0.37	0.16					
185	LO52	円形	0.38	0.38	0.40					
186	LO52	円形	0.23	0.21	0.12					
187	LO52	円形	0.36	0.33	0.11					
188	LO53	円形	0.31	0.30	0.38					
189	LO53	円形	0.32	0.30	0.17					
190	LO53	略円形	0.41	0.32	0.44					
191	LO53	円形	0.28	0.26	0.11					
192	LN54	円形	0.31	0.28	0.18					

1．計測値単位はすべてｍである。
2．深さの括弧内の計測値は礎板等の下までの値である。

第４表　柱穴跡計測表（３）



第10図　遺構内出土遺物

第３節　遺構外出土遺物

今回の調査で遺構外からは須恵器、土師器、陶器が出土した。昨年度におこなわれた範囲確認調査では、他に土師器や底部に墨書のある須恵器の坏も出土している。出土位置は豊川左岸であり、今回の調査区から北に約100mの所で、地表面から１m～1.8m掘り下げた所から出土している。河川流域の淀みに堆積したもので調査区外出土ではあるが、参考資料として掲載することとする。遺物の計測表は第５表に記した。出土位置に19・22・25・32トレと記載してあるものは範囲確認調査で出土した遺物である。

１　須恵器(第11～12図、第13図１・２)

坏・高台付坏・甕・壷が出土している。

坏・高台付坏(第11図１～４)

１は口径12.8cm、底径6.8cm、器高3.3cmの坏である。体部下半がふくらみを帯びる。底部は回転ヘラ切りによりロクロから切り離され、さらに「曳」の字が墨書されている(図版８－１)。９世紀前半のものと考えられる。２の底部も回転ヘラ切りによりロクロから切り離される。３は底径が11.2cmであり、大ぶりの高台付坏と考えられる。底面は切り離しの後ヘラにより平坦になるよう二次調整されている。高台は底部の縁辺に沿うように取り付けられ、高台から体部にかけては「く」の字形に屈曲する。高台の高さは0.6cmである。４は高台付坏で、底径が6.8cm、高台の高さが1.2cmである。

甕(第11図５～９、第12図)

第11図５は体部中央付近に最大径をもち、口頸部は緩やかに外湾、口縁部が外側に張り出す。さらに口唇部は丸みを帯びる。ロクロ成形で、体部下半にのみ平行タタキメと平行アテ具痕が施されている。第11図６～９、第12図はすべて甕の破片である。ロクロ成形後、外面にタタキメ、内面にアテ具痕が残るものが多い。タタキメ・アテ具痕ともすべて平行のものである。第12図３はタタキメが直交して格子目状に付くのが確認されている。第12図１は体部上半から口頸部にかけて残存するものである。器厚等から、大甕であると考えられる。

壷(第13図１・２)

壷は２点出土している。第13図１は高台付きの壷である。高台部分が剥落しているが、高台から体部にかけて緩やかに外傾しながら立ち上がる。第13図２は小型の壷で、器面には焼成時に付いた瘤状のふくらみが見られる。

２　土師器(第13図３～７、第14図１～４)

土師器はすべて範囲確認調査で出土したものである。坏・甕が出土している。

坏(第13図３～５)

第13図３は、底部から口縁部まで直線的に外傾しながら立ち上がる。底部は切り離しの方法は不明だが、切り離しの後に回転ヘラケズリ調整されており、中心に向かってやや窪んでいる。内面には漆が付着し、特に体部に集中している。第13図４・５は回転糸切りによる底部切り離しである。内外面ともロクロナデで成形されている。

甕(第13図６・７、第14図１～４)

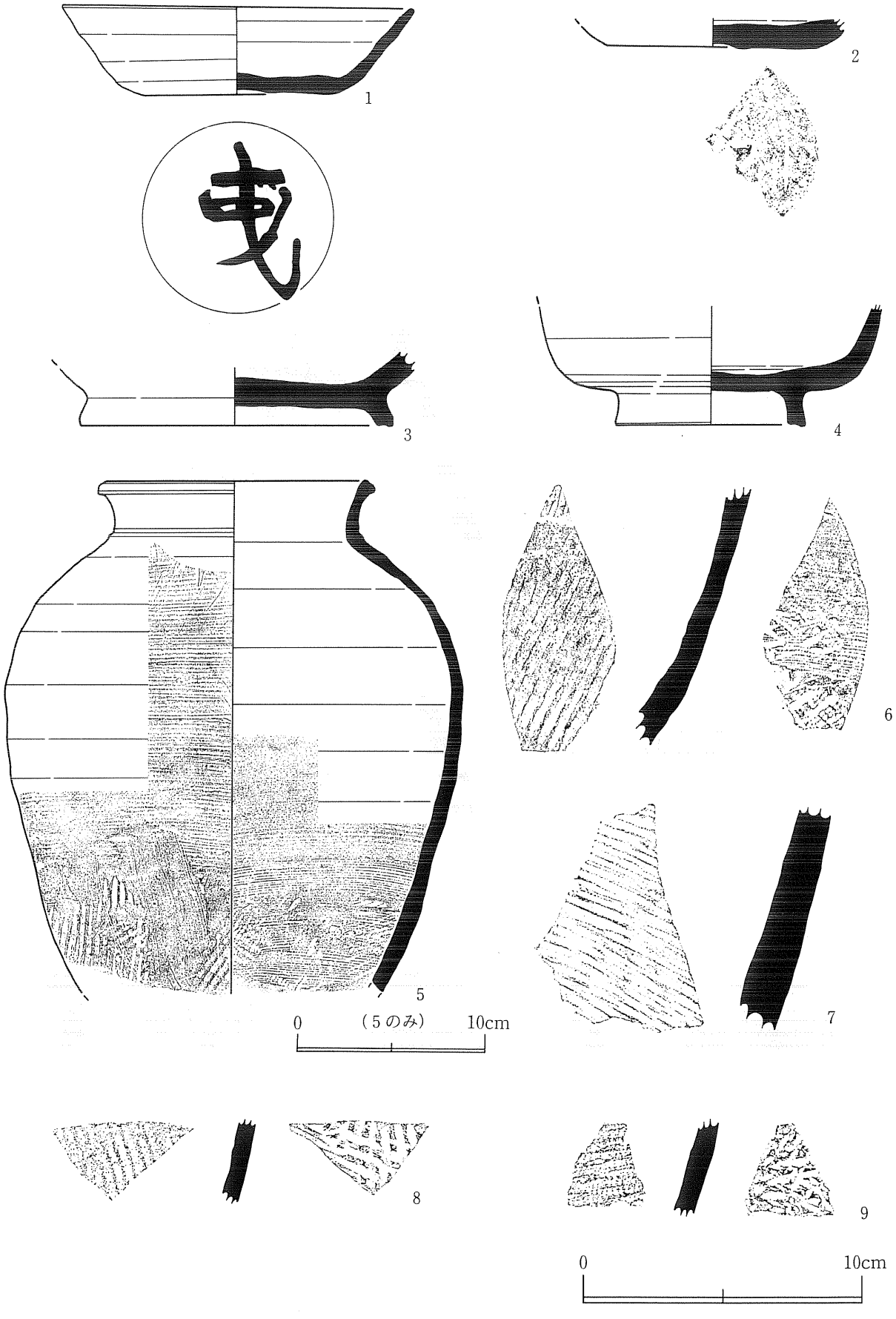
第13図６は甕の口頸部から体部にかけてのみ残存している。体部は斜方向にハケメ調整、口頸部は横方向にミガキが施される。また、口頸部には数状の沈線を有し、緩やかに外湾しながら立ち上がると考えられる。同図７と第14図１・２は同一個体である。体部がやや内傾しながら立ち上がり、口頸部が外傾する。口頸部から口縁部にかけては逆「く」の字形状に摘み出される。外面にタタキメ、内面にアテ具痕が見られる。第14図３は外面にタタキメ、内面にアテ具痕が見られ、外面には炭化物が付着している。同図４は内外面ともロクロナデにより成形されている。

３　陶器(第14図５～８)

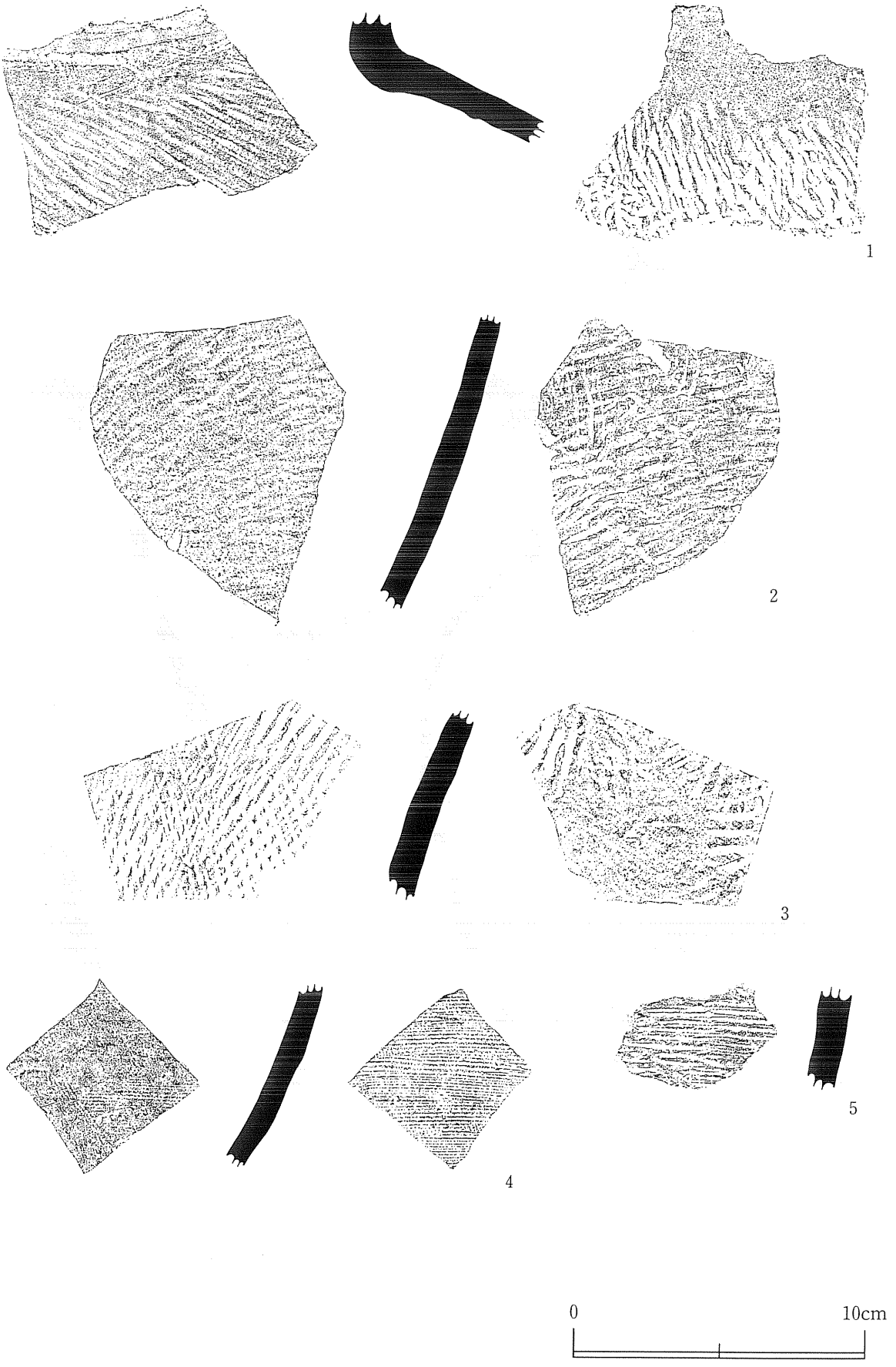
陶器では擂鉢が出土した。概して卸目の摩滅は少ない。第14図５は口縁部内面に波状文をもち、珠洲系のものであると考えられる。同図８は底部付近から体部下半にかけて残存している。赤褐色を呈する。

参考文献

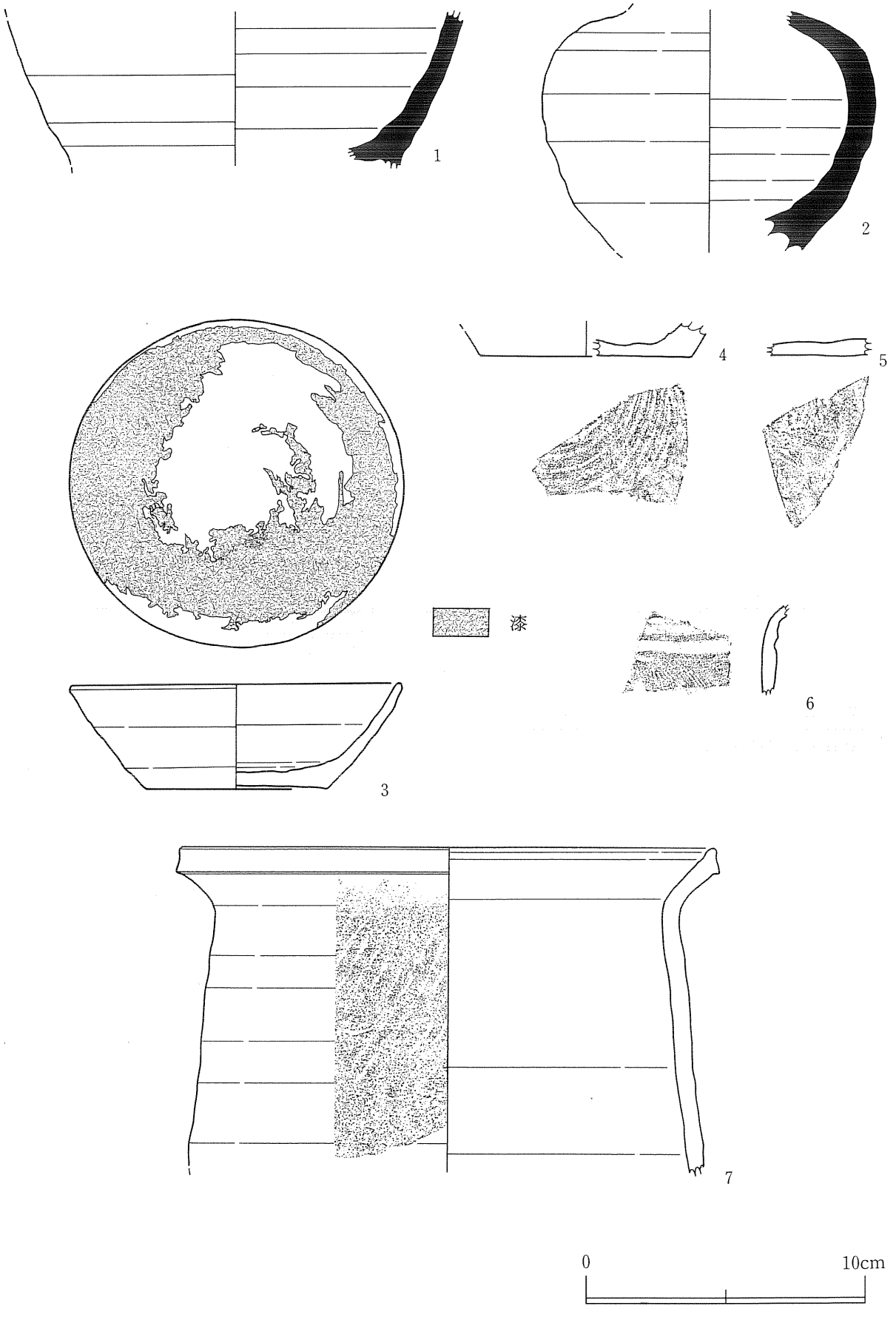
高橋與右衛門　「岩手県に於ける中・近世の掘立柱建物跡―遺跡紹介を中心として―」　『紀要Ⅰ』
(財)岩手県埋蔵文化財センター　1981(昭和56)年
高橋與右衛門　「掘立柱建物跡の間尺とその時代性」　『紀要Ⅸ』　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
1989(平成元)年
秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅺ―竹原窯跡―』　秋田県文化財調査報告書第209集
1991(平成３)年
秋田県教育委員会　『秋田ふるさと村(仮称)建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―富ヶ沢Ａ・Ｂ・Ｃ窯跡　田久保下遺跡　富ヶ沢１号～４号塚』　秋田県文化財調査報告書第220集　1992(平成４)年
羽柴直人　「西和賀地方の近世民家」　『紀要ⅩⅢ』　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
1993(平成５)年
高橋與右衛門　「掘立柱建物跡からみた南部「曲り家」出現期の一試案」　『紀要ⅩⅢ』
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1993(平成５)年
高橋　学　「再び「口縁部に沈線文をもつ土師器」について―秋田県域での事例―」　『秋田考古学』第46号
1998(平成10)年
秋田県教育委員会　『洲崎遺跡―県営ほ場整備事業(浜井川地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』
秋田県文化財調査報告書第303集　2000(平成12)年



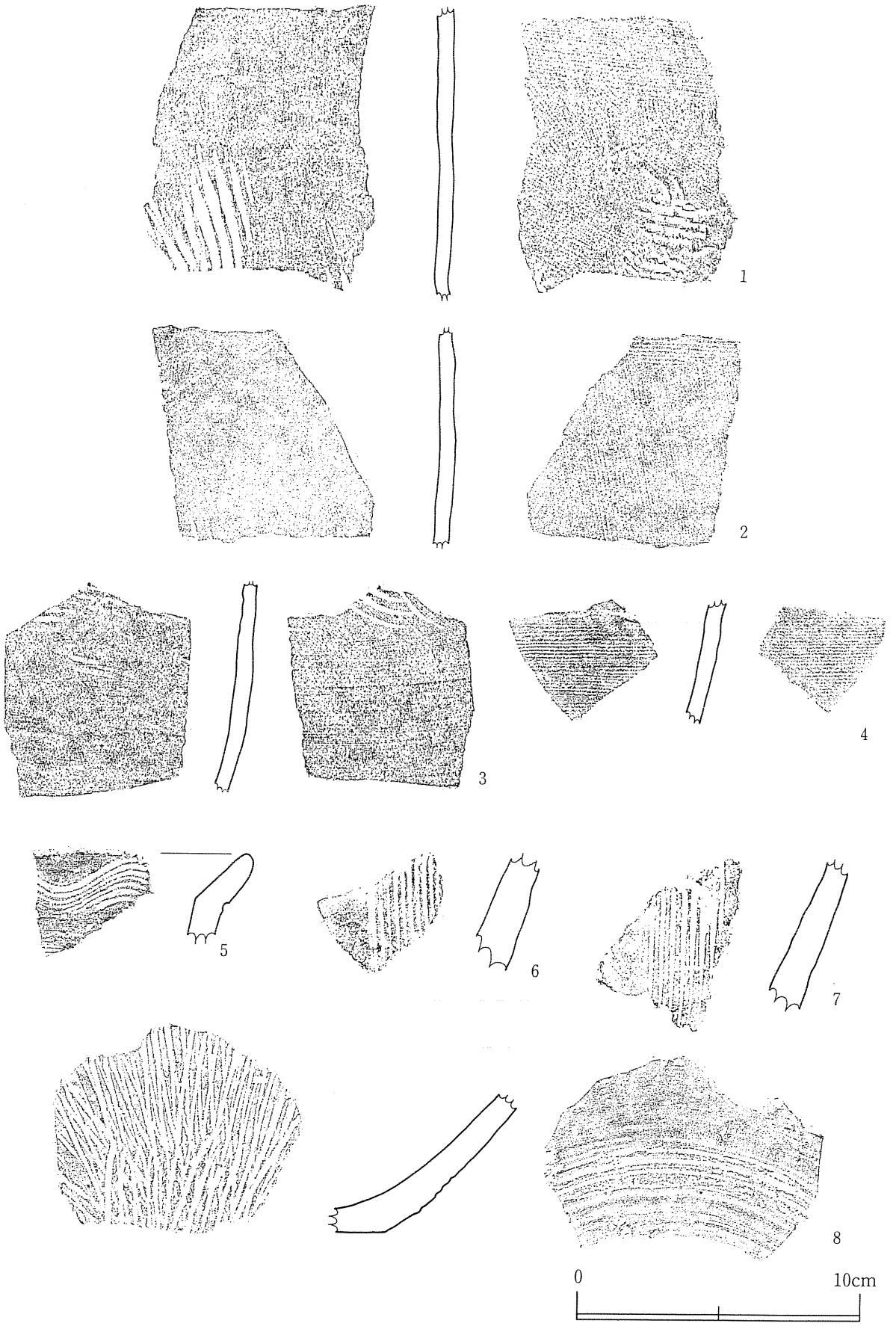
第11図　遺構外出土遺物（１）



第12図　遺構外出土遺物（２）



第13図　遺構外出土遺物（３）



第14図　遺構外出土遺物(４)

挿図No.	出土地区	種類	器種	口径	底径	器高	内外面調整	底面調整	備考	図版No.
11－1	19トレ	須恵器	杯	12.8	6.8	3.3	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	回転ヘラ切り	底面に墨書「曳」	7－1 8－1
11－2	LM58	須恵器	杯	—	6.2	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	回転ヘラ切り		
11－3	LM58	須恵器	高台付坏	—	11.2	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	不明		
11－4	LN56	須恵器	高台付坏	—	6.8	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	—		7－2
11－5	19トレ	須恵器	甕	13.8	—	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	—		7－5
11－6	19トレ	須恵器	甕	—	—	—	外面：タタキメ 内面：アテ具痕	—		
11－7	LN56	須恵器	甕	—	—	—	外面：タタキメ 内面：アテ具痕	—		
11－8	19トレ	須恵器	甕	—	—	—	外面：タタキメ 内面：アテ具痕	—		
11－9	22トレ	須恵器	甕	—	—	—	外面：タタキメ 内面：アテ具痕	—		
12－1	19トレ	須恵器	甕	—	—	—	外面：タタキメ 内面：アテ具痕	—		
12－2	19トレ	須恵器	甕	—	—	—	外面：タタキメ 内面：アテ具痕	—		
12－3	LN56	須恵器	甕	—	—	—	外面：タタキメ 内面：アテ具痕	—		
12－4	19トレ	須恵器	甕	—	—	—	外面：タタキメ 内面：アテ具痕	—		
12－5	32トレ	須恵器	甕	—	—	—	外面：タタキメ 内面：アテ具痕	—		
13－1	19トレ	須恵器	壺	—	—	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	—		
13－2	LM57	須恵器	壺	—	—	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	—		7－3
13－3	19トレ	土師器	杯	11.7	6.5	3.8	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	回転ヘラケズリ	内外面漆付着	7－4
13－4	19トレ	土師器	杯	—	7.6	—	外面：— 内面：ロクロナデ	回転糸切り		
13－5	22トレ	土師器	杯	—	—	—	外面：— 内面：ロクロナデ	—		
13－6	19トレ	土師器	甕	—	—	—	外面：ハケメ→ミガキ 内面：ナデ	—		
13－7	19トレ	土師器	甕	19.2	—	—	外面：タタキメ→ロクロナデ 内面：ロクロナデ	—	外面炭化物付着	
14－1	19トレ	土師器	甕	—	—	—	外面：ロクロナデ→ヘラケズリ→タタキメ 内面：ロクロナデ→アテ具痕	—	外面炭化物付着	
14－2	19トレ	土師器	甕	—	—	—	外面：ロクロナデ→ヘラケズリ→タタキメ 内面：ロクロナデ	—		
14－3	19トレ	土師器	甕	—	—	—	外面：ロクロナデ→ヘラケズリ→タタキメ 内面：ロクロナデ→アテ具痕	—		
14－4	19トレ	土師器	甕？	—	—	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	—		
14－5	25トレ	陶器	珠洲擂鉢	—	—	—	口縁に波状文	—		8－3
14－6	LN54	陶器	擂鉢	—	—	—		—		
14－7	LR46	陶器	擂鉢	—	—	—		—		
14－8	32トレ	陶器	擂鉢	—	—	—	外面：ロクロナデ→施釉	—		8－2

＊計測値単位はすべてcmである。

第５表　遺構外出土遺物計測表

第3章　まとめ

今回の調査で検出された遺構は、第2章で記した通り土坑5基、掘立柱建物跡1棟、柱穴様ピット132基である。遺構の分布状況から、遺跡は調査区東側の現集落に広がるものと考えられる。ここでは、特記すべき第4号土坑について述べることとする。

第2章で詳述したように、2.6m×1.1mの隅丸長方形を呈し、内部から桶が2基並んで検出された。確認面から桶の検出面までは0.3m程ある。桶の上部には板材や丸太がかぶっており、内部は空洞であった。また、確認面や桶の検出面からは多数の礫が出土しており、遺構の廃絶の際に投棄したものと考えられる。桶を覆う板や丸太とともに、陶磁器が出土している。いずれも近世あるいは近世以降に属するものであり、遺構もこの時期に機能していたと考えられる。

この遺構は、桶が埋設されていることから井戸あるいはトイレ状遺構の可能性が推定された。調査区の東に隣接する民家内には現在も使用されている井戸が1基ある。写真での確認であるが、この井戸では水溜として使用されているものが桶であり、井戸側は横板で保持されている。第4号土坑では井戸側に相当するような構造物は確認されておらず、水溜として桶が2基同時期に併存して使用されていた例が確認されないことから、井戸として使用されていた可能性は薄いと考えられる。

トイレ状遺構は古代から多数確認されている。秋田県内では秋田市秋田城跡や大館市矢立廃寺跡等から古代・中世のトイレ状遺構が検出されている。これらはピットを利用したものであり、桶等の埋設は見られない。内部に桶が埋設されていた遺構が検出された遺跡には、近世から近代の東京都汐留遺跡や広島県吉川元春館跡等がある。汐留遺跡では計425基の埋桶が検出されており、脇坂家屋敷跡からは397基が屋敷外郭域に集中している。桶は底板が残り、径が約40cm、深さ約50cmであり、覆土からは陶磁器片・瓦片が出土している。桶内部の土壌分析から、トイレとして使用されていたものと推定されている。第4号土坑から出土した2基の桶は径30cmと38cm、深さ50cmと45cmである。桶の規模はほぼ汐留遺跡の埋桶と一致している。大きな違いは底板の有無であるが、第2章で述べたように3層のしまりが非常に弱いため、桶を掘り込んで設置したのではなく、押し込むようにして設置したためにはずされたものと考えられる。以上から、形態からみると第4号土坑はトイレとして使用されていた可能性が高い。

参考文献

大館市教育委員会　『大館市矢立廃寺発掘調査報告書』　1987(昭和62)年
大田区立郷土博物館　『企画展「考古学トイレ考」図録』　1996(平成8)年
東京都教育文化財団・東京都埋蔵文化財センター『汐留遺跡―旧汐留貨物駅跡地内遺跡の調査―』
1997(平成9)年

1　調査区全景
（南→）

2　A区東側近景
（西→）

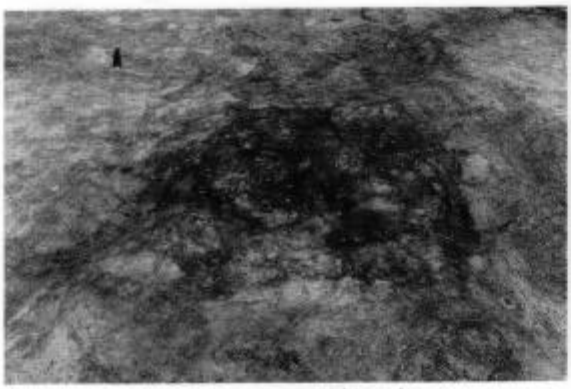
3　A区東側近景
（西→）

図版2

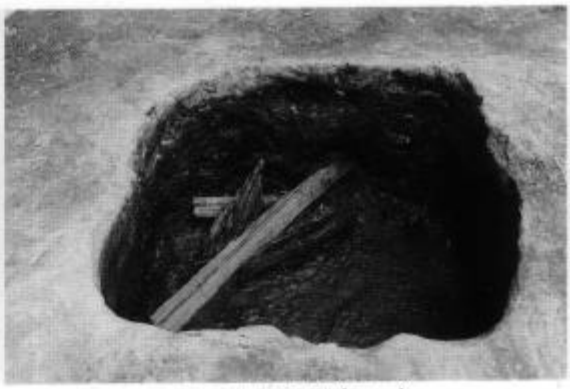
1　ＳＫ04確認
（南→）

2　ＳＫ04遺物
出土状況（北→）

3　ＳＫ04桶断面
（北→）



1　ＳＩ01確認(西→)



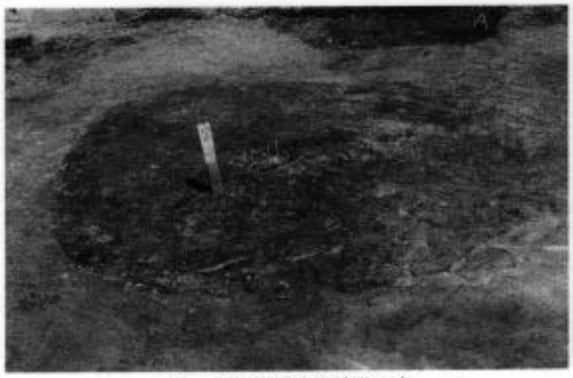
2　ＳＫ01完掘(西→)

3　ＳＫ02確認(東→)

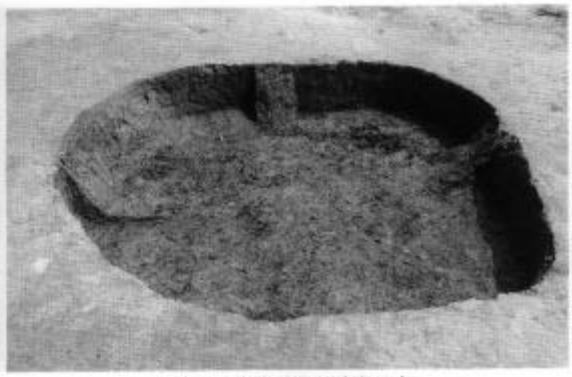
4　ＳＫ02完掘(南→)

5　ＳＫ03確認(南→)

6　ＳＫ03完掘(西→)



7　ＳＫ09確認(東→)



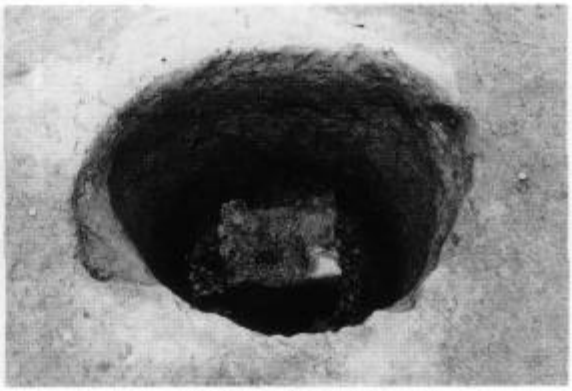
8　ＳＫ09完掘(南→)

図版4

1　ＳＢ10Ｐ８銭貨(西→)

2　ＳＢ10Ｐ８・９完掘(西→)

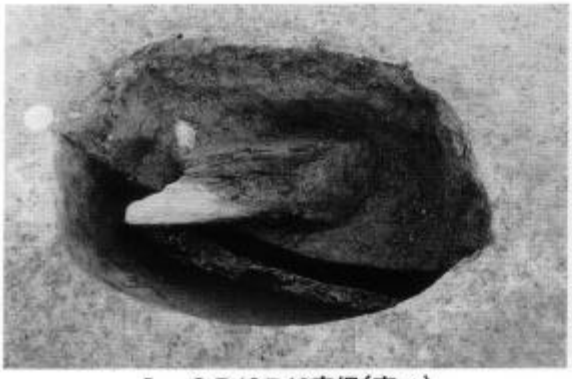
3　ＳＢ10Ｐ10土層断面(南→)



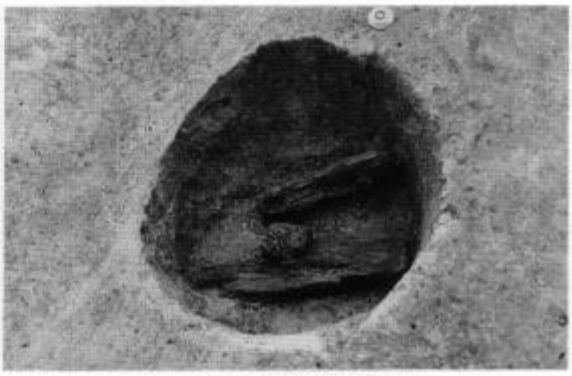
4　ＳＢ10Ｐ10完掘(南→)

5　ＳＢ10Ｐ５完掘(東→)

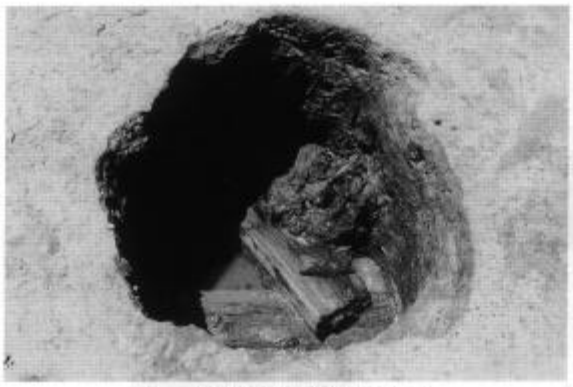
6　ＳＢ10Ｐ12完掘(南→)



7　ＳＢ10Ｐ13完掘(南→)

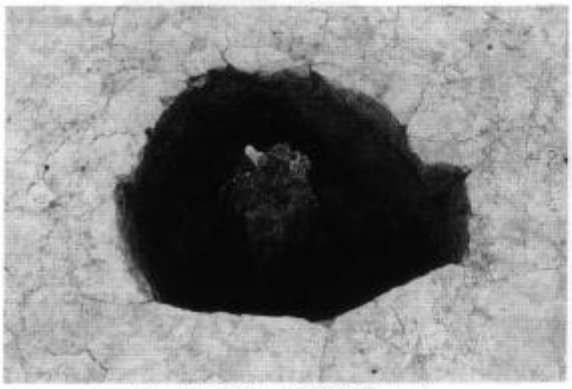


8　ＳＢ10Ｐ14完掘(西→)

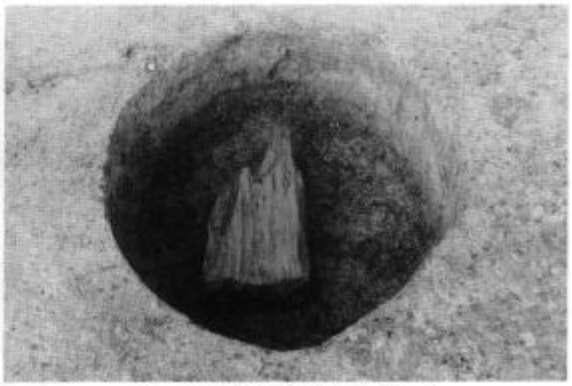


1　ＳＢ10Ｐ15完掘(北→)

2　ＳＢ10Ｐ16完掘(北→)



3　ＳＢ10Ｐ17完掘(西→)

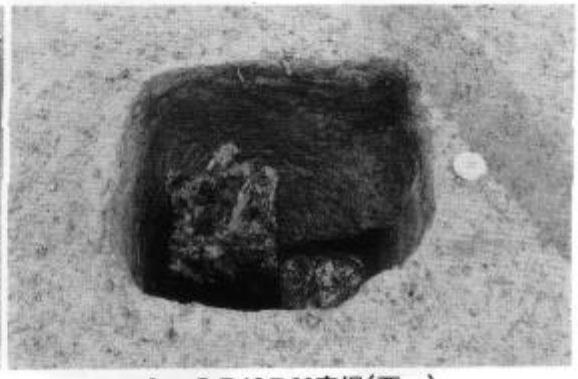


4　ＳＢ10Ｐ18完掘(西→)

5　ＳＢ10Ｐ21完掘(西→)

6　ＳＢ10Ｐ22・23完掘(南→)

7　ＳＢ10Ｐ25完掘(北→)



8　ＳＢ10Ｐ26完掘(西→)

図版6

1

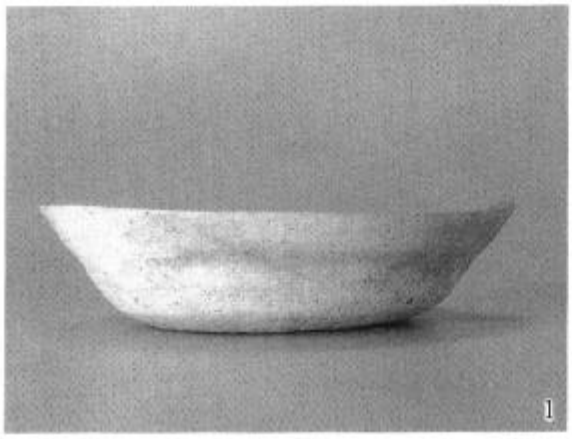
2

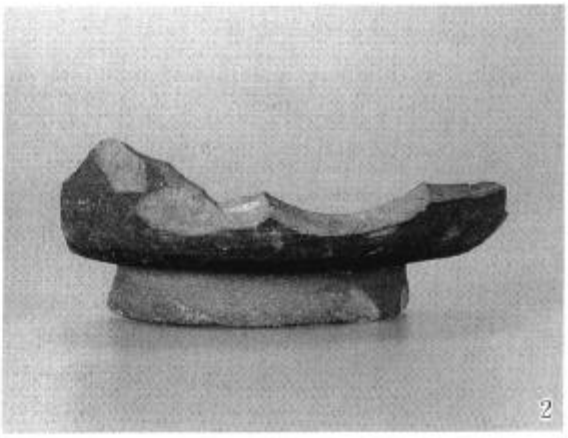
3

4

5

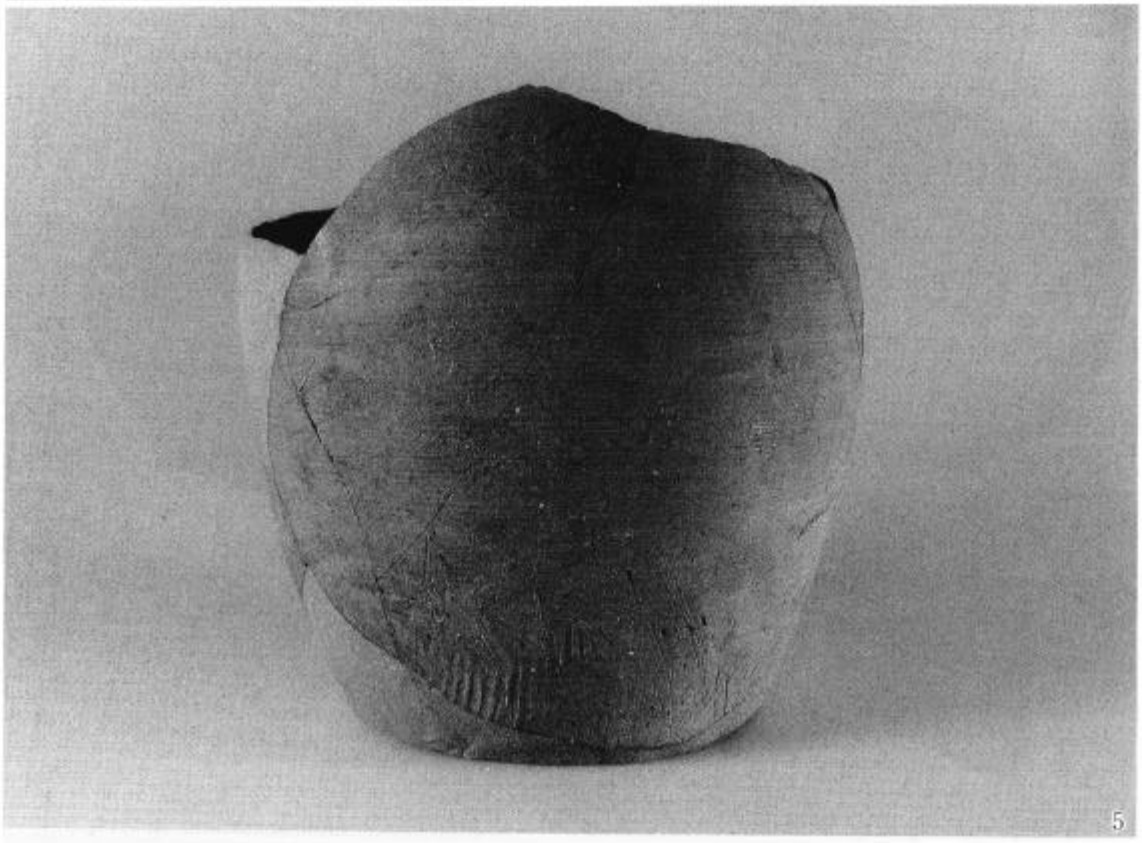
6


1

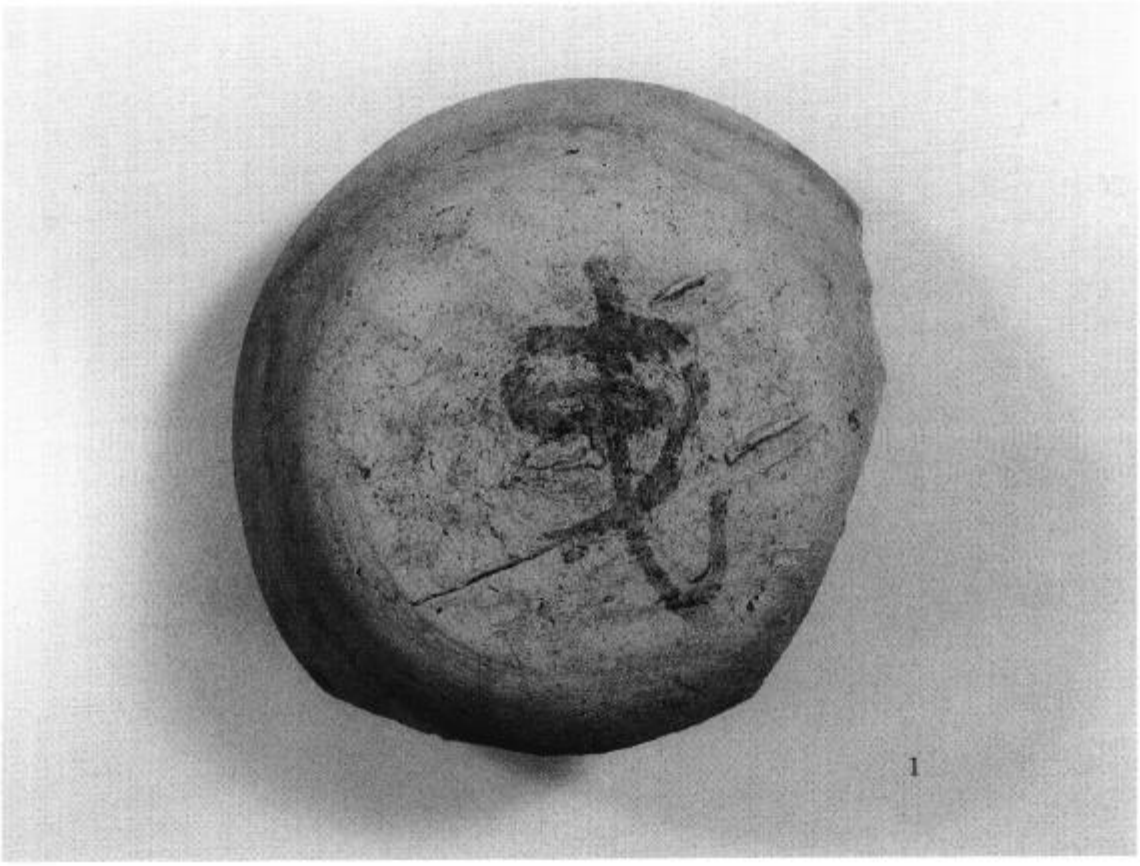

2

3

4


5

図版8



1

2

3

六ツ鹿沢遺跡

(4MRZ)

第１章　遺跡の概要

第１節　遺跡の概観

六ツ鹿沢遺跡は、南秋田郡飯田川町和田妹川字六ツ鹿沢53に所在する。ＪＲ奥羽本線羽後飯塚駅から南東へ2.0km、同大久保駅から北東へ2.6km、秋田自動車道昭和男鹿半島ＩＣから北へ3.6kmの距離に位置する。

遺跡は、太平山地に連なる丘陵西端部付近にあり、急斜面の一部が平坦になっている部分にあたる。本丘陵は、井川丘陵と呼ばれ、東に行くにしたがって大麦丘陵、狙山山地と漸次高度を増し、南東側で太平山地に続く。遺跡の北側は、急傾斜で湖東沖積低地へ下る。遺跡の標高は33m～37m、北側の沖積面の標高は10mで、およそ25mの比高をもって一気に下る。西側は丘陵最西端部に続いていく鞍部にあたるが、現在は国道７号によって分断されている。南側は小沢によって画されているが、東側はそのまま丘陵上部へと続いていく。

遺跡周辺は急傾斜になっていて、北側斜面は43％、南側斜面は32％の平均斜度をもつ。丘陵ではあるが、開析が著しく壮年期山地の様相を呈する。これは、軟弱な表層地質によるものであるが、井川丘陵の中でもとりわけ顕著である。

遺跡は、胸高直径30cmほどの杉林に覆われていたが、一部斜面は雑木と笹竹が繁茂していた。

本遺跡の北北東0.4kmには鹿来館跡が、北北西3.8kmには洲崎遺跡がある。いずれも中世を主体とする遺跡である。南南西0.8kmには縄文時代・古代の複合遺跡である西野遺跡、同じく南南西1.7kmには近世の遺跡である毘沙門遺跡がある。

第２節　調査の方法

発掘調査は、グリッド法を用いた。調査区中央付近のＳＴＡ.31＋00を基準杭として、国家座標に合わせた南北基線とこれに直交する東西基線を設け、網掛けすることにより４ｍ×４ｍのグリッドを設定した。南北線には２桁の算用数字、東西線にはアルファベット２文字の線名を付し、各グリッドは南東隅の交点の算用数字とアルファベットを組み合わせて呼称した。なお、基準杭をＭＡ50とした。

第３節　調査の経過

５月31日　範囲確認調査の際の排土を調査区外へ排出し、粗掘りを開始した。

６月１日　粗掘り・遺構検出作業を行った。

６月２日　南側・東側の縁辺部を拡張し、遺構検出作業を行うが、遺構は検出されなかった。

６月３日　地割れ痕跡を掘り下げるが、遺構は検出されなかった。地割れ断面の実測と地形測量を行った。調査終了状況、遺跡近景・遠景写真撮影を行い、機材を大平遺跡へ運搬した。

第２章　調査の記録

第１節　基本層序

調査区に設定した土層ベルトから、以下のように観察できた(第２図)。

Ⅰ層：黒褐色土(10ＹＲ2/3)しまり極弱い、粘り極弱い。草木の影響を強く受けているシルト質の黒ボク土壌。層厚は10cm～30cmである。

Ⅱ層：黒褐色土(10ＹＲ2/2)しまり弱い、粘り極弱い。腐植含有量の多いシルト質の黒ボク土壌。層厚は0～80cmで、地割れ部分でのみ認められる。

Ⅲ層：暗褐色土(10ＹＲ3/3)しまり弱い、粘り極弱い、腐植含有量のやや少ないシルト質土。層厚は0～40cmで、西部では欠落する。

Ⅳ層：黄褐色シルト岩(10ＹＲ5/6)多数の亀裂に褐色土（10YR5/6）が入る地山。

いずれもシルト質であり、地山まで浅い部分が多い。なお、調査区周辺の地質は概して砂質であり、表土以外は山砂または黄褐色シルト岩である。調査区外でも、地割れ・地滑り痕が検出され、一帯は不安定な堆積層と判断された。

第２節　調査の結果

調査の結果、調査区中央部に地割れ痕があり、遺構は全く検出されなかった。遺物は、現代のものと思われる陶磁器細片が２点出土しただけである。

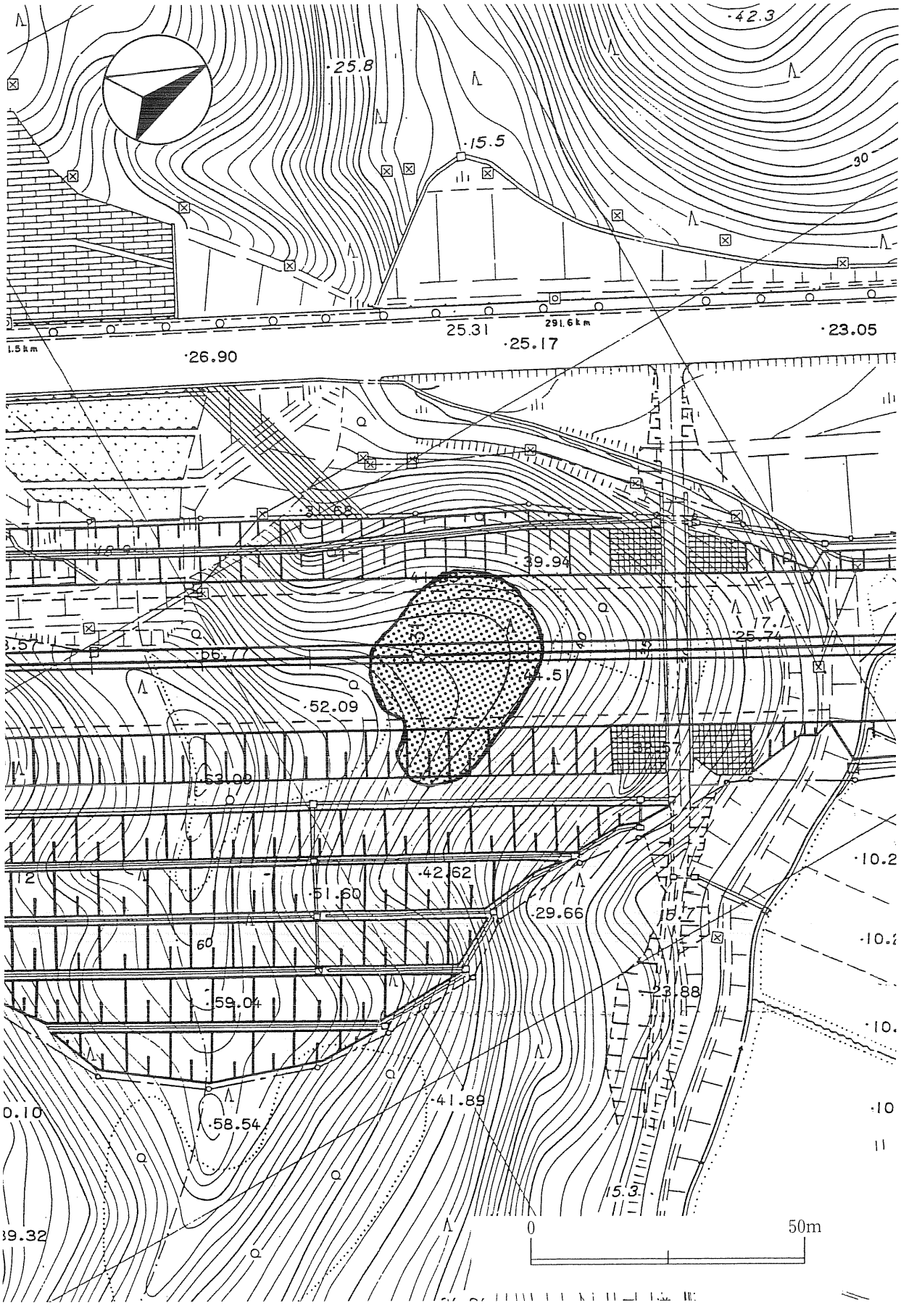
地割れは調査区中央部を南南東から、北北西に走る。その規模は長軸16.2m、短軸5.4mで、深さは２ｍを超えるものと思われる(第２図)。

範囲確認調査の対象となったのは、曲輪状の地形と判断された12,000㎡であったが、大部分で地滑り・地割れ・崩落が著しく、本調査の対象となったのは平坦部周辺900㎡だけであった。しかし、この部分についても地割れ等の自然攪乱のためか遺構とは判断できなかった。すなわち、柱穴等の遺構さえ確認できなかったのである。

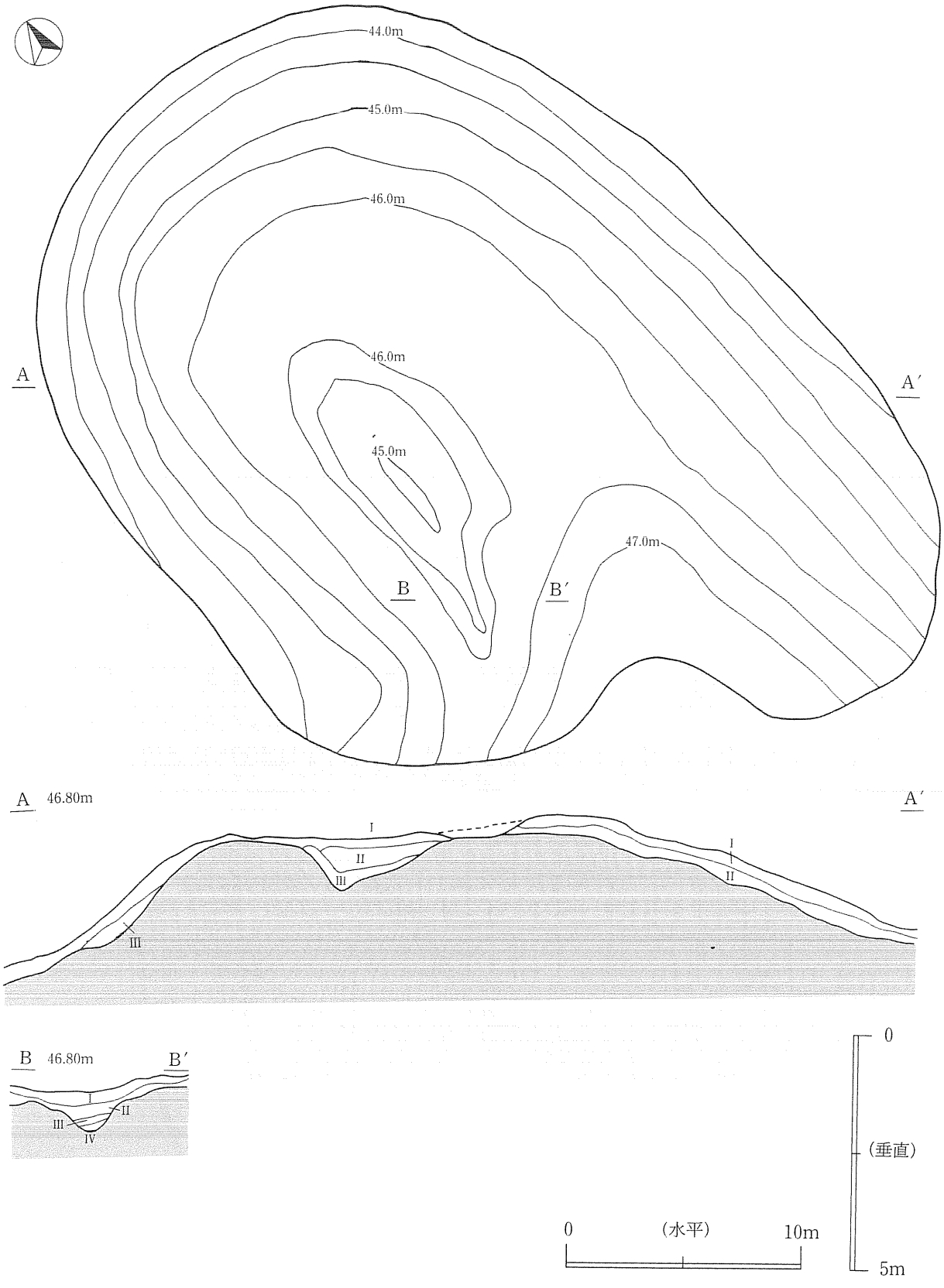
本調査対象範囲の平坦部も、また確認調査対象範囲全体が曲輪状の地形であったことは事実である。しかし、現状からは遺跡であるともないとも言い難い。つまり、現国道７号及びその西側に中世城館があった可能性は否定できないものの、現状からはその有無も不明である。

参考文献

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第270集　1997(平成９)年
秋田県教育委員会『洲崎遺跡―県営ほ場整備事業(浜井川地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―』
秋田県文化財調査報告書第303集　2000(平成12)年


·42.3
·25.8
·15.5
30
25.31
291.6km
·23.05
·25.17
·26.90
·39.94
17.1
·25.74
·52.09
·42.62
·51.60
·29.66
60
·59.04
·41.89
·58.54
15.3
0
50m

第１図　調査範囲図


44.0m
45.0m
46.0m
46.0m
45.0m
47.0m
A
A′
B
B′
A 46.80m
A′
I
II
III
III
I
II
B 46.80m
B′
I
II
III
IV
0
(垂直)
5m
0
(水平)
10m

第 2 図　復元地形図

1　遺跡遠景(北→)

2　遺跡近景(南→)

図版2

1　遺跡全景(南→)

2　地割れ断面(北→)

報告書抄録

ふりがな	もときやまね　びしゃもん　むつろくざわ
書名	元木山根II遺跡　毘沙門遺跡　六ツ鹿沢遺跡
副書名	日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	III
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第309集
編著者名	松本昌樹・小山有希・伊藤攻・齊藤浩志
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014-0802　秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20　TEL 0187-69-3331
発行年月日	西暦2000年9月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
元木山根II	秋田県 南秋田郡 昭和町 大久保字 元木山根286外	05362		39° 51′ 30″	140° 4′ 34″	19990719 ～ 19990902	1600m²	高速道路 建設事業
毘沙門	南秋田郡 昭和町 豊川龍毛字 上斉藤田12	05362		39° 52′ 2″	140° 4′ 56″	19990614 ～ 19990715	940m²	同上
六ツ鹿沢	南秋田郡 飯田川町 和田妹川字 六ツ鹿沢53外	05364		39° 52′ 49″	140° 5′ 27″	19990531 ～ 19990603	900m²	同上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
元木山根II	集落跡	古代	竪穴住居跡　2軒 焼土遺構　1基 土坑　4基	土師器・須恵器	
毘沙門	集落跡	近世	土坑　4基 掘立柱建物跡　1棟 柱穴状ピット　132基	土師器・須恵器 陶磁器	
六ツ鹿沢	散布地	中世		陶磁器	